
逆ハーっ子 が あらわれた！（仮）

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆ハーっ子が あらわれた！（仮）

【Nコード】

N9530X

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ある日やってきた逆ハーっ子に関わることなく（多分）、我が道を往く調理部男子とパソコン部女子の阿呆なお話。
私と友人のリレー小説です。
目指せ一日一話更新。

1 調理部男子

「わあっ、ありがとう！」

このお話は、

「本当？ わたしもみんなのこと、だあいすき！」

ある日、学園に突然転校してきた可愛い女の子が繰り広げる愛の物語……

2

「部長！ 部長おおおお！！」

「な、なんだ！？ どうした！？」

などではなく、

「電子レンジにいた卵が爆発しました！」

「馬鹿野郎！ お前、あれほど電子レンジで茹で卵は作るなど……！」

「おい後ろに隠した無残な卵が先生には見えたぞ広崎^{ひろさき}」

「違います先生！ これは俺の愛に耐えきれなかった卵が爆発して

……、」

「意味のわからない見え見えの嘘を吐くなあああああ！！」

その女の子の脇で繰り広げられる、

「先生！ どうぞ俺の愛を受け取って下さい！」

「先生はそんな壊れた愛は要らない」

阿呆な物語で御座います。

1 調理部男子（後書き）

あまりの短さに絶望した！

2 パソコン部女子

カタカタカタ

パソコンを早打ちして、ふと手を止め次をどうしようか考える。特に何をやるとも決めてなかったので、ずっと先の文化祭のポスターを創ることにした。

まあイラストは適当に誰かに頼もう。

「坂田先輩、ちょっと……」

思わず溜息。

また新人生がやらかしたようだ。

入部するとき下手とは言っていたがここまでとは…、ちなみに本日六回目だ。

まあ募集のとき『どんな人も大歓迎』とやったからこつちも文句は言えないし、私は副部長だから教えない訳にもいかない。

「今度はどこよ。え、ここはさつき……」

部長が最近休みがち、というか大抵休んでる気がする。なんで部長になったんだと言いたいが他に人がいないから仕方ない。

「あー、また間違えてる。だからここはこれを使えば……！」

部員数、私入れて8人・

今日も新入生相手に奮闘中です。

人物紹介（前書き）

結構適当な紹介です。随時更新。

人物紹介

名前・広崎^{ひろさき} 大和^{やまと}

容姿・黒髪茶目。イケメンで良いよ。爽やか

性格・阿呆の子。

備考・思い切り運動部で青春してそうなのに調理部

名前・坂田^{さかた} 美穂^{みほ}

容姿・一言で言えば可愛い。黒髪のツインテールで目は焦げ茶。

性格・真面目で勉強熱心。運動は全く出来ない。不器用

備考・料理が苦手。パソコン部に入っている。風紀委員らしい

名前・二階堂にかいどう

容姿・それなりにイケメソ

備考・調理部顧問。愛煙家

名前・椿つばき 小百合さゆり

容姿・栗色の胸までのカールした髪に、琥珀色の零れ落ちそうなほ
どに大きい瞳。“絶世の”がついても可笑しくなくくらは美少女。

性格・ちよつと歪んでる。

備考・イケメン好きなのを包み隠そうともしない残念な子になっ
てしまった。可笑しいな。当初はもうちよつと賢い子にしようと思
ってたはずなのに。全ては私の友人かたあかのせいです

名前・園下そのした

容姿・不明

性格・陽気……？

備考・美穂の担任兼部活の顧問

名前・宮城^{みやぎ}

容姿・フツメン

性格・阿呆

備考・大和のクラスメイトで友人。大和の後ろの席

名前・本多^{ほんだ}高志^{たかし}

容姿・イケメン

性格・阿呆

備考・美穂のクラスメイト。野球部キャプテン。
大和をどうしても野球部に入りたいけどぶっちゃけ二年生からじゃ遅いと思う

名前・夏輝 なつき

容姿・普通に美人。ショートカットで伊達眼鏡。

性格・阿呆

備考・パソコン部部长で生徒会長とは親友。少しレズっ気がある。

名前・菖蒲 あやめ

容姿・かなりの美人。髪は肩までの長さ。

性格・控えめ。大人しい子

備考・生徒会長。小百合が来るまでは男子の中で一番人気だったが、夏輝が傍にいるから彼氏は一度も出来たことがない。レズっ気有。

名前・青山 あおやま

容姿・ちよいイケメン。髪の毛ピンとかで止めてそんなイメージ。
何故か

性格・阿呆。レンジでゆで卵を作るのが大好き

備考・名前出すつもりはなかったんだけど、無いと何かと不便だと
気付いて急遽名前有キャラに。松島と仲が良いが、其処に恋愛感情
が含まれているのかは不明

名前・松島まつしま

容姿・ちよい美少女。髪の毛はポニーテールなイメージ。何故か

性格・青山と同じ

備考・青山と同じ

名前・奥おく 恵斗けいと

容姿・イケメン

性格・腹黒かったら良いね

備考・生徒会副会長。しかし、今は仕事をさぼっている。越戸と二人セツトで生徒会の夫婦

名前・越戸 おつと 義樹 よしぎ

容姿・イケメン

性格・俺様に出来たら良いのにね。出てくるかわからないけど。出てきた

備考・生徒会会計。しかし、今は仕事をさぼっている。奥と二人セツトで生徒会の夫婦。俺様にしようとして一人称が俺様になってしまったあいたたな子

名前・釜元 かまもと

容姿・顔が残念過ぎる上に背が低い

性格・すごい真面目

備考・真面目なのに顔が残念だから女子に避けられている。誰もい

ないところで泣いてるとか泣いてないとか
……もうちよつと良いキャラにしてあげれば良いのに

名前・音波 おとば

容姿・何処にでも居そうな普通の人

性格・朗らか。中国の歴史のことになるとなんか燃えはじめる

備考・理科担当の先生。中国の歴史が大好きで語りはじめると止まらなくなる。何故理科をやろうとしたのかは不明

人物紹介（後書き）

私が新たに出すキャラは何故か阿呆が多い。

3 調理部男子（前書き）

何故か今回に限って新しい書き方に挑戦してみようなんて思ってたので三人称視点になります。言葉は合っていますか？

というわけなので、私の書く視点は広崎を中心として見た視点（？）だと思って下さい。

説明下手だな。

3 調理部男子

「えー、今日は柏餅かしわもちを作りたいと思います！」

キツと無駄に凜々しい表情を作りながら、大和は部員たちに柏餅のレシピのコピーを配った。簡単な説明をしようと口を開いた大和だったが、それを部員たちの不満の声が遮った。

「なんでそんな渋いもんばっか作りたいがるんスカ部長は」
「えーっ！ もっと美味しいもの作りましょーよーっ！ ガトーシヨコラとかー、シフォンケーキとかー！」

今時の若者らしい部員たちに柏餅はお気に召さなかったらしい。大和は残念そうに眉を下げ、じゃあ、と口を開く。

「今日はみたらし団子を作ろうか」
「「変わらない！」」
「おーっす、やってるかー？」

部員たちがまたもや大和に抗議しようと口を開いた瞬間、調理室（兼部室）のスライド式のドアがガラリと開いた。部室中の人間の

注目を集めながら入ってきたのは調理部顧問である、二階堂にかいどうだった。先程まで教師専用の喫煙スペースで煙草でも吸っていたのだろうか。少々臭う。大和は眉を顰ひそめた。

二階堂という男は、何故教職に就いているのか理解出来ないほどには容顔の整った男である。

大和は常々思う。この男ほど調理部顧問という肩書が似合わぬ男はいないだろう、と。しかし、大和は自分のことは言えないということに気がついていない。

二階堂はコツコツと靴を鳴らしながら大和に近付き、手元のレシピを覗き込むと器用に片眉を上げ、顔を顰しかめた。

「今日は何作るんだ？ …… くん？ …… また和菓子か？ 好きだな、お前も」

「美味しいでしょう」

「美味いけどな」

でもよお……、と二階堂が言う。

「美味いからって理由で好きなもんばかりか作るのは違うだろ？ 況してやお前の独断で選んだもんばかり」

「…… そうか。でも……、うーん……。…… うん」

でも、あいつらだって好きそうな味だ。でも、うーん、どうしよう。顎に手をあて、暫し考え込んでいた大和だったが、ようやくと納得がいったのか小さく呟いた。

二階堂は小さく笑った。悪い奴ではない、と。素直な良い奴だか

ら憎めない。色々と得な奴である。
また大和が口を開く。

「じゃあ、今日はアプフェルシュトゥルデルを作ろうか」

「やった！ あぶ……、ええ！？」

「なにこの衝撃。普段縁側に座ってばやばやしてるお爺ちゃんがいきなり流暢に流行語を使って喋り出したようなこの衝撃」

「もう先生お前がわかんない」

いきなりあまりメジャーではなさそうな洋菓子の名前を出した大和に、待ち望んでいた洋菓子のやつとの登場に喜んでいた部員たちも困惑顔だ。二階堂は微妙な顔をしている。案が極端すぎるのが大和の特徴である。

「シュトゥルデルは生地の下に新聞を置いて読めるくらい薄くしたもので、それで林檎を煮たものを巻くんだ。美味しいぞ」

「へー、よく想像出来ないけど美味そうッスね」

「ロールキャベツの林檎バージョンみたいな感じですかー？」

問い。そして僅かな沈黙。

「、まあ、だいたいそんなものだと思っていれば良いと思う」

「適当だな、おい」

「腹に入ればなんだって同じだ！」

「それで良いのか調理部部长」

二階堂の突っ込みを気に留めることなく、大和は言った。

「じゃあ、俺はパソコン室でコピーをとってくるから、少し待っていてくれ」

「はい」

部員たちの軽い見送りの声を受け、大和はパソコン室へと向かった。

大和はパソコン室の扉をなんの躊躇いもなく開け放った。中に誰がいるかもしれない。そんなことは一切考えないのが大和の特徴である。パソコン室にいた後輩と思しき生徒は驚きに情けない悲鳴を上げていた。

その声に大和は僅かに目を大きくした。小さくすまないと詫びの言葉をかけてから、パソコン部部长である美穂に声をかけた。

「美穂、パソコンとコピー機を借りるぞ」

一心にパソコンに向かい休むことなく手を動かしていた美穂は、大和の声にその手を止め、顔を上げた。

「大和。……すぐに済む？」

「済む」

「じゃあ、私の使っていていいよ」

「ありがとう！」

機嫌が良さそうになっ
こりと笑った大和は早速マウスに触れ、レシ
ピの検索を始めた。

「あぶ……、なにこれ？」

「アプフェルシュトゥルデル。上手く出来たらお前にも持つてきてやろうか？」

「うん」

「わかった」

頑張つて作るから、楽しみにしてろよ、と大和は続けた。美穂のすぐ傍で作業をしていた後輩はその様を意外そうに見ていた。

手早くコピーのための動作を済ませ、コピー機の前に移動する。

少しの間を置いて、コピー機は音を立ててレシピを吐き出した。

やっと人数分のコピーが出来上がり、大和はそれを持ってパソコン室から出た。

今度は後輩を驚かせないように、そつとドアを閉めていると、後輩の小さな声。

「……先輩って、彼氏いたんですね」

「……、は？」

美穂の感情の読み取れない声。大和は閉めかけていたドアを開けて言った。

「違うぞ？」

「ひゃああああつ！？」

後輩はまさか大和がまだいるとは思わなかったのか大きな悲鳴を上げた。美穂も驚いた顔でこちらを見ている。

その余りのリアクションの大きさに逆に大和が驚かされながら、今度こそパソコン室を後にした。

それにしても、と大和は思う。

「あの後輩は、俺たちの何処を見て恋人だなんて思ったんだろう……」

しかし、そんな大和の些細な疑問は、眼前のレシピによってすぐに埋め尽くされてしまったのであった。

3 調理部男子（後書き）

一話との差はなんだろうか。

4 パソコン部女子

帰りのホームルームの挨拶では大抵の奴は、寝る、早く終われとイライラする、の二種に絞られる。

私は勉強するという別の種に入るのだが。

まあ、ろくに自分の話を聞いていないことを担任は知らない。
そのした

園下、この可哀想な私たちの担任の名前だ。名前は呼ばないから忘れた。

「以上！気をつけて帰るように！！」

みんながビクリと身体を震わせる。声が馬鹿でかいから仕方ない。それはともかく、先生が去ると一人の女子の元に人が集まる。

「小百合ちゃん、今日は俺と帰ろうよ！」

「馬鹿か、お前は。小百合ちゃんは俺と帰るんだよ」

「さ、小百合ちゃんは僕と帰るんだよね…？」

「わたし、みんなと帰りたいなあ」

「『小百合ちゃん』」

語尾にハートが付きそうなほどだらしのない声が聞こえる。それもこれもある日突然転校して来たこの女が原因だ。

椿^{つばき} 小百合^{さゆり}、それがこの元凶の名前だ。

噂では彼女が来るまでの人気No.1だった生徒会長が一日で抜かされたとか。

今では写真部の奴らがストーカーの様に彼女を追いかすという。

ちらつと横目で馬鹿な男子を見る。

彼女がイケメンが好きとほざいたおかげで今は男子は校則違反スレスレの恰好だ。

彼女に狙われた可哀想な男子^{イケメン}は様々な手を使って落とされるという。もう大体のイケメンは彼女の手駒らしい。

「馬鹿馬鹿しい、脳が腐りそう……」

小声でそうぼやく。

小百合ちゃん親衛隊（なんで出来たんだ……）に聞かれれば半殺しにされるだろうか。まあ、返り討ちに出来ないことは無いと思うが。

美穂はどうせ今日も来ないであろう部長の代わりにパソコン室を開けるため、逃げるように教室を後にした。

……

今日も文化祭のポスターを創るべく、手早く文字を打ち込む。イラストは上手い奴に描いてもらい、既にバックになっている。

人が寄って来そうな適当な文面と日にちを打ち込んでいると、壊れそうなほど大きな音を立ててドアが開かれた。

こんなことを堂々と毎回出来る人間は私が知っているかぎり一人しかいないからそう驚くことではない。しかし、新入生は予期せぬ訪問に驚いたのか悲鳴をあげていた。

いつもの事だから早く慣れろ、身が持たないぞ。

「美穂、パソコンとコピー機を借りるぞ」

その声で手を止め見上げればそこにいるのは大和だった。いつも通りレシピの事だろう。

「大和。……すぐに済む？」

「済む」

「じゃあ、私の使っていいよ」

「ありがとう！」

笑顔が爽やかだ。

そつえば大和もイケメンの部類に入るのではないだろうか。変な奴だから噂も広がっているはずだ。よく椿のターゲットにならないものだ。

そこは持ち前の運というか何と言うか。

そんなことを考えてる間にさつさと大和はレシピを調べる。

「あぶ……、なにこれ？」

「アプフェルシュトゥルデル。上手く出来たらお前にも持ってきてやろうか？」

長くてすぐには読めなかった。それを簡単にサラッという大和。私はお菓子は好きだが自分で作ることが出来ない。なのでよく和菓子を作る親友、もとい料理部部長に時々貰っているのだ。

だから私がこの話を断る訳もなく。

「うん」

「わかった」

簡単な会話で終わらせる。

いつも誘ってくれるから私の事をよく分かっていると思う。

頑張って作るから、楽しみにしてるよ、と大和に言われて素直に頷く。

アップエルシュトゥルデルと言う食べ物がないかは知らないが期待は持てる。

さすがになれているだけありあつという間にコピーするための操作を終わらせるとコピー機の前に移動し、枚数が揃うと出て行った。それを待っていたかのようにお騒がせな新入生が口を開く。

「……先輩って、彼氏いたんですね」

「……、は？」

待て、どこをどう見たらそうなるんだ。しかもそれじゃあ私に彼氏が出来たことが無いみたいじゃないか、いや、まあ、出来たこと無いけどさ。

いろんな意味を込めていつもより低音で返すと怯えた。失礼だな。

「違っぞ？」

「ひゃああああっ!？」

新入生の悲鳴が響く。頭痛くなるから毎回大声上げるの止めて。というかまだ居たんだ、大和。

それだけ言つとまたドアを閉めて行つた。本当にそれだけ言いたかつたのか……。

溜息をついて、固まる新入生を一瞥してからパソコンに戻つた。

まら文化祭のポスター創りを続ける。

新入生はやつとパソコンに戻つたがまた上の空だ。

「こんな感じ、かな……」

やつと完成したポスターを試しに一枚印刷してみる。なかなかよく出来ていると自分でも思う。今年はこれでも良いと思うくらいだ。早速顧問に見せに行く事にした。

……

「失礼します」

断りを入れてから職員室に入り顧問の元へ向かう。

「おう、坂田！どうした、何か用か」

「園下先生……。文化祭のポスターが出来たので持ってきました」

顧問は私の担任の園下先生。この人も部長と同じで部活に殆ど出ない。前に何度か来るように言ってみたが変わらないので既に諦めた。

「ん、どれどれ……。さすがは坂田だな！今年はこれで決まりだ！」

本当この人は審査が甘いと思う。数秒しか見てないだろ、あんた。

「はあ、どうも」

「いや、坂田は入ったときから腕が良いよな！何しろ、」

「あ、私失礼します」

そのままポスターを置いて逃げるように職員室を出て行った。あの様子じゃ長話になるのは明らかだ。

溜息をついてから最近溜息が多いことに気付く。何といっても私の周りはお騒がせな人間やはちゃめちゃんな人が多すぎる。

せめて何かを食べて疲れをとろうと思いい大和が持ってくる今日の料理に期待した。

4 パソコン部女子（後書き）

どうも、片岡さんの友人です。

片岡さんに勧められてしばらく前に小説を書きはじめました。

まだまだド素人なので内容も薄いし、表現も下手ですが、こんな私の小説を見続けてもらえるとド素人としては幸いです。

椿 小百合視点 1（前書き）

今回は片岡が書きました。

椿 小百合視点 1

ぐだぐだと誰もがわかりきっているであろう注意を繰り返す男――園下を見て、小百合は周りに悟られぬよう、小さくため息を吐いた。退屈だ。帰るときに寄り道はしないようにだとか（今時守る奴もいないだろうと思う）、交通事故には気をつけるだとか、小学生ではないのだからわかってる。

「以上！気をつけて帰るように！！」

園下の馬鹿でかい声が鼓膜を震わせ、小百合は不愉快そうに目を細めた。

が、それも一瞬のこと。すぐに小百合は可愛い笑顔を身に付けた。途端に席の周りに集まる男たちに、小百合は満足げににこりとした。

小百合ちゃん！小百合ちゃん！今日は俺と！いいや俺と！ううん、僕だよね！？ねえ小百合ちゃん！ねえねえねえねえ！！

（ッああ！幸せ！！）

小百合は自分の心が狂喜の色に染まっていくのを感じた。抑えき

れない笑みが口許まで上ってきて、満面の笑みを披露する。それから周りの男たちは魅入ってしまうのだから、楽しくて楽しくて堪らない。

小百合は自分の名前を呼ばれるのが好きだった。呼ばれば呼ばれるほどに、自分が必要とされているのだと感ずることが出来るからだ。

群がる男たちの言葉に適当に愛想笑いを返しながら、小百合は自分に突き刺さる幾多もの視線を感じた。しかし、小百合はそれを意に介することなく、笑ってみせた。

羨ましいのだろうと、妬ましいのだろうと。小百合は敗者共おんなを嘲り笑った。

男には媚を売ってやり、女には嘲笑を。

女など、気にしてやるだけ時間の無駄なのだから。

小百合は、そっと呟いた。

「だって、此処はわたしの世界」

可哀想で可愛い自分に、神様が与えてくれた世界。わたしの、わたしのために創られた、わたしだけの世界。神にすら、愛された存在なのだと。

「わたし、みんなのこと大好きだよっ」

だから、わたしだけを愛せ。

小百合の美しい笑顔の裏に隠されたのは、
いったいなんだっただ
ろう。

椿 小百合視点 1（後書き）

今回はちょっと短め。

隠されたもの。本性はもう丸出しだから……。

5 調理部男子（前書き）

なんだか書いてて私が楽しいだけの話になってきた。

5 調理部男子

大和は今、悩んでいた。

未だかつてないほど、猛烈に悩んでいた。

眉間に皺を寄せ、いつになく真剣な表情にすっかり胸をときめかせる者が続出するほど、悩んでいたのだ。

机上に広げたレシピを見て、大和は重々しく呟いた。

「苺大福か、それとも栗饅頭か……」

その呟きを偶然聞いてしまった大和の友人——宮城みやぎが呆れたように言った。

「また和菓子か」

その声にやっと自分の傍に宮城がいるということに気がついた大和はフツと顔を上げ、宮城を見た。

「なんだ、宮城か」

「なんだってなんだよ、なんだって。ム力つく奴だな」

大和のあんまりな物言いに額に青筋を立てた宮城を華麗にスルーして、大和は訊ねた。

「何か用か？」

「ああ、忘れるとこだった。本多^{ほんだ}がまた来てたぞ」

「本多が……？」

うんざりといったような顔の大和が嘘であってほしいという思いから再度訊ねても、返ってくるのは頷きだけ。大和は深くため息を吐いた。

本多は野球部のキャプテンを務めている男である。彼は入学当初から類い稀なる大和の運動神経に目をつけていた。だが、当の本人は一番最初に声をかけられた調理部に菓子類が好きだということもあり、あっさりと入部。彼が悔しさに涙を流したのを知る者は多い。

しかし、彼は諦めなかった。

大和が調理部に入部したその日から、彼の大和への熱烈なアタックが始まった。

ある時は昼食に誘い、それとなく野球の話題を出した。ある時は大和のその才能を野球に生かすことがそれだけ素晴らしいことなのか、ということ进行を思いつく限り恋する乙女ばりに綴った手紙を何枚も書いては靴箱に忍ばせた。

いくら鈍い大和でも、これはさすがに気付いた。

この男は、自分を転部させようとしているのだと。

ノリと勢いで入ってしまった部とはいえ、何日も過ごせば愛着というものも湧いてくる。

大和はゴキブリのように何処からでも湧いてくる本多に対抗して殺虫剤を持ち歩いた。そして少しでも野球の話をし始めれば、容赦なくスプレーをその顔面に吹き付けた。一步間違えれば虐めに発展する大問題である。

だが、本多の執念は大和の頑固さの軽く上を行った。本多は何日かしてからガスマスクを購入し、大和に話し掛けるときには常にガスマスクを着用した。

大和も、やっぱり頑固だった。もう素直に野球部に入ってしまったら楽だろうに、それだけはどうしても嫌だった。今度はそのガスマスクを剥ぎ取り、スプレーを吹き付けたのだ。

まだまだ負けていないのが本多だ。本多は翌日、懲りずに大和に話し掛けた。大和は既に手慣れた手つきで本多のガスマスクを剥ぎ取った。

瞬間、大和に戦慄が走る。

なんと、本多はガスマスクを二重に装着していたのだ。

しかし、怯んだのはたった一瞬。そのガスマスクもやがて大和の手によって剥ぎ取られた。

そして剥ぎ取られては増やし、剥ぎ取られては増やし、大和がいっぺんに剥ぎ取ったマスクが二十を超えたところで、とうとう諦めた。

今では苦手ではあるが、普通の友人のように接し、野球の話をし

始めれば横つ面をぶん殴って無理矢理話を止めさせるという関係に収まっている。

しかし、前述したように、友人として認めてはいても、苦手なものは苦手だ。大和は嫌そうな顔で教室の出入り口で仁王立ちしている本多のもとへ向かった。

「広崎！ 野球部に入る決心はついたか！？」

「宮城、ハゲが何か寝言を言ってる」

「俺を巻き込むな」

「誰がハゲか！！」

本多は常にハイテンションな男だ。こんな朝っぱらから相手をするには少々ウザすぎる、大和は不快そうな顔を隠しもしないで教室のドアを勢いよく閉めた。一瞬で開けられた。

「何故ドアを閉めるか！」

顔を真っ赤にして怒鳴り散らす本多。大和はピクリとも表情を変えずに懐かしいメロディで歌い始めた。

「もしもあ、頭髮があ、生あええたあならああ」

「なんだその不愉快な替え歌は！ 俺は禿げてなどおらんと言っておろうが！ ただ人より少し髪の毛が短いだけだ！！」

だいたい、お前も俺より少し長いくらいではないか！と本多。そろそろ教室中の人間が余りにも喧やかましい本多を睨み始めたところで大和が訊ねた。

「用はそれだけか？」

「そうだ！」

「帰れ」

大和は無表情でドアを閉め、今度は鍵もかけた、機転を利かせたクラスメイトがもう一方のドアを閉める。

「広崎！　おい広崎！！　開けないか広崎！！」

2・3の教室は、そのまま本多が叫び疲れて帰るまで閉ざされたままだった。

「ところで、あいつも結構イケメンだよな。大和、どう思う？」
「何がだ？」

唐突に切り出された話題に大和はきょとんとして、後ろの席にいる宮城を見るために振り返った。

全く話の内容をわかっていない大和に、宮城は説明をしようとして、閉口した。

「いや、良いや。多分、お前にはわかんねえだろうし。よく餌食にならねえなって話」

「……餌食？」

ますます話の意味がわからなくなった、と大和は頭を抱えた。

5 調理部男子（後書き）

凄く馬鹿な話だけど書いてて楽しかった。

6 パソコン部女子

美穂はいつもと比べると随分と機嫌が良かった。最近はかなり機嫌が悪かったのだが昨日大和に貰ったお菓子で全て吹っ飛んだ。本当に大和のお菓子は何かしらの力があるように思えてしまう。それくらい美穂を幸福にしてくれるのだ、あれは。

しかし、そんな幸福はいとも簡単に別れを告げた。

「さっゆりちゃん！おはよう！！」

「おはよう、みんな」

ニツコリと笑う椿。

ああ、今日もなのか……。だがこれは私が休むか、椿が休むかどちらかがないと回避することは不可能だ。まあ、自分から休む気などさらさら無いので後者に期待するほかない。

にしても、本当に人気者だな。

別に羨ましい訳ではないが、あそこまでモテる人を見たことが無いから目を疑うのだ。所詮私には関係ないが。

私があの場合に居て勉強など集中できる訳が無く私は暇つぶしに大和の所に行くことにした。私は3 - 1だからそう遠くはない。鬱陶しい男子の声を聞かないように耳を塞いで部屋を出た。

……

向こうから誰かが歩いて来る。確かクラスメートで野球部の本多だったはずだ。騒動を何度か見かけていたので様子を見れば最初から最後まで分かる気がした。

「本多くん……、あなたゴ。ブリみたいね」

「朝から失敬な奴め！」

大声で返してきたからとりあえずは元気なようだ。だが、元々私はハイテンションな奴は嫌いだ。それも朝からだと言え。

「ちょっと黙って。朝からうるさいのは迷惑」

「本当に坂田はいつ、もっ？！！」

本多の利き足であろうほうのすねを蹴った。鬱陶しい。教室に居る奴らと同じくらい鬱陶しい。

「坂田っ、…お前、風紀委員だろう！こんなことをして、良いのか？！」

「風紀委員だからこそしてるんだけど？」

「……あ、悪魔」

私にこりと笑うと本多は掠れた声でそれだけ言って蹴られた足（それほど強くは蹴ってないはずだが）を引きずりながら教室に戻っ

て行つた。

悪魔。なんか久しぶりに聞いた気がする。

よくどうしても聞かない奴に暴力を最終手段として取るのだが相手が去るとき、必ず悪魔だとか言われるのだ。

……いつも思うが悪魔と言うほど痛いのか？一応手加減はしているのだが…。

ガラリ、と扉を開けたつもりだったのだが開かなかった、

すると向こうでカチャリとちよつと高い音。どうやら本多を追い返すために鍵をかけていたらしい、良いアイデアだ。今度使ってみよう。

「大和いる？」

近くにいた生徒（名前忘れた）に手短に伝えるところの子はすぐに呼んでくれた。ただ、なぜかは知らないが宮城がくつついてきた。

「あら、圏外が一人」

「誰が圏外だ、誰が」

「大和、今日は何作るの？」

まるで最初から居なかったかのように宮城をスルーした。まだ不満そうだが一応口を閉じてくれた。

「尊大福と栗饅頭で迷っているんだ。美穂はどっちが良い？」

まさかの質問返して戸惑う。その二択がどちらも和菓子というのが大和らしい。

「昨日はフルーツ食べたから今日は栗饅頭」

「分かった」

嬉しそうに大和が笑う。大和が笑うところちもなんだか優しい気持ちになる。私もつられて笑った。

「お似合いだなあ、美穂と大和は」

一瞬、間。

大和は首を傾げ、私は赤面を隠すためとりあえず宮城のすねを手加減無しで、むしろ全力で蹴った。

ガスッ、と鈍い音で宮城がしゃがみ込む。というかいつから美穂って呼んでるんだ。

「み……ほ、痛いだろ……！」

「当たり前でしょ、蹴ったんだから。じゃあ大和、また後で」

「ああ」

宮城をスルーして、自分の教室に戻る。大分スッキリしたから勉強に集中出来そうだ。

教室に入るとき、ちょうど同じように教室に入ろうとした椿に出くわした。

なんか睨まれたような、挑戦的な目で見られたような。しかし、教室に入った瞬間それは笑顔に変わり男子に囲まれていった。

それが逆に私の心に嫌な風を吹かせた。

6 パソコン部女子（後書き）

友人「今更ながら小百合ちゃんは難しい……。
これからたくさん勉強せねば」

何を勉強するのか疑問な私。

椿 小百合視点 2（前書き）

今回は片岡の友人が書きました。

椿 小百合視点 2

教室に入れば私の周りに男子達が集まって来る。

みんな私に挨拶をしてくれ、気を引こうと必死にアピールする。

今も自分がみんなから必要だ、と言われているようで嬉しくなる。
自分が世界一幸福なのだと実感できる。

小百合は教室の入り口になんとなく目を向けると一人の女子が入ってきたところだった。

坂田美穂。転校してきた当初、服装が派手だとか、髪を染めるなどか、一々注意してきた面倒な女だ。彼女が風紀委員長だと知ったのは大分後の話だが。

しばらく男子の話を適当に聞き流していると珍しく勉強家の坂田が勉強をしないで教室の外に出て行った。

坂田が休み時間に勉強以外のことをするのはあまり見たことが無い。だからなのか坂田の行き先が気になり、男子達にお手洗いに行くと嘘を言って引き離し、後を追った。

近付くことは無理なので遠くから見ていると、坂田はまず本多と話した。

ところが本多には用が無かったらしくある程度話（と蹴り）をする
と彼と別れ、更に進んで行った。

しばらく見ていると坂田は2・3の教室で止まり、誰かと話を始めた。

だが、それも極短い会話だった。これ以上は何もなさそうだと思い、教室に戻ろうとした時だ。

2・3から男子が二人、出て来たのだ。特に一人の男子が気になった。

恰好よかった。

黒髪で、爽やかな笑顔が良く似合っている。
ぼんやりとその男子を見ていて気付く。

あの人を、知らない。

誰、誰なの。あの方は誰。知らない、あの方の全部を。なんで、もう男子は全部わたしのものはずなのに。わたしはあの方を知らない。

しかも、あの方と坂田が笑い合ってる。わたしは知らないのに、なんであの方が知っているの。

坂田が戻ってきた。我にかえって偶然を装うとして教室に今戻っていくふりをした。

坂田と目があい、睨みつける。しかし、すぐに笑いに戻し、教室に入って行った。

あの方をあなたから奪ってあげる。男は全部、わたしのもの。誰か他の人なんて、させない。

自然と口に笑いがこぼれていた。

椿 小百合視点 2（後書き）

美穂は書けるのに小百合ちゃんを上手く書けない…。
これから更に頑張らないとな……。

7 調理部男子

「わたし、椿 小百合っていうの。よろしくね」

「……？ うん、……うん？」

突如として目の前に現れ、よろしくしてくれという少女に、大和は頭の上にくつも疑問符を浮かべながら頷いた。大和の視界の端で宮城が苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

唐突。突然。まさにそれだった。なんの前触れもなく、彼女は現れ、大和の目の前で美しく笑ったのだ。

微妙な反応を返した大和に、小百合の美しい笑顔がほんの少し歪んだ。

「広崎くんっていうんだよね」

「ああ、そうだ。どうして俺の名前、知ってるんだ？」

宮城が大和の後方で、小さくストーカー……、と呟いた。その声は幸か不幸か大和には届かず、宮城が小百合に壮絶な笑顔向けられただけであった。

「坂田さんから聞いたの。わたし、坂田さんとお友達だから」

「へえ、美穂の友達なのか！」

「、うん、とっても仲良しなんだ」

大和の満面の笑顔に、これまた満面の笑顔を返す小百合。この場面だけを見ればとても微笑ましく、お似合いの二人に見えるのだが、生憎とクラスにいた人間たちには二人の姿は蛇と蛇に捕食されそうになっている小動物にしか見えなかった。

「ねえ、大和くんって凄く恰好良いよね。わたし、恰好良い人大好きなんだ」

いつの間にか名字呼びから名前呼びに変わっている小百合。しかし、大和はそれを意に介することもなく（気付かず）、言い放った。

「へえ、面食いなんだな」

大和がそう言った時、小百合の笑顔が完璧に崩れた。華のかんばせを笑顔で彩ることを忘れ、目を丸くした小百合は、それから取り繕うような不自然さもなく、ただ微笑んだ。

頭のネジが数本吹っ飛ぶどころか消し飛んでいる大和がそんな小百合の表情の変化を気に留めるわけもなく、ただにこにことしていた。

「……大和くんは、なんの部活に入っているの？ 運動部……、サ

ツカーとか野球とか、似合いそうだなね」

「調理部だ。和菓子が好きなんだ」

「、調理部？」

そうだ、と頷き、大和は逆に訊ねた。

「椿はなんの部活に入っているんだ？」

「わたし、帰宅部なんだ」

「へえ、無趣味なんだな。つまらないか？ 人生」

背後で宮城が噴き出した。今度はさすがに気付いた大和が不思議そうに後ろを振り返る、大和の目に映る宮城は何故か蒼褪め、冷や汗を掻いていた。

何か後ろに恐ろしいものでもあるのか、と視線を前方に戻しても見えるのは小首を傾げて微笑んでいる小百合。大和は首を捻った。

また小百合が口を開こうとしたとき、物凄い勢いで教室のドアが開き、その拍子でドアが外れてしまった。

大和が嫌々目を向けると、其処には予想通り過ぎてなんの面白みもない男が立っていた。ご察しの通り、本多である。

「広崎い！ 野球部に入れ！！」

「断る」

「……本多くん？」

小百合が困惑の色が入り糺じった笑顔を向ける。小百合の存在に気付いた本多は目を輝かせた。

「おお！ お前は椿！ 我が野球部マネージャー候補の椿ではないか！」

「野球部に入るのか？」

「えっ？ え、あ、いや、違うよ？ 本多くんが勝手に……」

その言葉に全てを悟った大和は睨むように本多を見て、低く言った。

「本当にお前は人に迷惑をかけるのが好きな奴だな、ハゲ」

「俺はハゲではない……」

「あの、本多くん……」

延々に続きそうだったハゲか否かの論争に、小百合が終止符を打った。本多は不意にかけられた声に小百合を見、そして大和もまた小百合を見た。

一気に二人分の視線をその身に浴びた小百合は気まずげに、するはずもなく、平然と言った。

「本多くんは、どうしてわたしに野球部に入ってほしいの？」

その質問を待っていたと言わんばかりに、本多は笑んだ。

「お前は野球部の部員に人気があるからな！ お前が野球部に入れば部員たちの士気も上がるだろうと、」

「……本多くんは？」

「は？」

小百合の問いの意味を理解出来なかった本多が間抜けな声を出す。その後方ではすっかり蚊帳の外になってしまった大和と宮城が窓の外を見てあの雲はずんだ餅に見える等と議論を交わしていた。

「本多くんはどう思ってるの？」

「特になんとも思わん！」

笑顔で言い切った本多。クラス中の人間が一斉に俯き肩を震わせた。小百合の笑顔も引き攣っている。

「そう……。じゃあ、わたし入らない」

「何故だ！？」

「大和くん」

「なんだ？」

悲壮感溢れる表情になった本多を無視して、小百合は大和の名を呼んだ。もう話は終わったのか、とのんきな顔で大和は小百合のほうを向いた。

「これから、仲良くしてね」

「……うん？」

「なんだ！ 椿は広崎に惚れてるのか！？」

小百合は感情の読み取れない笑顔のまま本多を見た。大和はきよ
とんとしている。宮城は苦々しい表情。そんな中、本多だけが輝か
しい笑顔を見せていた。

「そうか！ ならば広崎！ やはりお前は野球部に入るべきだ！
そうすれば椿もきつと釣れるはず！」

大和はウザったそうな顔で本多を見た。だから、どうしてそうな
るんだ、と。何も自分でなくとももっと良い人材がいるだろう、と。

「はい、ストップ」

本多がまた何かを言おうと口を開いたところで、思わぬ乱入者が
やってきた。美穂だ。

「「あれ、美穂だ」」

「はい、美穂です。宮城、名前で呼ぶな」

「なんで俺だけ！」

美穂は小百合と本多を見ると二人の腕を掴み、教室の外へと連れ出した。

「おい！　なんだ坂田！　離せ！」

「きゃっ。坂田さんっ、離して！　痛いっ……！」

「良いから出る！」

何か知れないが、美穂は怒っているようだ。とりあえず大和はとばつちりを喰らわないように教室のドアを閉め、鍵をかけた。

着実に厄介を遠ざけるための経験値を積んでいる大和であった。

7 調理部男子（後書き）

普通に関わってますな。あらずじに偽りあり、どうしよう。
でも一応（多分）ってしておいたから大丈夫かな。

椿 小百合視点 3

早速あの黒髪の彼に接触を試みようとして、小百合は群がる男共を適当に追い払って教室を出た。

すぐ隣の教室を覗き込むと、いた。思わず笑う。

それにしても、と小百合は不思議に思った。こんな近くにいたあの人——大和のことを自分が知らなかったというのも不思議だが、それよりも、このクラスにいる人間たちは、どうして自分の存在に気が付いているだろうに、全く騒がないのか。

小百合は疑問を抱きながら教室に足を踏み入れ、真っ直ぐに大和のもとへ向かった。

「ねえ」

「なんだ？」

呼びかければ、大和は振り向いた。ああ、近くで見ると、もつと素敵。小百合は大和に微笑みかけた。

「わたし、椿 小百合っていうの。よろしくね」

大和は戸惑いながら頷いた。今までのどの男たちとも違うその反応に、小百合も戸惑った。

「広崎くんっていうんだよね」

「ああ、そうだ。どうして俺の名前、知ってるんだ？」

「坂田さんから聞いたの」

勿論、嘘だ。

本当は周りにいた男たちに聞いた。坂田と親しい男子の名前を知っているか、と訊ねると、すぐに大和の名前が挙がった。

それほど、坂田が男子と仲良くしているのが珍しいことなのだろう。

「美穂の友達なのか！」

「、うん、とっても仲良しなんだ」

そうか、そうか、と嬉しそうに頷く大和。小百合には、大和が嬉しそうにしている姿よりも“美穂”という言葉のほうに気がなった。

（どうして名前呼びなの……！？）

そんな苛立ちを必死に隠しながら、小百合は話を続けようと口を開いた。大和は、この言葉にいったいどんな反応を返すのだろう、と。

「ねえ、大和くんって凄く恰好良いよね。わたし、恰好良い人大好きなんだ」

間髪入れずに大和は返した。

「へえ、面食いなんだな」

につこりと笑って吐き出されたその言葉に、今度こそ小百合の笑顔が固まった。

そして、小百合自身は気が付いていなかったが、小百合は目を見開いて、それはそれは本当に可愛らしい無知な少女のような顔をしていた。

いきなり恰好良い人が好きなの等と言われたら大和の反応は至極当たり前のことなのだろうが、小百合の周りにいた男たちは違ったのだ。

そう言うのと、男たちは決まって自分たちを少しでも良く見せようと無駄な努力をする。

だからこそ、小百合に媚びることなくそう言ってみせた大和が、小百合にはとても新鮮に映った。

小百合は本心から微笑み、口を開いた。

「……大和くんは、なんの部活に入っているの？」

爽やかで、なよなよしたところなんて何処にもない恰好良い彼のことだ。きつと運動部のどれかに入っているのだろう。そんな思いを込め、小百合は訊ねた。しかし、大和の答えはそんな小百合の予想を大きく外れた。

「調理部だ。和菓子が好きなんだ」

「、調理部？」

まさかの文化部。何処までも予想通りにいかない大和に、小百合は不可解な胸のときめきを感じた。

今度は大和が訊ねた。お前は、なんの部活に入っているのだ、と。

「わたし、帰宅部なんだ」

「へえ、無趣味なんだな。つまらないか？ 人生」

まさか人生をつまらなくないかと問われるなど思いもしなかった。小百合は目を瞬かせ、向こうのほうから聞こえた笑い声に凄みのある笑顔に向けた。

まだ、この人と話をしたい。底が見えなくて、新鮮なこの人と。

小百合が口を開くと、教室のドアが思い切り開かれ本多が入ってきた。小百合は驚き、口を噤んだ。

本多は大和に向かってギャンギャンと喚いている。思わず名を呟くと、本多は目を輝かせて小百合を見た。

小百合は、前々から自分に媚びようとしないうる本多が嫌いだった。せつかく自分が笑いかけてやっているというのに、そんな自分の魅

力に気が付かない阿呆な男。

しかし、ようやく自分の魅力に気が付いたのか、と小百合は微笑む。しかし、吐き出されたのは全く違う言葉。

「我が野球部マネージャー候補の椿ではないか！」

やはり、阿呆は阿呆だったか、と小百合は最早諦めの境地にいた。何故かそれを見て勘違いをしてしまった大和に説明をする。すると、大和は本多を軽く睨んだ。

「本当にお前は人に迷惑をかけるのが好きだな、ハゲ」

「俺はハゲではない!!」

「は、ハゲ……」

まるで漫才のようだ。小百合は誰にも聞かれないように小さく呟いてから大和の考察をした。

（なにこれ……。天然毒舌爽やかスイーツお笑い系男子？ どれだけ設定詰め込んでるのよ）

「あの、本多くん……」

小百合はふと、疑問に思った。この男は自分に落ちていない。な

ら、どうして其処まで自分を野球部に入れたがるのか。

しかし、阿呆は何処までいっても阿呆で、返ってきた答えは“部員の士気が上がるから”。果てには“特になんとも思わない”。この男は喧嘩を売っているのだろうか。

まあ、良い。こんな男。相手をしてやるだけ無駄だ。小百合は大和に向き直った。

「これから、仲良くしてね」

「……うん？」

「なんだ！ 椿は広崎に惚れてるのか！？」

喧しいぞ、この腐れ脳味噌。^{やかま}小百合は自分がそう叫び出さなかったことが心底不思議だった。

本多がまた喚きだそうとしたところで、また邪魔者が入った。

「はい、ストップ」

本当に邪魔な女だ、と小百合は唇を噛んだ。親しげに大和と話し、あまつさえ見せ付けるように名前呼び合って。

坂田は小百合の腕を思い切り掴み引つ張った。痛みに悲鳴を上げても坂田は愚か、クラスにいる男子たちもなんの反応も見せない。

小百合はそのまま、坂田の手によって教室から追い出されてしまった。

椿 小百合視点 3（後書き）

小百合視点のときは美穂が坂田呼びなのがポイント。
視点って言わないかな、これは……。

8 パソコン部女子（前書き）

今更ながら言い忘れていましたが、後書きは友人の言葉です。

8 パソコン部女子

朝は結構良いことがあったため、昼休みはかなり良いペースで勉強が出来ていた。そのお陰か今日のノルマはすぐに終わらせることが出来た。

ん、と体を伸ばしてふと気付く。

いない。あの椿が珍しく教室に居なかったのだ。男子の取り巻き共は暇そうに椿の机の周りで待っている。お前らは犬か。

ガタガタと騒がしい音を立てながら本多が出て行った。きっとまた大和に交渉しに行くのだろう。

ただ、平穏な昼休みを騒音に変えられてはたまったものではない。どうやらもう少しお灸を据えてやる必要があるようだ。

美穂は溜息をつきながら立ち上がり、本多の後を追った。

教室を出てすぐガタン！と騒々しい音、原因は見なくても分かる。本多は夢中になると他がどうでもよくなる悪い癖を持つ。そこも説教せねば、とズカズカと歩いていく。

「本！…多……………」

椿が居た。しかも大和と話してる。幸い向こうは私の事に気づいていないようだ。……椿が大和の存在に気づいてしまった。

しばらく自分の仕事を忘れて呆然とし、やっと思考が働きはじめた。

——とりあえず説教

これしか頭のなかに無かった。それだけ椿に大和が狙われていることがパニックになっていた。

「はい、ストップ」

「あれ、美穂だ」

大和と宮城が一斉に言った。本当仲が良い。というか宮城がここに居たことを今気づいた。宮城ってそんなに存在感無かったつけ、と疑問に思っただくらいだ。

「はい、美穂です。宮城、名前で呼ぶな」

「なんで俺だけ！」

答えは簡単。

宮城とは親しくもないし、呼んでいいとも言っていない。いつからこんな親しげになったんだ。

ともかく仕事に入ることにした。大和には小さく謝ってから二人の腕を掴み、引き摺る形で教室から出ていく。

「おい！なんだ坂田！離せ！」

「きゃっ。坂田さんっ、離して！痛いっ……！」

「良いから出る！」

黙らせるために少し腕に力を入れるが、椿だけは黙らずに騒ぎ、教

室に着き放すまでうるさかった。

.....

「本多、何回言ったら分かるの。人が断ったら諦めなさい！迷惑でしようが！！」

「そんなことは俺の自由であろう！」

「黙れ、扉を外したことは言い逃れさせない y p」

本多にゲンコツを入れ、黙らせる。

今、私は教室で二人を正座させて説教をしていた。考えれば椿を説教する理由はどこにもないのだが、この際どうでもよかった。

早くも正座に疲れたらしい椿が正座をやめる。だがそれを私が見逃す訳がない。

「椿、正座を崩すな！！」

椿と小百合ちゃん親衛隊がこつちを睨んだ。親衛隊は殺気立っている。

美穂はそれら全てを脅しも含めて睨み返した、関係ない奴らまで退いている。

「大体椿が来てからこの学校（男子のみ）は変わったわ！服装を違反する奴は出るわ、不登校（椿に興味が無い男子が親衛隊に襲われた）は出るわ、散々よ！！」

おまけに大和にまで餌食にする気が、と美穂は言いそうになってそれを飲み込んだ。椿は涼しい顔をして受け流しているようだ。美穂は苛立ち、椿の顔を片手で掴んだ。

「っ、な……！」

「あまり調子にのらないで。学園生活乱されると勉強に集中出来ないから」

低い声でそう告げ、説教を終わらせた。そのまま自分の席に戻り、座った。

自分を見る視線が何時にも増して痛かった。

8 パソコン部女子（後書き）

最近小説を見る回数がかなり増えた。ついつい上手い人と自分を比べてしまう。

……下手くそな自分に泣けてくる。

椿 小百合視点 4

教室に連れ戻されると強制的に正座をさせられ、坂田の説教が始まった。

（なんでわたしまでこんなことを……！）

正直小百合は苛立っていた。大和と離されて、腕も思い切り掴まれたのにその上説教。教室の隅では女子共が私をいい気味だと言うようにクスクスと笑っている。

こんなにも屈辱的なことがあるだろうか。

本当に邪魔な女、そうボソリと呟き坂田にちゃんと正座をしろ、と怒鳴られた。更に苛立ち、睨みつければ睨み返される。後ろに居るわたしの親衛隊も黙り込んでしまった。使えない、わたしをちゃんと助ける。そのための親衛隊だろう。

それにしても本当になんなの、この女は。お前だって所詮は敗者、なのになんで、なんでわたしにたてつくの。

ここはわたしの世界、全てわたしだけのものなのに、それなのになんであなたは……！！

唐突に顔を片手で掴まれる。片手なのに抵抗できない、しっかり掴まれている。一体この細腕にどれだけ力が……。

「あまり調子にのらないで。学園生活乱されると勉強に集中出来ないから」

嫌に坂田の低い声が響いた。本多には聞こえなかったのか、まだ痛

がっていた。

坂田は説教を終わらせて自分の席に戻って行った。

男子達が自分を心配して頻りに話しかけてくる。小百合はそれを適当に聞き流し坂田を見据える。

もう絶対に許さない。大和を、あなたから必ず奪ってみせる。
後悔しても、遅い。

椿 小百合視点 4（後書き）

無いものを搾るって難しいですね。私の場合は想像力ですが…。

9 調理部男子

「ああ、もう！ なんなんだよあの女っ！ なあ、君もそう思うだろ！？」

「な、夏輝^{なつき}、落ち着いて……」
「なんだよっ！ 菖蒲^{あやめ}だってそう思ってるだろ！？」

大和は眉を下げながら、一言だけ言った。

「…………ご愁傷様？」

自分の城とも言える調理室で、何故大和がこんな不憫な目に遭っているのか。それを知るには、少し時を遡^{さかのぼ}らねばならない……。

今から一時間前。大和は今日も部活動に勤しんでいた。
今日はどら焼きを作ろう。そう張り切って冷蔵庫を開けた大和が目にしたもの。

これが、大和の最初の不幸だった。

「……餡がない」

どら焼きを作るには必要不可欠な餡を、今日に限ってちょうど切らしていたのだ。ちなみに、大和はどら焼きにカスタードクリームだとかいったものは邪道だと考えている。

「仕方ない、買ってくるか。先生！ 金！」

「先生、こんな堂々と教師から金をせしめようとする生徒は初めて見た」

「でもそんなことを言いつつ金をくれる先生が好きです！ アイラビューー！」

「ドントタッチミー」

存分に顧問である二階堂とふざけ倒した大和は部員二人を見て言った。

ちなみにこの部は廃部寸前である。しかし、寸前であるだけで何故廃部にならないのかは誰も知らない。

「俺は餡を買いに行ってくるけど、俺がいらないからって変なことをしないように！ 茹で卵はレンジで作るなよ！」

「「わかりました！」「」」

そんな部員二人の力強い返事の後に、チーンと軽やかな音。そして破裂音。

「おい今何か聞こえたぞ！」

「卵が爆発しました」

「もういい。広崎、行ってこい。こいつらは俺がしめとく」

大和は後ろ髪を引かれる思いで調理室を後にした。

廊下に出ると大和は真っ直ぐに購買を目指し始めた。

購買には弁当やパンの他にあまり買う人間はいなさそうなジャムなども売っている。きつと、餡も売っているだろうと大和は思った。しかし――、

「え、売り切れ!？」

「そうなのよ」。ほら、最近転入してきた可愛い子、いるじゃない。なんでもあの子があんこが食べたいって言い出したらしくて、男の子たちが……、ね」

「……………」

最近に転入してきた女子など小百合しかいない。大和の中で小百合の好感度がちよっぴり下がった。それと同時に大量の餡をいったいどうやって消費する気なのかと気になった。

落ち込む大和を見かねた購買のおばちゃんが、少し困った顔で大和に何かを持たせた。

「……………おばちゃん？」

「本当はこういうこと、しちゃいけないんだけどね。可哀想だからおばちゃんからのサービス。それにもあんこは入ってるから」
「……………」

大和が持たされたのはどら焼きだった。

どら焼きを引き裂き、中身の餡を取り出し、その餡でどら焼きを作る。なんだか意味のわからない工程である。

しかし、これの他に餡はなく、大和はおばちゃんのご厚意に甘えてどら焼きを持ち帰ることにした。

ゆっくり購買を出て、廊下に差し掛かった。

そして、此处で大和を第二の不幸、基元凶が襲う。

「転んだああああッ!？」

「夏輝いいいい!？」

「ッな、」

何かが落ちてきた。そう思う間もなく、大和は“それ”に押し潰された。

わざとかと思うくらい真っ直ぐ鳩尾に落とされた打撃に大和は思わず涙目になった。

「つぐ……!？」

「な、夏輝! 大丈夫……!？」

「ん! だいじょーぶ、だいじょーぶ! この少年が身を挺してあたしを庇ってくれたから!」

「勝手に事実を捏造するな……！」

とりあえず退いてくれ、と大和は自分の上に乗っている女の肩を叩いた。女はからからと笑いながら言う。

「なんだ、なんだ。つれない奴。普通、ナイスバディの女が自分の上に乗ってたら興奮するもんだろ」

「可笑しいな、まな板しか見えない」

「脳味噌引き摺り出されてーのか」

額に青筋を立てた女は、今度は素直に大和の上から退いた。酷い目に遭った、と大和が腰を擦る。

すぐ傍でおどししながら自分たちのやり取りを見ていたもう一人の女が恐る恐る大和に声をかけた。

「あ……あの、大丈夫……？」

「一応、身体は丈夫なほうだからな。大丈夫だ」

「そう、良かった……。夏輝がごめんね」

「ん！悪かったなー！少年！」

「もう良い……」

どうしてこいつは同級生だろうに自分のことを少年などと呼ぶのか。しかし、今の大和にはそんな疑問を指摘する気力も無かった。大和は疲れ果てた表情で言い捨てた。そしてどら焼きが潰れていないかを確認してから立ち上がる。不幸中の幸いとも言うのだから

うか、どら焼きは無事だった。

それじゃあ、これで、と大和がさつさと傍迷惑な女たちから逃げ出そうとすると、夏輝と呼ばれた女が大和の顔をじいっと見て、何かに気付いたような顔をした。

大和は物凄く嫌な予感がした。

「……ん？ あれ？ 君、広崎 大和か？」

「え……？」

「……夏輝、知り合いなの？」

「いや、うちの副部長の彼氏」

その言葉に思い当たる人物がいたのか、もしかして、と大和も思う。

「美穂の部活の、部長か？」

「そう、大正解！ そういう君は美穂の彼氏」

混乱する頭で、大和は一言だけ言った。

「……違うぞ？」

そうして何故か冒頭のような事態になってしまっわけである。

大和が調理室に戻ろうとすると、何故か夏輝たちも大和について

きた。なんの用だと言えば和菓子を恵んでほしいのと言う。
和菓子が好きな奴に悪い奴はいないというのが持論の大和。夏輝
の言葉に少しだけ上機嫌になり、喜んで夏輝たちを招き入れた。

しかし今、大和はその持論を撤回したくて堪らない。

「だいたいあたしの菖蒲を貶すとかいったい何考えてんだろっな、
あの雌豚は！ 酢豚にすんぞこら！！」

「な、夏輝っ……！ お願いだから落ち着いて……！」

先程から菖蒲が——なんと、生徒会長らしい——なんとか夏輝を
宥めようとしてくれているが、それでも夏輝は止まらない。それど
ころか、調理室にある食物を全て消費しようとしている。

後輩たちは夏輝に怯えているし、唯一対抗出来そうな二階堂はさ
っさと調理室を出ていつてしまった。

いつになったらこいつらは帰ってくれるのか、大和は泣きたくな
った。

9 調理部男子（後書き）

ちなみに、私はどら焼きはカスタードクリームとかじゃないと食べれません。

10 パソコン部女子（前書き）

小百合ちゃんがあんな過激な発言しといて全然出てこなくなっ
てしまった……。

10 パソコン部女子

「ぬがー！ー！！出来ない！なんなんだ、これは！ー！」

「落ち着いて！パソコン壊そうとしないで！ー！」

「ああ、部長。貴女は今日も来ないのですか……」

「副部长ー、これどうやるんですかー」

「ねーむーいー……。ぐう……」

新入生久しぶりに一人を除いて全員集合。ちなみに残りの一人は例の親衛隊に襲われ不登校になっている。

新入生は上から白川^{しろかわ}くん、杯田^{はいだ}さん、滝下^{たきした}くん、町谷^{まちや}さん、矢崎^{やばき}さんだ。なんとも個性的、というより濃すぎる部員達だ。ちなみに最近^{しん}は町谷しか来ていなかったから、一応新入生は集まった。だが、ここまで来るとさすがに面倒だ。

「矢崎、とりあえずあんた起きて」

「いったあ！？……副部长いつもあたしに酷すぎませんか？」

「寝てるあんたが悪い」

「えー、ちょっとだけじゃないですか」

「一日に二回以上は寝るのに？」

「……………」

黙り込む矢崎。言い返せないからだろうけど矢崎一人だけ相手をし続ける訳にはいかない。

振り向くとなんと杯田が公共物を壊そうとしている白川と部長LOVEとうるさい滝下を峰打ちで黙らせていた。峰打ちだけは天才的な確率で急所を狙える杯田、ナイス。

これならばらく置いておいても平気なようだ。そういえば大和が今日はドラ焼きを作っていた。少し抜け出して食べに行こうか。

美穂は杯田に任せ、パソコン室から出た。

……………

パソコン室と調理室は階が同じになっている。代わりに少し距離が遠い。歩きはじめたところで調理室から出てきた二階堂に会った。

「ああ、坂田。お前ちょっと頼むな」

それだけ言っただけで二階堂は去って行った。

何を頼まれたのかさっぱり分からない美穂は調理室でその理由、原因、自分がすべき事がすぐに分かった。

「部長！！こんな所にいたなんて……………！」

部長が居た。生徒会長も居る理由は知らないが部長は調理室の食料を食い漁っていた。大和が涙目で助けを求めている。事態は結構深刻なようだ。

「とにかく、行きますよ。」迷惑おかけしましたー」

「わーん、助けて菖蒲ー」

「え、…え？」

重い。ものすごく重い。恐らく部長が会長にくっついて会長まで引きずっているのだろう。

だがここに部長が居ては害虫同然。おまけに大和は完全に部長に負けていて追い出すのは不可能だろう。まあ、こっちも揃ったらやりたいことがあったからちょうど良い。

「歩くからー、歩くから副部長放してよー」

「放したらまた逃げるでしょう」

「ケチ」

「うるさい、部長なんだから仕事する！！」

いつも思うけどこの人本当なんで部長になったんだろ。副部長でもいいのに何故部長。本当この人ミステリアス。

「着きましたよ、今日はちゃんと話し合いますから。会長すいません」

「あ、いえ、大丈夫です」

「じゃあそういう訳で」

「逃げるな、部長」

慌てて部長を捕まえ、とりあえず議論に入ることにした。会長は部長の無理なお願いでここにいる。

「えー、それじゃあ、」

「おお、愛しい部長！ーやっと来てくれたんですね！」

「うわあ？！ーこつち来んな！気持ち悪い！！！」

「杯田、峰」

「了解です」

「ぬなっ！ー！」

滝下、沈黙。杯田が入部してくれて良かった、すごい助かる。部長にアイコンタクトをして話を進めるように促す。

「えーっと、今日は文化祭の出し物を決めるんだって。なんかいいのある？」

「部長、会長にくつついてないでちゃんと考えて下さい」

「いーじゃん」

「良くないです」

うーん、考え込む部長。しばらくして何か思いついたのか手をポン、と叩きこつちをニヤリと見た。……嫌な予感しかしないんだけど。

「よし、どうせ人数少ないしき、調理部と合同でクッキー作ろう、クッキー」

「え。ちょ、ちょっとそんなことして良い訳が……」

「部長命令」

「で、でも」

「何か問題でも？」

態とだ！絶対態とだ、私が料理駄目なの知ってやってる！！もしかしてさっきの根に持ってるのか？…？だとしたら怖いな、というか逆恨みでは？

「良いよね、菖蒲！」

「私は、良いと思う……」

「よしきた！！生徒会会長の許可貰ったし、調理部行ってくるわー」
会長を引っ張って部長はさっさと出て行った。珍しく部長の目が輝いていて仕事にやる気を持つのは有難いがそんな形で持ってほしくない。

「クッキーか。俺は辛い方がいいな」

「白川くん、それってクッキー」

「……あれ、部長は！？何処に行ってしまったんだ、愛しのハニー
……」

「副部長ー、結局これどうするんですかー」

「むにゃ、もう食べれないよう……」

「……とりあえずこいつら説教かな。」

10 パソコン部女子（後書き）

友人「最近さらに想像力が乏しくなっていく気がする…。頑張れ私の脳。」

友人が無駄に登場人物を増やし過ぎて、誰が誰だかわからなくなってしまったことを、友人の代わりに私が謝罪致します。申し訳御座いません。

11 調理部男子

騒がしい足音が徐々に調理室のほうに近付いてくる。逸早く異常を察知した大和は調理室のドアを閉めようとしたが、一步遅かった。ガラリと勢いよく開かれたドアの向こう側に立っていたのは先程の迷惑な女。大和は女——夏輝にラリアットを食らわせたくて堪らなかった。

「少年、少年！ 君の愛しのパソコン部部长様が会いに来てあげたよ！」

大和は本心をありありと表した表情を必死に隠し、ある一角を指差しにこやかに言った。

「お前の居場所は調理器具置き場だぞ？」
「あたしはまな板じゃねえ！」

夏輝は顔を真っ赤にして怒鳴った。
やはり、これだけでは帰らないか。まな板はまな板らしく大人しくしていれば、まだ少しは可愛げというものがあるのに。大和はまな板を前にかなり失礼なことを思った。

大和は、今度は出入り口を示して言った。

「あの出入り口が見えるか？」

「帰れってか」

大和の辛辣な物言いに對し、なんとも的確な突っ込みを返す女である。

嫌だ嫌だとは思っていても、一応慣れてきたのか、幾分か冷静な対応をする大和。

「とにかく、お引き取り下さい、まな板部長」

「君が息を引き取れ」

「この世に要らないものって、たくさんあると思うんだ。煙草とか、お前とか、ゴキブリとか、お前とか、ハゲとか、お前とか」

だんだんと目が剣呑な光を放ってきた大和を見て、夏輝は思わず冷や汗を垂らした。これ以上は、まずいかもしれない、と。

大和の後ろに避難していた後輩たちも、いつもとは違う大和の雰囲気におろおろしていた。

そんなとき、軽快な音と、次いで破裂音。

大和はゆらりと振り向き、後輩二人を見た。ホラー映画さながらの不気味な動きに怯える二人。

「……お前たちも、要らないのかなあ……？」
「あああッ！！ 少年！ 少年少年！ 今度はちよつと、本当に用があつて来たんだ！ まずはおたしの話聞いてくれ！！」

「ふうん……、なるほど。パソコン部と合同で、か……」
「うっ……。あたしは女だぞ……。何も本気で殴ることはないだろ」

調理室の椅子に座り、涙目になりながらこぶが出来てしまった頭を擦り、夏輝が言った。大和は夏輝の真正面に座り、夏輝を冷たい目で見つめている。

大和は夏輝の涙まじりの声に平然と返した。

「鏡なら其処にあるぞ？」
「貴様！」

何処までも酷い奴である。

大和は場を仕切り直すように、一度だけゴホンと咳払いをし、口を開いた。

「……何故、部の趣旨が全く違う俺たちを合同の相手に選んだのか

は理解出来ないが、うん、良いぞ」

大和は後ろを振り向き、後輩二人に訊ねる。

「お前たちも、良いよな？」

「勿論ツスよ部長！」

「私たちが部長の成すことに反対するわけがありませんっー！」
「そ、そうか……？」

何故か態度が急変してしまった部員たちに大和は首を捻る。
部員たちはすっかり大和に怯えてしまっていた。

「まあ、君らの了解が取れたのは良いとして……、顧問の先生のほうはどうなんだ？ 二階堂先生だっけ？」

夏輝が大和に訊ねる。夏輝は阿呆に見えて、中々しっかりとしている。
大和は問題ない、と首を振る。

「あの人は部活のことはほとんど俺に任せてあるから、大丈夫だと思っ」

「そか。ならいいや」

夏輝は軽く頷き、椅子から立ち上がると軽やかな足取りで出入り口まで向かった。

そのまま出ていくのかと思いきや、あ、と何かを思い出したような声を出して、大和を見た。

「なんだ？」

「お菓子は？」

「帰れよ」

大和は夏輝を蹴り出して調理室の鍵を閉めた。

現時点で大和の中での夏輝の立場は本多ハゲと同列であった。

11 調理部男子（後書き）

夏輝の口調が迷子。

12 パソコン部女子

今、美穂はかなり悩んでいた。放課後という絶好の勉強タイムなのに、勉強にも手をつけず、ただ悩み続けていた。ちなみに今日は部活が無い。

原因はこの前部長が強制的に決定した文化祭の出し物だ。

——料理、それは美穂が全く出来ないものの一つだった。小さい頃少しやっていた記憶はあるのだが、出来ない。一度大和とプリンを作ろうとして、絶対食べれそうにない奇妙な液体が出来た。未だにどうしてそうなったのかわからない。

「坂田さん、どうかしたの？」

声に顔を上げて固まった。椿が目の前に立っていたのだ、勿論男子を従えて。

前に説教をしたときとまるで態度が違う。これが七変化か、凄いな。少し躊躇があったが避けてばかりはさすがにまずいだろうと思い、話すことにした。

「椿…さんは料理は作れる？」

最近椿と呼んでいたので、さんを後から取り付けた。少し表情が動いたので多分本人も分かったと思う。だがそこはさすが椿というかすぐに笑顔で返してきた。

「作れるよ。でもそれがどうかしたの？」

首を傾げて今度は椿が質問してくる。これには答えることは出来なかった。料理が出来ないなんて、椿には口が裂けても言えなかった。言ったら馬鹿にされるのがオチだ。

ところで今気付いたが椿自体、女子に話しかけるのが珍しい。何かあったのだろうか。

「何でもない。ちょっと聞いてみたかったただけだから」

なんだか追求されているような気がして美穂はそのまま会話を終わらせた。逃げるように教室を出て3・2に向かった。料理関連では大和に頼るしか無いだろう。そう考えてのことだった。

「大和、いる？」

大和はいた、が呼ぶと宮城もついて来た。なんであんたも来るんだ。

「大和、その、文化祭のことなんだけど……」

「ああ、クッキーのことが」

「作り方、教えてくれないかな？」

「「作り方？」」

二人が同時に言う。二人とも目が点になってる。やがて宮城がなにかに気付いたらしく笑いはじめた。

「美穂、料理駄目だから大和に……？ぷはっ！、笑えるっ！！」

「う、うるさい宮城！！というかなんで知ってるの！」

「えー、結構有名だよ？女のくせに料理出来ないって」

「女のくせにとか言うな！！」

思いつ切りすねを蹴ってやった。前と同じように痛がる宮城。それよりも皆が私の料理下手を知っているという事実が恥ずかしい。

「で…、いいかな、大和」

「いいよ」

すんなりと了解を得ることが出来た。足元ではまだ宮城がうずくまっている。あと1時間そうしてろ。

とりあえず大和から了解は取れたのでいつやろうかと聞いたら今日でも良いと言う。私はその言葉に甘えて今日クッキーを教えてもらうことにした。

12 パソコン部女子（後書き）

友人「変に混乱させるような事をして申し訳ありませんでした。これからはそれらも配慮して頑張っていくのでよろしくお願いします」

多分、前に私が半分冗談で書いた名前の件についてかと思われます。

放課後、取り巻きの男子達と話をしながら帰りの支度をしていた小百合は坂田が頭を抱えて唸っているのに気付いた。前に説教やら何やらあったが話しておけば何か得な事があるかもしれないと興味半分で話しかけた。

「坂田さん、どうしたの？」

坂田が顔をあげる。瞬間顔が少し引き攣った。ちよつとの沈黙の後にやっと坂田は口を開いた。

「椿：さんは料理は作れる？」

あからさまに後からさんを付けたのが気に食わなくて少し苛立ったがすぐに冷静になり、なんでそんなことを聞くのか考える。結局答えが出なかったので質問に答える事にした。

「作れるよ。でもそれがどうかしたの？」

逆に質問で返してみたら今度は坂田が考え込みしばらくして、

「何でもない。ちよつと聞いてみたかっただけだから」

とだけ言ってそのまま鞆を持って教室から出て行ってしまった。その発言に更に苛立ちを感じながら近くにいた男子達に坂田が何故

あんなことを聞いたのか訊ねる。

すると一人の男子がさも当たり前のように坂田が料理下手だということを教えてくれた。

今まで欠点が見えなかった坂田の弱点が見つかった。まさかそれが料理だとは思ひもなかったがこれでひとまず一歩前進出来た。

今日は一人で帰ると男子達に別れを告げ教室から出ると3・2から「女のくせにとか言うな!!」という坂田の声が聞こえてきた。成る程、情報は事実のようだ。

さて、どうやって坂田を出し抜き大和を落とそうかと考えてこの前大量に持ってこられた餡を思い出した。確かに食べたいと言ったがそんなに持つてくるか、と仰天したものだ。

あのあと食べきれずに余ったものがまだあるはずと思い、その餡で何を作ろうかと小百合は考えながら下校して行った。

13 調理部男子

大和は調理準備室の棚や冷蔵庫を漁り、クッキーを作る為に必要な材料を確認していた。

「……うん、一通りあるな。あ、バターは出しておこう。あと卵も……。で、飾り付け……」

大和は引き出しを開け、中にあったココアパウダーとチョコチップを取り出した。

「……どっちを使おうかな。ココアクッキーを作って、プレーンクッキーにチョコチップを混ぜるのも良いかもしれない」

ココアパウダーをチョコチップを持って考え込む大和。そんなとき、調理準備室の扉が開かれ、部員である青山あおやまが入ってきた。

「部長ー、坂田先輩来たッスよ」

「あ、もう来たのか？わかった、今行く」

悩んだ末、大和は両方を持って準備室を出た。

準備室から出ると、バターを不思議そうにつついていた美穂が大和を見た。

「どうしてバターと卵だけ出てるの？」

「バターと卵は最初に室温に戻しておいたほうがやりやすいからな。それかバターは湯煎ゆせんするか」

「……？」

室温も湯煎もわからないのだろうか。それともバターと卵を温める意味か。いや、両方かもしれない。想像以上の美穂の無知さに大和は愕然とした。

「あと、この粉なに？」

「重曹とかが入ってるやつだ。……今日来たのはお前だけか？」

「うん。部長も来たがってたけど、置いてきた」

「なるほど、さっきからドアを壊れそうなくらい叩いているのはあいつか」

青山まつしまか松島、それとも二階堂か美穂が鍵を閉めたのだろうか。二階堂がその必死過ぎる打撃に恐怖で顔色を悪くしていた。なんにせよ、その素晴らしい判断に大和は拍手を送りたくなった。

「青山！ 愛してる！」

「え！？　なんで！？　じゃあとりあえず俺も愛してるツス部長！」
「あれ？　松島愛してるぞ！」
「いつから部長はそんな軽い人になったんですかー。でも私も部長愛してますー！」
「じゃあ、先生愛してます！」
「じゃあつてなんだ。はいはい、俺も愛してますよー。いきなりどうした」

大和の感謝の愛の告白に各々何処か見当違いな答えと愛を返した。どうやら三人は鍵を閉めていないらしい。だとすれば、

「……あつ、美穂！　愛してる！」
「なに？　私はおまけ的な？」

美穂は大和の言葉に少し嫌そうな顔で返した。しかし、その頬は淡く色づいている。大和が気付くはずもないが。
自分を救った救世主に感謝の意を示して満足した大和は、拳を突き上げて言った。

「……よし、早速クッキーを作るぞ！」
「「おー！」」
「おー」
「お、……おー……」

大和の言葉に青山と松島がやる気に漲^{みなぎ}った返事をした。遅れて二

階堂がやる気の無さそうな声で、美穂は羞恥からか小さな声で言った。

「えーと、じゃあ俺と先生がまずはお手本を見せるから、美穂は青山と松島に手伝ってもらいながら後に続いてくれ」

大和が言つと、横でぶにぶにしてきたバターをつついていた二階堂が嫌そうな顔をした。

「ええつ。俺もやるのかよ。先生クッキーだけもらおうと思つてたのに」

「働かざる者生きるべからず！」
「重いな」

此処で大和の手伝いをしなかったら、いったい自分はどのようなのだろつ。二階堂は少しぞつとした。

二階堂のそんな様子には全く気付かずに、大和は青山たちを見た。

「じゃあ、青山、松島、頼んだぞ。美穂は料理が苦手だから」

「はいッス！ 坂田先輩、よろしくお願いします」

「うん、よろしく」

「それにしても坂田先輩つて本当に料理出来ないんスね！ だつさ！」

「料理は女の嗜みなのに出来ないんですねー！ ぷぷ、だつさ！」
「なにこの子たち凄くムカつく」

青山たちにはによと馬鹿にしたような笑顔で美穂を見た。美穂はピクリと頬を引き攣らせたが、自分の部の後輩ではないからか、鋭い蹴りが繰り出されることはなかった。

「……えーと、まずはバターを白くなるまで混ぜます」

対応に困った大和は結局そのまま調理の説明をすることにした。大和の説明に美穂がきよとした顔を見せる。

「白くなるまで？」

「白くなるまで」

大和は頷く。益々不可解だといった顔で美穂は更に訊ねた。

「バターって、黄色いのに白くなるの？」

「……………。とりあえず見ててくれ。先生頼んだ！」

「俺か」

二階堂はスーツの裾を捲り、泡立て器を持ち、バターを素早く掻き混ぜた。みるみるうちにバターは白くなり、二階堂はそれにブラウンシュガーとグラニュー糖を加えた。

「あ、今、先生が入れたのはブラウンシュガーとグラニュー糖な。名前くらいは聞いたことあるだろ？」

「うん、一応」

「これすらわかんなかったら女捨ててますよねー」

「そろそろ蹴っても良いよね」

一々茶々を入れてくる青山たちに美穂の堪忍袋の緒はもう限界だった。些細なことでもはち切れる。美穂はそんな可笑しな確信を持った。

「こらこら、仲良くしてくれ。あと、暴れると埃がたつからやめろよ？ 蹴るのは後でだ」

「ええっ！ 部長！ 可愛い後輩を見捨てるんスカ！」

「先生からもなんとか言って下さいよー！ 可愛い部員からのお願い！」

「可愛い……？ 憎たらしい後輩なら其処に三人もいるんだがな」

「ブルータス！ お前もか！」

いつもこんなくだらないことをしているから、調理時間が遅れるということに大和は気が付いた。大和は話している間もずっと動いていた二階堂の手元を覗き込んだ。

「あ、出来てるな。先生、もう良いぞ」

「ん、あー、手が疲れた」

二階堂はボウルを大和に手渡し、手を少し振った。大和はボウルを美穂たちに見せた。

「こんな感じに跡が残るようになるまでふわふわに泡立ててくれ」

「……努力はする」

「結果を残してな」

美穂はぐつと泡立て器を握ると勢いよく掻き混ぜ始めた。

「美穂、飛び散ってる」

「坂田、素早く掻き混ぜるのと力一杯掻き混ぜるのは先生なんか違う気がする」

「仕方ないッスねー。俺がやるんで次の工程は先輩やって下さいよ？」

青山はそう言うとき美穂からボウルを受け取り、軽々とバターを泡立てブラウンシュガーを加えた。美穂は女として敗北感を感じた。

リベンジだと言わんばかりに美穂は掻き混ぜ始めた。

「美穂、飛び散ってる」

「坂田、だから違う」

「仕方ないですねー。私がやるから先輩はもうやめて下さい。そのうち中身なくなりますよー？」

松島はそう言って美穂からボウルを奪い取った。美穂は自分と青山たちと何が違うのかを真剣に考え始めた。

「……うん、一応出来たみたいだし、先に進むな。次は、溶いておいた卵を二回にわけて入れて、よく馴染ませるんだ」

「どうしてわざわざわかるの？ どうせ全部入れるのに」

「少しずつ加えるとバターとよく混ざって分離しにくくなるんだ」

話しながら大和は予め用意してあった卵を加えて混ぜた。ほう、と美穂は感心したように頷いた。部長なだけはある。

美穂も見よう見まねで混ぜてみた。さすがにこれは出来なければ女以前に知恵を持った人間としてまずい。

「ん、出来たな。次はふるっておいた薄力粉、重曹、アーモンドパウダーを二回にわけて入れて混ぜてくれ。あ、ゴムべらでな」

二階堂は大和の説明と同時進行で作業を進めた。その手慣れた手つきに美穂の目は釘付けた。

「……これ、どう混ぜてるんですか？」

「ゴムべらを縦に入れて、底からすくって、切るようにして混ぜる」

美穂の問いに二階堂は淡々と答えた。よくわかっていなさそうな美穂に、大和がフォローを入れた。

「まあ、混ぜ方なんて気にしなくても大丈夫だ。混ぜてさえいればだいたい出来るから」

「……頑張る」

美穂はぎこちない動作で生地を混ぜた。今にも生地がボウルから飛び出そうだ。

「……じゃあ、次はココアパウダーを入れてくれ。こっちはチョコチップを入れるから。さっくり混ぜるんだぞ」

「さ、さっくり……?」

大和は横目で美穂の手元を見ながらボウルの中身を混ぜる。こいつは相変わらず本当に不器用な奴だ、と思った。

「、よし、混ぜたな。じゃあ、この生地を一時間寝かせ、」

「一時間!？」

「たものが此方でーす!」

「ええ!？」

「料理番組かよ」

青山と松島が調理室のほうの冷蔵庫の中からボウルを取り出し、

今まで大和たちが手にしていたボウルを冷蔵庫に入れた。

悪戯大成功、と大和たちはハイタッチをした。二階堂は呆れている。

「これはなんにも入っていないプレーンクッキーの生地だから、適当に型をとって、あとは焼くだけだ」

美穂にクッキーの型を渡しながら、同時に指示を出した。

二階堂はその様を見ながら大和は将来良い主夫になりそうだったと思った。

13 調理部男子（後書き）

いつも以上に文が乱れてますね。台詞が続いてるところが多くて読みづらい。

くしたものは此方です！をやりたいがために頑張った。けどさすがに全工程載せなくても良かった気がする。疲れた。

14 パソコン部女子

美穂は一度大和と別れ、下駄箱に向かった。

一緒にそのまま調理室に行っても良かったのだがどうしても確認したいことがあった。一つの下駄箱の中の靴を確認してから思わずガツポーズをした。ちょうど通った後輩に見られ、不審な目で見られた。

私が確認したのは椿の下駄箱だった。今、椿は大和を狙っているから部に来る可能性は否定できない。ましてや今来られては美穂の料理下手がばれては困る。

とにかく美穂は椿が帰ったことを確認すると安心して調理室に向かった。

……

ガラリと扉を開けてカチャリと鍵をかける。既に調理室のメンツは大和を除いて全員いた。机の上には道具と卵とバターがのっていた。興味半分でバターをつついていけると準備室から大和とその後輩、青山が出てきた。どうやら元々準備室に居た大和を青山が呼びに行きたらしい。

「どうしてバターと卵だけ出てるの？」

「バターと卵は室温に戻しておいたほうがやりやすいからな。それ

かバターは湯煎するか」

「……？」

室温、湯煎。はてさてどこか（授業）で聞いたことがあるような。大和はそんな美穂を見てかなり呆れているようだった。

「あと、この粉なに？」

「重曹とかが入ったやつだ。……今日来たのはお前だけか？」

他に誰か来ると思ったのだろうか。こっちの部員が料理が出来るかは知らないが嗅ぎ付けてきた奴は一人いた。

「うん。部長も来たがってたけど、置いてきた」

「なるほど、さっきからドアを壊れそうくらい叩いているのはあいつか」

叩いている音の間に開けてよー、と時折聞こえてくる。これじゃあ部長と本多のレベルが同じだ。部長、やる気出さなくても良いからそこまで落ちぶれないで下さい。二階堂の顔色が悪い。すいません、後で言つときます。

「青山！愛してるー！」

「え！？なんで！？じゃあとりあえず俺も愛してるッス部長！」

「あれ？松島愛してるぞ！」

「いつから部長はそんな軽い人になったんですかー。でも私も部長のこと愛してますー!」

「じゃあ、先生愛してます!」

「じゃあってなんだ。はいはい、俺も愛してますよー。いきなりどうした」

まさかの告白タイムにちょっとポカンとなる。……これがこの部の普通なのだろうか。見ていてコントのようだ。いつも放課後は時間があるから上手くやれば沢山作れるはずなのだが、成る程これでは作れそうにない。

大和はえ?という表情になりしばらく考え込む。

「……あつ、美穂!愛してる!」

「なに?私はおまけ的な?」

明らかに後から思い出したように言われたので嫌悪感を言葉に含ませた。は、やはり言葉的には嬉しい。美穂は顔が少し熱くなるのを感じた。

「……よし、早速クッキーを作るぞ!」

「「おー!」」

「おー」

大和が拳を上げると青山と松島が元気よく返事をし、二階堂がどうでもいいと言うように返事をする。

「お、……おー……」

美穂は恥ずかしくて小さな返事をした。顔が更に熱くなるのを感じた。

……

型抜きをただ黙々とする。それから後は思い出さなくらい酷かった。青山と松島には散々馬鹿にされたし、大和と二階堂からは駄目だしはされ、もう疲れた。

「はぁ……」

思いだした。小さい頃少し料理の手伝いをしていたが、あまりにも危なっかしいのでドクターストップならぬマザーストップを受けたのだった。

私だって料理は作りたいが止めると言われたからには無理には出来なかった。そして今に至るという状況だ。

「どうした？」

「ひゃあっ!？」

「うわっ!？」

不意に現れた大和に驚き思わず情けない声を上げてしまった。その声に驚いたのか大和も驚き声をあげた。

「あ……、ごめん」

「いや……、で、どうしたんだ？」

「んー、ちょっとへこんでて」

大和はすぐに分かったのか（すぐに分かって困るのだが）、料理のことか、と言った。間違いでは無いのでとりあえず頷いた。大和は考え込んで、

「心を込めればいいんじゃないか」

と言った。

心を込める？と聞き返すと「うん」と頷き返した。

「下手でも、心を込めればまた違ってくるんじゃないか」

心を込める……、小さく反復する。なんだか自分の中で何か払拭されていく気がした。ありがとう、とそれだけ言つと私はまた黙々と作業を始めた。

14 パソコン部女子（後書き）

うつ、相変わらず上達しない。

15 調理部男子

翌日、朝から大和は菓子を貪っていた。珍しく洋菓子である。

「お、なにそれ。クッキー？」

「クッキー」

目敏くそれを見つけた宮城が大和に近寄る。

大和が持っていた菓子はクッキー。昨日、部員たち、それと美穂と一緒に作ったクッキーである。

本当は昨日のうちに全て食べてしまおうかとも思った大和だったが、夕飯前に菓子をあまりばくばく食べるのはいけないと残していたのだった。変なところで大和は真面目だ。

ちなみにプレーンクッキーのほうは調理部とパソコン部^{スタッフ}たちが美味しくいただきました。

「へー、俺にもちよーだい。これチョコチップ？ 美味そう」
「良いよ」

快くクッキーを分け与える大和。宮城は嬉しそうな顔でクッキーを口に入れた。

「おー、美味い。やっぱりお前料理上手だよなあ。こっちも食って良
い？」

「……別に良いけど、」

よっしゃ、と小さく呟いて宮城が一つつまんだのは、美穂たちが
担当していたココアクッキー。大和は少し心配そうな顔で宮城を見
た。

「え、堅^{かた}っ」

バキ、というクッキーにはあるまじき擬音が聞こえた。大和が悪
いわけではないのに、大和はなんだかとても申し訳ない気持ちにな
った。

「なにこれ。堅焼き煎餅？ クッキーと堅焼き煎餅ってどういう組
み合わせだよ。やっぱりお前、変わってる……、え、ココアの味がし
てきた。なにこれ怖い」

「それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」

「クッキー？ 嘘だろ？」

大和が作ったクッキーと材料は同じだろうに、何をどうしたら此
処まで変わり果てた堅いクッキーを練成出来るのか、宮城には理解
出来なかった。

口の中のクッキーらしき物体を砕くことは出来たが、堅過ぎて飲み込むに飲み込めない。無理に飲んでしまえば喉を傷付けてしまいそうだ。宮城は恐怖した。

大和が飲み物を買ってきてやるべきか真剣に悩んでいると、別クラスであるはずの小百合が何故か、此方が遠慮してしまいそうなど堂々としてきた。相変わらずの輝かしい笑顔である。

「大和くん、おはよう」

そして、やはり小百合の目には大和しか映っていないらしく、大和だけに挨拶をした。隣で危険物に苦しむ宮城などアウトオブ眼中である。

「おはよう、椿。どうした？」

「大和くん、和菓子が好きだった前に言ってたから、お饅頭作ってきてみたの。お近付きの印に。食べてみて？」

「へえ、ありがとう！」

大和の小百合への好感度がちよっぴり回復した。もし、これが恋愛ゲームならば、大和の背景には大量の光と共に薔薇が咲き乱れていただろう。

大和は饅頭一つで眩い笑顔を簡単に見せてくれる安い男である。小百合は大和の笑顔にうっとりとしていた。

「あ、そうだ。じゃあ、俺もお近付きの印に！クッキー、食べても良いぞ」

「わあ、本当？　ありがとう！　わたし、とっても嬉しいっ」

小百合は笑顔で大和からのチョコチップのクッキーを受け取り、ぱくりと食べた。

最高級のクッキーでも食べているかのように、大和の手作りのクッキーを大事に大事に味わっている小百合。そんな小百合を見て、大和はクッキーすら食べられないほど劣悪な環境に置かれているのか、と哀れんだ。相も変わらず大和は鈍い男である。

「美味しい！　料理上手なんだね。こっちも食べていい？」

「あ……、それは、」

小百合は輝く笑顔のまま美穂が作ったココアクッキーを齧る。瞬間、小百合の笑顔が固まった。

「……あ……、か、堅焼き煎餅……かな？　大和くんって、本当に和菓子好きなんだね。……ココアの味がするなんて、独創的な料理ね」

「……それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」

「……嘘でしょう？」

これがクッキーなの？とも言いたげな顔で、小百合は歯形がついたクッキーを見つめた。

どうして自分も見ていて、尚且つ青山たちも一緒に作ってくれていたクッキーがこんなことになるのか、大和も不思議だった。そして、自分の歯の頑丈さに感謝した。味だけを見れば、普通のクッキーなのだから。

気まずい空気になってしまったのを察してか、宮城が言った。

「ところで大和。お前、椿からもらった饅頭食ってみれば？ ほら、口直し」

「あ……、うん！ 食べて！」

「……じゃあ、」

いただきます、と大和は饅頭を一口に放り込んだ。黒糖の香りと餡の滑らかな舌触りが口の中に広がる。大和は饅頭を飲み込んでから口を開いた。

「黒糖の匂いが、凄いな。結構入れただろう」

「あ、うん。中の餡が甘さ控えめだったみたいだから、量を増やしてみたの。……どう？」

「美味しい！ 俺、こういう味、好きだ！」

「良かったあ！」

不安げに曇っていた小百合の顔が一瞬にしてパアツと輝いた。

美味しい、美味いと饅頭を頬張る大和。そして、それを恍惚の表情で見つめる小百合。宮城は、これで小百合の性格が良かったら良いのに、と思った。小百合は色々勿体無い女である。

「そついえば思ったんだけど、椿って何気に料理出来るんだな」

宮城が意外そうな顔で言う。小百合は当然、と頷いた。

「だって、女の子ならこれくらい出来て当たり前でしょう？ それに、練習したもの」

「ああ、本当、勿体無い」

宮城の言葉に大和小百合が首を傾げた。中々気の合いそうな二人である。

椿 小百合視点 6

朝から小百合は今までになく気合いが入っていた。

いつもより早く起きて、身嗜みを整え、可笑しなところがないかを入念にチェックしてから家を出た。学校に着くまでも何度も手鏡を見ては乱れたところはないかを確認した。

とにかく、気合いが入っていた。それも全て、大和の為だった。

今日だけは女も男も誰も気にならない。いや、大和のことしか考えられなかった、というほうが正しいのかもしれない。

朝のホームルームが終わると、小百合は皆の怪訝そうな視線を無視し、昨日のうちに作っておいた饅頭を持ち、教室を出た。

いた、大和くん。小百合は内心でそつと呟いて、完璧な笑顔を装備した。

家で何度も鏡を見て笑顔の練習をしていた小百合。今の自分は、世界一可愛い。そう自己暗示をかけ、小百合は大和に歩み寄った。

「大和くん、おはよう」

大和は小百合の存在に気が付くと何かに向けていた視線を小百合

のほうに遣り、につこりと笑い、挨拶をしてくれた。おはよう、椿と。そんな些細なことでも、小百合の心はときめいてしまう。

「どうした？」

何用かと問う大和に、小百合は本来の用事を思い出し、浮かれる心を叱咤した。緊張のしすぎてどきどきと五月蠅い心臓を無視して、手が震えていないかを確かめてから、小百合は饅頭を持っていた手を大和に差し出した。

「大和、くん、和菓子が好きって前に言ってたから、お饅頭作ってきてみたの」

小百合は混乱しかけている頭で考えた。どうしよう、何も可笑しなことは言っていないと思う。だけど、心配だった。

待て、これでは自分が大和に行為を持っているということが丸わかりだろうか。別に、それでも良いが、いや、やっぱり良くない。恥ずかしい。

小百合は苦し紛れの一言を後から付け足した。

「お近付きの印に。食べてみて？」

大して与えられる印象が変わりはしないことに、小百合は一瞬で気が付いた。

しかし、大和はパツと顔を輝かせて言った。

「へえ、ありがとう！」

（ああっ！ 眩しい！）

小百合は危うく倒れ込むところであつた。それほど、大和の笑顔は破壊力があつた。

小百合の目に映る大和の背景には、大量の光と共に薔薇が咲き乱れていた。小百合の乙女フィルターは、（少なくとも小百合にとつては）素晴らしい効力を発揮していた。

思わず恍惚のため息を吐くと、今度は大和がクッキーを差し出した。小百合は迷わず受け取り、食べる。優しい甘さが身体中に沁み渡るようだった。

「美味しい！ 料理上手なんだね。こっちも食べていい？」

大和が何かを言いかけていたが、小百合はそれに気付かないふりをしてクッキーを齧った。

さっきまで幸せに浸り切っていた頭は一気に混乱した。見た目を裏切る硬度を持ったそれは、どうやらクッキーではなく、堅焼き煎餅だったらしい。

フォローが出来ない。これはさすがに美味しいだなんて言えない。小百合は当たり障りの無い言葉を吐き出した。

すると、大和が一言。

「……それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」
「……嘘でしょう？」

こんなものをクッキーと呼ぶには、おこがましすぎる、と小百合は思った。しかも、坂田が作ったものだっただけは。

坂田自身に小百合を陥れようという意図はなかっただろうが、小百合はまんまとしてやられた気分だった。

それにしても、と小百合は堅焼き煎餅クッキーを見た。

よくもまあこんな物体を生成出来たものだ、と思う。料理が出来ないとは聞いていたが、まさかこれほどまでとは。坂田は女として色々失格なのではなからうか。

小百合が哀れむような複雑な心境を抱いていると、不意に宮城が言った。

「ところで大和。お前、椿からもらった饅頭食ってみれば？ ほら、口直し」

よく言った。小百合は宮城を力一杯褒めちぎりたかった。たまには阿呆も自分の役に立つようだ。

そう、今こそ、坂田と自分の魅力の差を大和に見せ付けるのだ。小百合は期待と不安が入り雑じった眼差しで大和を見つめた。

ゆっくりと大和の口に饅頭が運ばれていく。やがてそれは咀嚼され、飲み込まれた。大和が口を開く。

「黒糖の匂いが、凄いな。結構入れたらう」

さすがに気付くか、と思いながらも小百合は緩む頬を隠せなかった。こんな細かいところまで気が付くなんて、なんだか嬉しい。

「中の餡が甘さ控えめだったみただから、量を増やしてみたの。…どう？」

「美味しい！俺、こういう味、好きだ」

わたしも（饅頭じゃなくてあなたが）好き！と叫びたい気持ちをぐっと堪えて、何も言わず、満面の笑みを見せた。

小百合の大和の好感度を上げようという作戦は、かくして大成功に終わったのであった。

椿 小百合視点 6（後書き）

私の書く小百合は大和と一対一のと時のみ乙女になるようです。

16 パソコン部女子

美穂はものすごく落ち込んでいた。手元には昨日自分が作ったクッキーがある。原因は他でもないこのクッキーだった。

……

昨日、美穂は帰ってから初めてちゃんとした形に出来たクッキーを感動しながら食べた——はずだった。食べれなかった。なんとか噛み砕くことは出来たが、なんとも後味が悪い。

（これは、本当にクッキー？）

見た目はクッキー、中身はよく分からないもの。何なんだ、これは。おかしい、今回はちゃんと手順も合っていたし、材料の分量も間違えていない。青山と松島にも手伝ってもらったのだ。間違えるわけがない。

……あれか？あのサククリってところか？いや、あれはココアを入れるところだ、違うに決まっている。

そんなことを悶々と考えていたら頭が痛くなってきた。結局クッキーは放置した。

……

——結局クッキーは食べれないので仕方ないから誰かに押し付けてしまおうかとほとんど投げやり状態になっていた。

美味しそうなクッキーを一つつまんで口に放り込めば途端にガキリ、と嫌な音。どこを間違えたんだ、と必死に考えていると後ろから突然声をかけられた。

「珍しく、元気がないな!!」

「?!!!」

近くで、それも大声で声をかけてきた。私は奇声しか口にできなかった。まあ、こんなことを出来る奴は少なくとも私の知っている中では一人しか存在しない。

「……本多、うるさい」

「おお!それはクッキーか!?!」

無視。まさか無視されるとは思わなかった。ちよつとの間思考停止になり、すぐに回路復活。クッキーについて聞かれたという事を理解し終わると言葉を探す。

「そうだけど?」

「ふむ、貰うぞ!」

「っな」

いきなりひよいと手を伸ばしクッキーを口に放り込んだ。あつという間の出来事だったので制止することも出来なかった。ああ、どうしようか、と頭を抱え込む。

「ぬう！美味だ！」

「……はい？」

「中々の味だ！坂田が作ったのか？」

あのクッキーをまるで最初から普通のクッキーをだったかの様にバリバリと噛み砕いている。私個人としてはサクサクが良かったのだが。

「そうだよ…。ていうか美味しいの？」

「先程からそう言っておろう」

平然と言つてのけた。野球部キャプテンは一味も二味も違うんだな。そのあともばくばくと食べていたので最終的に全部あげた。こっちも処理に困っていたからちようど良い。

しかし、まさか美味しいと言われるとは思っていなかった。相手は本多だが美味しいと言われて嬉しくない人はいないと思う。

——心を込めればいいんじゃないか——

不意に大和の言葉を思い出す。そうだね、本当にその通りだ。作れば分かってくれる人は必ずいる。さっきの落ち込み具合から打って変わって少しハッピーな気持ちになりながら今度何か挑戦してみようかと思った美穂だった。

16 パソコン部女子（後書き）

浅知恵を絞りすぎたせいかさらに馬鹿に近付いた気がしてならない。
これからこんな私の小説を見てくれれば幸いです。

17 調理部男子

放課後。暖かな夕陽が窓から射し込む頃。大和と夏輝は何故か生徒会室で菖蒲を巻き込んで、文化祭の話し合いをしていた。

学校の地図を机上に広げながら必死に説明をする菖蒲。そんな菖蒲の顔を一心に見つめている夏輝と、頬杖をつきながら聞き流すように話を聞いている大和。菖蒲の苦労は計り知れない。

大和はお茶請けのせんべいに手を伸ばした。が、何も無い。既に夏輝によつて食い尽くされていたようだ。見境無しか。仕方なしにお茶を飲んだ。

「そ、それで、パソコン部と調理部合同の出し物は此处でやることに決まったんだけど……」

菖蒲は説明をしながら、おどおどと夏輝と大和の顔を窺っている。自信なさげに、声はだんだんフェードアウトしていった。

菖蒲の白い指が示す箇所を見つめながら、大和が言う。

「ふうん、校門付近か。やりやすいのかやりづらいのか、微妙なところだな」

「う、ごめんなさい……」

大和の言葉に菖蒲は目を伏せた。細い肩を強張らせて、大和の視線から逃げるように身体を小さくしている。すると、夏輝がムツとした顔で菖蒲のフロアに入った。

「良いじゃん。来た人間、皆の目に触れるんだから、やりやすいに決まってるだろー?」

「別に嫌だとは言っていないだろう」

勘違いをさせたなら、悪かったな、と大和が小さく言った。表情は気まずげだ。菖蒲は慌てて首を横に振った。その様を見て、夏輝は満足気に笑んだ。

「それに、何処でも良いって言ったのはあたしたちだ。文句なんて言えないし」

「おい、それは聞いてない」

サツと表情を変えた大和。それを一瞬で察知した夏輝が菖蒲の背に隠れようとするも、時すでに遅し。がしつと頭を掴まれ、アイアンクローをお見舞いされた。場所取りという重要な案件を、何をお前の独断で決めてくれているのだと。

頭が割れてしまうのではないかと思うほどの痛みにも死にもがく夏輝だったが、その抵抗も空しく、結局夏輝が謝るまで大和の手が離されることはなかった。

大和と夏輝が落ち着いたところで、菖蒲が切り出した。

「……それで、部活の出し物は部活の予算になっちゃっただけど、余裕はある？」

暫し考え込む二人。先に口を開いたのは大和だった。

「……これからまたいくつか調理実習を控えていることだし、あまり使いたくないな。パソコン部のほうにはいくらくらい部費がいつているんだ？」

その質問を受けて、菖蒲は本棚の中からあるファイルを取り出し、ページをぱらぱらと捲った。どうやら、菖蒲が取り出したファイルは各部の詳細が書かれた書類をまとめたものようだ。

「ええと……、インク代とかコピー用紙のぶんで四万五千。人数が文化部のわりに結構いるみたいだから、そのぶん上乘せで五千」「五万か。中々だな」

答えを聞いて、大和はふむ、と少しの嫉妬も混ぜて頷いた。自分の部活よりも一万多い、と。

「でもインクも用紙もそこませすぐに消費しないだろう？　いくら残ってるんだ」

「えーと……、ほとんど残ってないんだな、これが」「なんで!？」

夏輝は誤魔化すような笑みを浮かべて、頬を掻いている。大和の頭には、一瞬、最悪な展開が過った。

よもやこの女、部費を部に関係の無いことで使い込んではいないだろうな。

半ば祈るように夏輝を見つめると、夏輝はぼそりと言った。

「お茶と、お茶請けのお菓子を、」

「そのなければのものも削りたいのかまな板」

悉く（嫌な）想像通りの行動しかない夏輝にはほとほと呆れ果てる。大和は表情を引き攣らせながら、夏輝に渾身の蹴りをお見舞いした。

「ぬおおおお……！」

夏輝は頭を押さえて蹲っている。そんな夏輝に慌てて駆け寄る菖蒲。大和は痛む足を擦ってお茶のおかわりを入れた。荒み始めた心が少し落ち着いていた。

「……まあ、済んだことはもう仕方ない」

「さすが少年！ おっとこまえ〜！ 菖蒲は可愛い！」

「っえ……！ あ、ありがとう……」

何故こいつらは隙あらばいちゃつこうとするのか。大和は少し冷めた目で二人のやり取りを眺めていた。

ふと、大和が窓の外に目をやると、かなり日が暮れてきていた。もう電気をつけていなければ作業が滞ってしまうような時刻だろう。話はもう終わっている。解散を告げようとした大和に、夏輝がさつきまでとは違う真剣な目で大和に言った。

「少年、きみって最近、あの女と仲が良いんだってな」
「、椿のことか？ …… まあ、友人だからな」

それがなんだ、と大和は夏輝を見遣る、菖蒲は少しでもだけ顔色を変えた。夏輝は何も言わず俯いていたが、すぐに顔を上げた。

「きみ、落とされんなよ」
「落とされ……？」
「……意味がわからないなら、それで良いわ」

訳がわからないと顔を歪めた大和に、菖蒲が囁くようにそつと言う。

その言葉の意味がわからなければ、お前たちが危惧していることの回避もしようがないだろうに。大和は声に出さず、心の内で思った。

「もう目ばしい奴は落とされてる。あたしら女子にとってはさ、きみが最後の砦みたいなもんなんだ」

「とり、で？」

「……私たちね、この学校を守りたいの。これ以上、崩れないように」

神妙な顔で菖蒲が呟いた。夏輝は眉を寄せて言う。これ以上は、抑えきれないのだ、と。

相変わらず大和には理解出来ない言葉だったが、この学校にとって、何か良くないことが起きようとしているということだけは、わかった。

「あたし、あの雌豚は嫌いだけどな、あいつは悪くねえって知ってるから」

「……この学校は、勝手に崩れたのよ」

菖蒲の最後の言葉が、自棄に大和の耳についた。

17 調理部男子（後書き）

部の予算の振り分け、文化祭については適當です。想像上のものですので、あまり突っ込まないでいただけると嬉しいですよ。

18 パソコン部女子

カタカタとキーボードを叩く音が静かなパソコン室に響く。今日は私と男子部員二人しか部活に来ていなかった。

よりもよってなんでこいつら、と嘆いたが今日は割と大人しい。実は二人には客寄せのためにポスターを造ってもらっていた。部活のポスターくらい造ってもらおうと思ったのだがほとんどが逃げ帰り、最終的に残っていた二人に強制的にやらせることにした。

「わか、らないっ!!」

「お、落ち着け!」

「はぁ……」

滝下は部長LOVEになるまでは一応真面目だったようだ。今は杯田の役割を担ってくれている。なんとも有難いことだ。

部長は会議に行ってくるとか言ってさっさと出て行ってしまった。

この様子では恐らく今日はもう顔は出さないだろう。

突然、何を感じとったか二人の動きがほぼ同時に止まった。二人はそのままパソコンの置いてある机の下に潜った。正面から見れば分からないだろうが横から見れば丸見えだ。

しばらくすると足音が遠くから聞こえてきた。いろんなタイミングで足音が聞こえてきたからまあまあ的人数だと思う。近付いてきたがパソコン室には止まらず、進んで行った。白川と滝下はほっとした顔で机の下から出て来た。

「一体どうしたのよ」

「ふ、副部長はあれが分からないと言うのか」

「あれは部長とは比べものにならない椿という恐ろしい奴の親衛隊だよ」

どうやら逃げ回っているようです。既に親衛隊の被害に遭っている部員がいるのにこいつらまで狙われてたのか……。少し頭が痛くなった。私にはイケメンとか普通の顔とかよく分からないけど少なくともこいつらは普通辺りに属するんじゃないか？
まあ、大体の男子は色んな意味で終わってるからまだマシだ。というか宮城も狙われないのにお前らが狙われるって……。

「副部長ー、会議終わったよー」

「ん、お疲れ部長」

珍しく生徒会長を連れずに単独で来た。こういうときはちゃんと仕事をするときだけだ。

戻って来るとは思わなかったがまあ良い。確か今日の会議は場所決めがどうか言っていた気がするから戻って来る可能性はあった。発作が始まりだした滝下を黙らせてから話に戻った。

「で、どこになったの？」

「んー、校門の近く」

随分ザックリと説明してくれました。わかりやすいといえればわかり

やすいんだけど。それにしても校門の近くか。

「場所がなかったからってここ、ってことはないよね？」

「それはない。菖蒲は仕事をちゃんとやる子だ」

キリツとした真剣な眼差しで言い切った。その真剣さ、是非とも仕事に回していただきたい。部長も生徒会長を見習おうよ。

「それならいいわ。あとは本番が問題ね」

「その話だけど、副部長大丈夫？」

ニヤニヤしながらこつちを見ている。元々こんなことになったのはあなたが原因だっていうのに……。軽く睨み返してから溜息をついて男子部員に指示をだす。

「ポスターに場所入れといて」

「えー、あたしは無視？」

「分からないんだが……」

「私が教えるわ、大丈夫よ」

「やっぱり無視？」

面倒になるのは困るので起きかけていた滝下をもう一度気絶させた。部長は無視しつづけたので諦めたのか帰って行った。パソコン室にはゆっくりと途切れ途切れのキーボードを叩く音が響

い
て
い
た。

18 パソコン部女子（後書き）

自分で出しといて男子の口調があんまり決まっていなかった。
また分かりにくかったらごめんなさい。

19 調理部男子

「……ねえ、」

今は休み時間。学生たちにとっては授業の後舞い降りた女神と言っても過言ではない、貴重な時間である。生徒たちの喧騒が、3・2を支配している。3・2は今時珍しく仲の良いクラスで、皆が冗談を笑顔で交わし合っていた。

そんな和やかな時間を壊すように、ある来訪者がやってきた。

「お前は……、」

見覚えのあるような、ないような顔だ。大和はそんな曖昧な記憶から思わず呟いた。その言葉を受け、男は笑った。美しくも、何処か危うい雰囲気が漂う笑顔だった。

「あれ、僕のこと、知っているんですか？ 光栄だなあ」

くすくすと笑う男に、傍にいた宮城が少しだけ嫌そうな顔をした。こういうタイプの人間は何故か好かないと、彼は前々から溢していた。

「お前は……、」

もう一度、言う。男は何を思ったのか、笑みを深めた。

「奥さん？」

「名前に“さん”をつけるんじゃない！ 奥で良いです」

確か、そんな感じの名前だった、ような気がする。大和はそんな思いから念の為、確認をとったが、どうやら地雷を踏んでしまったようだ。今にも飛びかかってきそうな鬼気迫る形相で男は怒鳴った。

奥^{おく} 恵斗^{けいと}。それが、生徒会副会長である彼の名前である。副会長と言っても、今はろくに仕事もせず、小百合の奴隷と化しているが、ちなみに、敬称をつけると途端に人妻になってしまう自分の名字がコンプレックスらしい。

それにしても、副会長様がいたい自分になんの用なのだろうか。大和は首を傾げて、思った。夫は良いのか、と。

「止めて下さい！ 不快です！」

どうやら声に出してしまっていたようだ。奥は本当に嫌そうな顔をしている。

夫というのは、同じ生徒会役員である越戸^{おつと} 義樹^{よしき}のことだ。二人揃って生徒会の夫婦と呼ばれている。本人たちは不本意だそうだ。越戸の役職は会計である。しかし、奥と同様に仕事を放棄し、遊び歩いている。

奥は微妙な空気を散らすように佇まいを直し、咳払いをした。それだけで場に緊張感が戻ってくる。伊達に、副会長を務めてはいないようだ。さすがのカリスマ性である。

クラスの人間たちは身構えた。万が一のときには、大和を逃がせるように。何故ならば、彼らには奥がどうして大和を訪ねてきたのか、なんとなく見当がついていたからである。

奥は小百合に大層惚れ込んでいる。当の小百合は最近大和に構いつきり。現状の情報を整理すればすぐにわかる、簡単な推理だ。

「僕が此処にきた理由は、勿論わかっていますよね？ わかってないなんて、言わせないから」

「悪いな、わからない」

言った。“言わせない”と言われたそばから、なんの躊躇いもなく、大和は言った。少し不穏な空気が流れ始めた教室内で、宮城が冷や汗を垂らした。まずいかもしれない。宮城はクラスの人間たちとアイコンタクトをした。

それに気付かず、大和は陽気に笑っている。奥の表情が怒り一色に染め上げられた。

「そうやって天然ぶって、小百合を誑かしたんですか……！」
「天然？」

意味がわからない、と大和は眉を下げた。そんな些細な行動でさえも気に障るようで、奥は目を吊り上げ、大和に掴みかかった。

突然のことに驚いて目を見開く大和に構うことなく、奥は大和に怒鳴りつけた。

「気に食わないんですよ！ 後から出てきたくせに、小百合と馴れ馴れしくして！」

「椿？ 椿と俺は友達だぞ？」

何故そこで小百合の名が出てくるのか、大和は訳がわからなかった。取り敢えず何かを誤解されているのは確かなようなので、訂正を入れておく。自分と小百合は友人なのだと。

しかし、奥はそれを鼻で笑い。撥ねつけた。

「はっ、どうだか。口ではいくらでも言えますよ」

意味もわからず、見知らぬ人間に罵倒され続ける。いくら心の広い人間であつても、ほんの少しも苛立たない者がいるだろうか。

そんなわけがなかった。大和は聖人君子では無いのだ。なんの謂れもない暴言を浴びせられたら、当たり前前に苛立ちを感じる。

今にも感情のままに喚き散らしてしまいそうな口を抑えて、大和は深呼吸をした。大和は阿呆ではあるが、愚かなわけではない。そんな行動をとつても、事態は収束の方向に向かつていかないことなどわかりきっていた。

「……じゃあ、どうすれば信じるんだ？」

大和が色々な言葉と感情を呑み込んだのを、クラスメイトたちは気付いたらしい。気遣わしげな顔をした。

いや、こんなあからさまに自分を落ち着かせるような行動をしていたら誰でも気付いて当たり前だが、生憎目が濁りきった奥には気付けなかったようだ。

大和は自分を心配そうに見ているクラスメイトたちに笑みを返してから奥に向き直った。気分は魔王の配下の四天王の部下に戦いを挑む勇者である。

周りの様子に奥は気付かず、言った。

「じゃあ、今後一切小百合には近付かないで下さい」

此处で、今まで必死に抑えていた大和の怒りが爆発した。

「友達に近付くなど言われて素直に従うとも思ってたか！俺はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やっぱりお前も小百合目当てだったんじゃないか！」

思わず横っ面を殴り飛ばしてしまいそうになる。暴力を振るえば、自分はこいつよりも人間としての程度が下の、畜生に成り下がるのだ。大和はそう必死に言い聞かせ、しかし、奥を睨みつけた。

その余りの眼光の鋭さに、奥は怯んだ。大和はその隙を見逃さず、また怒鳴った。

「だいたい、どうしてお前は人の友好関係をそう歪んだ目でしか見れないんだ！」

「ッ歪んだ目！？ 失礼な！ 僕は事実を述べているだけです！」
「だから、それが歪んでいると言っただ！」

大和に、小百合に対する恋情など、これっぽちもない。ありもしない妄想を並べ立て、事実なのだと信じて疑わない。その何処が歪んでいないというのか。

そう言つと奥は返す言葉が見つからなかったのか、ぐつと黙り込んだ。すると、休み時間終了と授業開始を知らせるチャイムの音。それと同時に次の授業を担当する教師もやってきた。二階堂である。

「……奥？ お前の教室は此処じゃねえぞ。さっさと自分のクラスに戻れ」

「……すみません」

奥の存在に気づいた二階堂は気だるそうな表情で注意をした。本当にやる気の欠片も見えない男である。

「……ああ、それとお前、最近生徒会の仕事サボってるらしいな。え？ 成績に響くかな、覚悟しとけよ」
「ッ失礼しました！」

半ば怒鳴るように退室の言葉を口にした奥は早足で3・2を後にした。

先述した通り、大和は聖人君子などと評されるほどの徳を持つてはいない。そして、それはクラスメイトたちにも同様のことが言える。

気に食わない人間など山ほどいるし、その人間が赤っ恥を掻かされれば愉快なことこの上ない。

姿が見えなくなった途端、耳を劈いた盛大な笑い声に、奥はその端正な顔を忌々しげに歪め、舌を打った。

この突然の予期せぬ奥の来訪により、大和の存在は“小百合ちゃん親衛隊”に広く知れ渡り、そして、それが一つの大きな波乱を呼ぶのであった。

20 パソコン部女子

だるい、すごくだるい。

美穂は知らず知らずの内にウトウトし、ガツンと額を机に強打した。学校では居眠りをするタイプではないのだがさすがに昨日の徹夜はこたえたようだ。幸いにも今は休み時間だ。

美穂は頭をあげるとまたしてもウトウトしだし机に額を強打した。さつきからこれを繰り返している。周りにいる生徒は笑いながらこれを眺めているが美穂は気付いていない。

何回かこれを繰り返していると今度は運よく腕に額が押し付けられた。美穂がついに熟睡し始めた時だった。

「気に食わないんですよ！後から出てきたくせに、小百合と馴れ馴れしくして！」

この怒声で美穂はようやく目覚めた。小百合と言う所とあの声を聞けば大体誰かは察しがつく。まあ勝手に決め付けてしまうのはあれなので様子を見に行っていた男子に話を聞くことにした。

「……この馬鹿声の発信源は誰」

「生徒会副会長の奥さん、だよ。坂田だって知ってんだろ」

「確認よ」

予想ができてはいたが正直反応しづらい。“生徒会副会長の奥さん

”と言うと本当に副会長に妻がいるようだから凄い。
それにしても面倒だ。そこらにいる災いほんたの種なら簡単に蹴って黙らせることが可能なのだが相手は副会長様様だ、退散するかもしれないがそのあとで私が色々大変だ。いつもいつの間にか面倒事に巻き込まれているのに自分から首を突っ込むなんてごめんだ。

「で、誰が副会長に怒鳴ら、」

「友達に近付くと言われて素直に従うとも思ったか！俺はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やっぱりお前も小百合目当てだったんじゃないか！」

相手が誰かはすぐに判明した。あの声は間違いなく大和だ。きっと大和が言っていることを聞くと大方近付くと言われたんだろう。大和は友達思いのいいやつだ、昔私がいまだに話さないタイプだったのにいつも話に来ていた。

懐かしい、と目を細めるとまたしても怒声が響いた。

「だいたい、どうしてお前は人の友好関係をそう歪んだ目でしか見れないんだ！」

「ッ歪んだ目！？失礼な！僕は事実を述べているだけです！」

「だから、それが歪んでいると言うんだ！」

きつと椿は恋愛対象として大和を見ているだろうが大和はそんな気持ちなど一欠片もないだろう。だが、周りから見れば仲の良いカップルに見えても仕方なく思える。大和は分け隔てなく接しているか

らその笑顔がそう見せるのだろう。

そういえば大和はまだ椿のラブコールに気付いていないようだ。しばらくは安全と見ていいだろう。

始業の鐘が鳴った。これで怒鳴り合いも聞かなくて済むだろう。この時間の授業を担当する釜元^{かまもと}が教室に入ってきた。担当教科は英語だ。

釜元の最初の説教じみた演説を適当に聞き流す。そういえば文化祭は今週末だったなと思い出し、その日までにもう一度クッキーに挑戦しようと思いついた。

20 パソコン部女子（後書き）

番外編を私も書きたいのだが片岡さんの書くスピードが早い。
ペース落としてくれても良いよ……。

誰が落とすか。

21 調理部男子

実は、こう見えて大和はよく図書室に立ち寄る。そのほとんどが菓子作りの為の資料を借りになのだが、たまに小説を借りていたりもする。偉人伝であったり、戦記であったり、その種類は様々だ。

今日は、レシピの本を借りに来ていた。時々手に取り、眺めては元に戻すという動作を繰り返していた大和は、不意に声をかけられた。

「ねえ、広崎くん」

少しだけ驚いて、本を落としそうになる。何事も無かったかのよう到大和は声の主を見た。正体は、同じクラスの女子であった。何度かテストのヤマを教えてもらったこともあり、大和は少しだけこの女生徒に好感を持っていた。名前は確か、山岡^{やまおか}さん。教師からも頼りにされる優等生で、テスト前になると皆の先生役として、引っ張り尻になる。

「なんだ？」

大和は笑顔で用件を訊ねた。山岡はほんのり頬を染めると、すぐ

に気を取り直して言った。

彼女は勉強をしに、此処に来ていたのだろうか。大和はぼんやりそんなことを思っていた。机に勉強道具が広がっていたから、きつとそれで当たりなのだろう。

「広崎くんは、椿のこと好きじゃないんだよね」

「うん……？」

わざわざ自分の勉強を中断してまで訊くことが、それ？大和はなんだか拍子抜けした気分だったが、隠す必要も無いことなので素直に答えた。

「好きだぞ？ 友達だもんな」

大和の言葉に山岡は一瞬だけ息を詰めたが、すぐに安心したように表情を緩めた。そしてくすくすと笑い出す。普段は落ち着いた雰囲気を持つ彼女だが、こういうときは随分年相応だ。

「そう、良かった。そうだね、広崎くんだから、そうだね」

いったい何に対してこんなにも深く納得されているのか。大和は不思議だった。漸く笑いを収めると、山岡は短く別れの言葉を告げてから自分の勉強に戻った。

なんとなくもやもやした気持ちになりながら、大和はレシピを手

に、図書室を後にした。

大和は菓子作りに関しては一切の妥協を許さず、そして慎重だ。部で菓子を調理する前には、最低でも一度は必ず自分で作ってみる。失敗しない為の予行練習ということもあるが、もう一つ理由がある。それを作るべきか否かを確かめるのである。

そして、味が気に食わなかったり、青山や松島、二階堂が嫌いそうな味だと思ったときは違うものを作るのだ。

突然、作るものを変えたりしても、その作るものは以前調理したことのあるものだけと決めている。

大和は食事は楽しいものであるべきと考えている。嫌いなものを食べて楽しいと感じるわけがない。だから、大和は事前の調査を怠らないのである。

大和はゆつくりと調理室に向かった。本当は家に帰って作っても良いのだが、なんとなく調理室で作ろうと思った。出来たら先生にもわけてやろう。そんなことを思いながら、階段を昇っていく。

今思えば、この選択が最初の間違いだったのだろう。

調理室につき、鍵を開ける。ドアを開けようとしたら、何故か開かない。

「…………あれ？」

可笑しいな、可笑しいな、と呟きながら何度もガチャガチャやっている、漸くドアが開いた。どうやら最初から鍵は開いていたようである。なんとなく気恥ずかしい思いになりながら、大和は調理室に足を踏み入れた。

最初から鍵が開いていたということは、誰かが此処にいるということだ。放課後にこんなところに来るのは部員の誰かしかいないだろう。もしかしたら二階堂かもしれない。

見知った姿を見つけようと部屋の中を見渡すと、視界の端に栗色を捉えた。

あれは、

「……椿？」

「大和くん」

窓のすぐ傍に、小百合は立っていた。

今まで外を眺めていたのに、大和が来ることをわかっていたのか、全く驚く様子も見せない。ゆったりと振り返り、うつそりと笑む小百合。

大和は小百合のその笑みに、何故か空恐ろしいものを感じた。そんな気持ちで誤魔化すように、大和は笑顔で話しかけた。

「椿、こんなところで何してるんだ？」

「大和くんに、用があつて」

「俺に？」

そう、と小百合は深く頷いた。

この違和感は、いったいなんなのだろうか。小百合に初めて会ったときから感じていた違和感。何か――、

「ねえ、大和くん」

「っな、なんだ？」

思考の海に突然割って入った異物。一気に引き上げられた大和は小百合を見た。

いつの間にか小百合は大和の傍まで来ていた。そっと頬に手を当てられ、思わずひくりと頬が引き攣った。

「大和くんは、わたしのこと、好きなんだよね」

大和の顔を覗き込んだ暗い、虚ろな瞳。身の毛がよだった。

「ねえ、そうでしょう。わたしと恋人になりたいよね」

「な、なんで？」

まるでそれが運命で、最初から決まっていたことなのだと、そう言わんばかりに小百合は言う。大和は咄嗟に疑問を口に出してしまった。

「……だって、大和くん言ってくれたよね。わたしのこと好きだって」

言った覚えが無かった。確かに友達としては好きだが、恋愛対象として小百合を見たことは無かった。だいたい大和の好みのタイプは素朴な女性だ。小百合では明らかに合っていない。

「恵斗にわたしに近付くなって言われて嫌だって言っただよね。ねえそうでしょう。ねえわたしのこと好きだよね好きだよね絶対そう」

小百合は虚ろな瞳のまま大和に抱きついた。大和は、思わず小百合を突き飛ばしてしまった。目を見開く小百合。

「な……なん、でえ……？」

じわじわとその大きな瞳に水分が溜まり始めるのを見て、罪悪感が湧きあがる。だけど、そんな酷い気持ちだけで抱き締め返すことなんてしない。二人とも苦しむだけだとわかつている。

「わ、悪い。俺は、違っから」

お前は自分を好いてくれているのかもしれないけど、周りにはお

前を好いていてくれる奴がたくさんいるのかもしれないけど、でも、自分は違う。

大和はそのまま走り去った。やっぱり、菓子は自分の家で作ろう。

自分の後ろ姿をいつまでも見つめる小百合に、気付かないまま。

21 調理部男子（後書き）

ちよつと病んでましたね。

椿 小百合視点 7

授業が終わり、のんびりしていたとき、隣のクラスが何故か騒がしかった。見に行ってみると、奥と大和が言い争いをしている。小百合は愕然とした。

周りにいた野次馬たちは言い争う二人の姿を目に入れてから、早々に退散している。巻き込まれないようにだろうか。

自分を見ている小百合に気づかず、奥は言った。

「じゃあ、今後一切小百合には近付かないで下さい」

小百合は思わず奥を殺したくなった。何を余計なことを、大和にいったいなんて口を利いているのかと。

「紛い物のくせに、どうしてわたしの思い通りにならないの……！」

ぎり、と親指の爪を噛む。口を離すと爪の形は歪んでしまっていた。どうにもならない苛立ちを抱え、眉間に皺を寄せていると、奥の声のすぐ後に聞こえてきた大和の声。その言葉に、小百合は顔を赤らめた。

「友達に近付くと言われて素直に従うとも思ったか！ 俺はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やっぱりお前も小百合目当てだったんじゃないか！」

“近付くと言われて素直に従うとも思ったか”、なんて。
“お前も小百合目当て” だなんて！

小百合は昔から一つのことにはしか集中出来ない。何かをやりはじめたらそれ以外目に入らないし、誰かの忠告も聞けない。だから、狂喜している小百合には、大和の友達という言葉も耳に入らなかった。

小百合は放課後、調理室に来ていた。大和に会うためだ。調理部でもない小百合が、放課後、調理室に用があるから鍵を貸してほしいなどと言うから随分不審に思われたが、なんとか誤魔化した。

それにしても、大和はまだだろうか。小百合は待ちきれないといった面持ちで窓の外を眺めた。待ちきれないと言っても、それが不快だというわけではない。寧ろ、その待つ時間でさえ愛しくて堪らない。

暫く外に視線を遣っていると、ドアが開く音。 ああ、来た。

「……椿？」

「大和くん」

大和の呼び掛けに小百合はすぐに応え、振り向いた。大和は少し驚いたような顔をしている。いつもは素敵なのに、そういう顔はとても可愛い。

大和の瞳が怯えを孕んでいたなんて、きっと気のせい。だって、大和はすぐに笑顔で小百合を見たのだから。

暫くやり取りを交わすと、大和は何かを考え込んでしまった。自分を見てほしくて、小百合は大和に近付き、名前を呼んだ。

バツと勢いよく上げられた顔に、そつと手を当てる。ぴくりと大和の表情が動いた。照れなくても、良いのに。

「大和くんは、わたしのこと、好きなんだよね」

小百合には、大和と初めて出会った瞬間からわかっていた。この紛い物の箱庭の中で、大和だけが唯一自分の“本物”になり得る存在なのだと。

だから、連れていってしまおう。だって、自分たちは両想いなものだから、大和だって喜んでくれるはずだ。確認のため、また言った。

「ねえ、そうでしょう。わたしと恋人になりたいよね」
「な、なんで？」

なんで、だって。小百合は思わず笑ってしまった。どうやら、小

百合の王子様は随分と照れ屋なようだ。いや、もしかしたら自分の気持ちに鈍感なのかもしれない。

大和の、自分への想いを気付かせてやろうと優しく語りかけた。

「……だって、大和くん言ってくれたよね。わたしのこと好きだって」

大和の表情に困惑の色が差した。どうして、そんな顔をするのか。やっぱり、鈍感なんだろう。此処まで言っても気付けないなんて。

「恵斗にわたしに近付くなって言われて嫌だって言ったよね。ねえそうでしょう。ねえわたしのこと好きだよね好きだよね絶対そう」

これで漸くわかっただろう。小百合は幸せな気持ちで大和に抱きついた。きつと、大和はこの逞しい腕を自分の背に回してくれる。しかし、小百合を襲ったのはそんな甘い妄想ではなく、軽い衝撃だった。

大和に、突き飛ばされたのだ。

「な……なん、でえ……？」

思わず目を見開いた。どうして、どうしてどうしてどうしてどうして……！

これはもう、鈍感だとか照れ屋だとか、そんなことでは済まされ

ない。大和は、小百合を抱き締めなければならないのに。どうして自分も小百合のことが好きだと、愛を囁き返さなければならぬのに。

「わ、悪い。俺は、違うから」

小百合は、今度こそ大和の言葉に含まれた真意を正しく受け取った。受け取って、しまった。

お前は自分を好いていてくれるのかもしれないけど、周りにはお前を好いていてくれる奴がたくさんいるのかもしれないけど、でも、自分は違う。

大和はそのまま走り去っていつてしまった。

小百合は、信じられない気持ちで大和の背を見つめた。

暫くして、小百合はキツと天を睨み付けて叫んだ。

「ッどういうこと！？ 一人は“本物”に出来るんでしょう！？ なら！ 早く“本物”にして！ 大和くんをわたしの王子様にしてよ！」

何を言っているのか。もしも此処に小百合以外の人物がいるのだとしたら、きつとこう思ったことだろう。

しかし、小百合以外誰もいないはずの調理室に、機械のような無機質な声が響いた。

“ 攻略対象に入っていないません。キャラクターを選び直して下さい ”

「 なんでよ……ッ! 」

こんなにも自分は大和を愛しているというのに結ばれることも許されないのか。まるで、悲劇のようだ。

小百合は唇を噛み締め、携帯電話を耳に当てた。

もう良い。手に入らないなら壊すまで。ぐちゃぐちゃに壊れてしまつて、そうして手を差し伸べてやるのだ。そうすれば、きっと大和は自分だけを見る。

「 もしもし、義樹 」

ワンコールで出た相手。前までは愉快で堪らなかったのに、今は煩わしいだけだった。

「 広崎 大和くんのこと、虐めてくれる? 」

そう言ったときの小百合の笑顔は妖しく、まるで人間を惑わす悪魔のようだった。

椿 小百合視点 7（後書き）

この子怖いよ！

22 パソコン部女子

昔、唐の国に玄宗げんそうと言う皇帝がいました。玄宗は朝廷の帝位を巡る争いを収め即位した六代目の皇帝でした。玄宗は優れた政治を行い、世を正していきました。

ある日のことです。玄宗は息子の寿王じゅおうの後、楊玉環ようぎょくかんに一目惚れをし、取り上げて自分のものにしてしまいました。このとき玄宗は楊玉環を貴妃の位につかせ、楊貴妃と呼ばれるようになりました。それ以来、楊貴妃を溺愛している玄宗は政治に関心がなくなり世は荒れていきました。

しばらくして朝廷では楊貴妃の一族が力を持ちはじめました。その朝廷では楊貴妃のまたいとこにあたる楊国忠ようこくちゅうと楊貴妃に気に入られている安禄山あんろくざんが敵対していました。

それから時が経ち、楊国忠は政治を動かす立場の宰相になりました。これを知った安禄山は自分の身に危機を感じ取り、ついに反乱を起こしました。

玄宗は楊貴妃や家臣を連れて都である長安を離れました。しかし安禄山の反乱が楊国忠を打つためと知った兵士達は楊一族を皆殺しにしました。逃げていた玄宗の楊貴妃の元にも兵士達は押し寄せ楊貴妃は処刑されました。

玄宗は心に大きな傷を受け、皇帝の位を捨てました。このあと、皇太子であった李亨が即位をし、第七皇帝肅宗となりました――

……

「なんだか、呆氣ないわね」

美穂はたった今読み終えた中国の歴史が書かれている本を見た。今いる場所は図書室、元々人気がないので今いるのは私ともう一人だ。私は部活が無いと時々図書室に訪れて歴史の本を読んでいる。

ちなみに美穂は日本国民なのに中国の歴史のほうに興味がある。

それにしても、と溜息をついて本をじつと見る。あんなに政治に熱心だったのに一人の女で人はここまで変わるのだろうか、と思わず思う。

最初は皇帝を動かし一族に力をつけ、楊貴妃に取り入った安祿山が反乱を起こす……。なんと漫画のようだ。これが事実化は本なのでよく分からないが事実だとしたら楊貴妃は凄い人だったのだろうか。ふと、休み時間の副会長を思い出した。副会長も前も仕事をしっかりこなしていたはずだ。椿が来てからガラリと変わったとか。やっぱり男は女には弱いのだろうか。だとしたら大和も……？ いや、今考えるのはやめておこう。

「坂田さん」

「ん？」

誰かに呼ばれたが周りに誰もいないので辺りを見回していると一人の勉強中の女子が顔をあげた。大和のクラスの山岡さんだった。テスト前に時々一緒に勉強をしたりしている。ちなみに数少ない敬称をつけて呼んでいる一人でもある。

「山岡さん、何？」

「大和くんのこと、好き？」

身体が固まった。なんとも直球な質問だ。しばらく考えてみる。
…結局あまりいい応えは見つからなかった。

「好き、なのかな…」

「そう、」

それだけで満足したのかまた勉強を再開した。

大和のことが好きか、そんなに考えたことがなかった。いつも一緒だったから逆に思いつかなかった。これはしばらくの間考えてみても良いんじゃないかと美穂は思った。

22 パソコン部女子（後書き）

私も中国のほうが好きです。特に水滸伝が良いです。

23 調理部男子

大和は酷く驚いていた。目を見開き、大きく開かれた口からは掠れた声が漏れていた。誰がどう見ても驚いていた。

大和は下駄箱を開け、中に入っていた生ゴミの姿を認めると、いやいや、そんなものが自分の下駄箱に入っているわけが無いと扉を閉め、しかし漂う異臭は誤魔化しようもなく、また開けると蠅が集っているのを目撃し、いや、まさかこんな古典的な悪戯を自分が受けるわけが無いと扉を閉め、でもあれは現実なのかと扉を開け、また一瞬で閉め、次に開けたときにはあのゴミは跡形もなく消えているはずだと信じて開け、やっぱりあったように見えただけでそれはきつと幻覚なのだと自分に言い聞かせ扉を閉め、

「はよ開けてショック受けろやああああ!!」
「おおっ!?!」

先程まで物陰でほくそ笑み、大和を見ていた人間がついに痺れを切らしたのか、怒声を飛ばしながら勢いよく飛び出した。

大和は驚き、思わず辛うじて上履きの無事だった一部分をつまみ、声の主に思い切り放り投げてしまった。

これが故意のものではないと言ったら、果たしてあなたは信じてくれるだろうか。

「うわあああッ!？」

「お前、臭いな……」

「俺様の体臭が臭うみたいに言うんじゃないよ！ てめえのせいだろうが!!」

顔をゆがめ、鼻を押さえ、容赦無い一言を浴びせる。男は涙目で叫んだ。

男の名は越戸 義樹。奥と二人でセットで夫婦の、越戸だ。

越戸がどうしてこんなところにいるのかと言うと、勿論、大和への嫌がらせの為である。元々、こいつは気に食わなかったけど、今はボコボコにしてやりたい。越戸は大和を睨み付けながら、そんなことを思った。

越戸が大和のことを初めて知った切っ掛けは、年に三回新聞部により発表される校内ランキングだった。

それは、子供らしい、なんてことのないことに順位をつけたものばかりだった。例えば、一番優しい人ランキングとか、一番恰好良い、美人な人ランキングとか。

いつも同じランキングというわけではなく、こういうランキングをつけてほしいという要望の中からランダムに三つを選んでいるのである。マンネリ化を防ぐためだとか。

あるとき新聞で発表されたランキングは次の三つのものだった。

一番人気者な人ランキング。一番料理が上手な人ランキング（男子篇）。一番笑顔が素敵なお人ランキング。

越戸は、幼少の頃から何をやらせてもとても良い成績を残す、所謂神童であった。ルックスや家柄にも恵まれており、少々性格の歪みは否めないが、完璧というものに近い人間だ。

だから、今回のランキングにも自信はあった。いつもランキングで一位に輝くのは自分。勉強面ではたまに奥に抜かれることもある

が、今回はそんな無粋なものは関係のないランキングだ。

だから、余計にショックだった。

そのランキングたちの一位に輝いていたのは、全て同じ人間。大和だったのだ。

何故、こんな奴に負けたのか。しかし、全く名前を聞かないと言ったら嘘になる。周りの女たちの間でもよく話題になっていた。

と、まあ、そんなこんなで越戸は大和に敵対心を抱くようになったのだ。つまりところ逆恨みというやつである。

「お前、奥さんは良いのか？」

「俺様たちを夫婦みてえに言うんじゃないねえ！！」

下駄箱の生ゴミのことなど無かったかのように大和は言った。何故虐めに等しいことをされて、此処まで暢気でいられるのか。それは、大和がこれは虐めだということに気が付いていないからである。さすがにこのゴミを仕掛けたのが越戸だということは理解しているが。

それにしても、この生ゴミの設置は越戸の手で行ったのだろうか。周りには取り巻きがたくさんいるだろうに、わざわざ自分の手を汚すなんて、いじらしい奴である。

越戸は激昂して怒鳴りつけた。怒りで顔が真っ赤で、まるで酔っ払いのようだ。大和はかなり見当違いのことを思っていた。

「チツ……、まあ良い。てめえ、ちょっと俺様に付き合えよ」

大和はその言葉にハツとした。いつぞやクラスメイトたちから言われた言葉を思い出したからだ。

大和は顔を蒼褪めさせた。その反応に越戸は満足そうに笑む。そう、そういう自分に心底怯えきった顔が見たかった。

「わ、悪い。俺、そういう趣味ないんだ」

「違うううう！！ 気色悪いこと言うんじゃないよ！！ 俺様にだってそんな趣味ないっての！」

良いから来いと越戸は大和の腕を掴み、引っ張った。すると、弱々しい、か細い声が。

「越戸、くん……？ 広崎くんも……。何をしているの？」

声の正体は菖蒲だった。助かったと言わんばかりに顔を輝かせる大和。そして顔を歪めた越戸。何がなんだかよくわからない状況だが、とりあえず菖蒲は逃げ出したかった。

「邪魔な奴が来やがったな……」

ボソリと越戸は呟いた。いくら小さい声とはいえ、周りには人も

おらず、不気味なほどに静まり返っている。菖蒲の耳はその冷たい音をしっかりと拾い取ってしまった。あんまりな物言いに、元々気が小さい菖蒲は思わず萎縮する。

大和は厳しく責めるような瞳で越戸をねめつけた。たまたま通りかかっただけの奴に、酷い言い草じゃないかと。

「まあ良い」

そんな大和の視線に気が付いていたろうに、越戸はそれを受け流した。

小さく笑い、初めて本当の“恋”というものを教えてくれた女性を思い浮かべる。あいつの為なら、なんだって出来る。

「広崎、覚えてやがれ。俺様は絶対にてめえをこの学校から追い出してやる」

その言葉に、当事者ではない菖蒲が蒼褪めた。

大和は相変わらず何かなんだかわかっていなかったが、取り敢えず、と思った。

「職員室に、スリッパを借りに行こう」

まさか靴下のまま生活するわけにも行かない。大和は何故か持っていたゴム手袋を装着し、中に入っていた生ゴミを全て越戸の下駄

箱に詰め直してから職員室に向かった。

外履きを履いたまま職員室のドアをノックした大和が二階堂にこつ酷く叱られるのは、また別のお話。そして、いつの間にか下駄箱に詰められていた生ゴミを見て、越戸が咽び泣くのも、また別のお話。

23 調理部男子（後書き）

大和は天然で酷い子だと良い。

24 パソコン部女子（前書き）

今回は友人の回ですが、少しでも前書きをお借りして、片岡です。私のアホスな間違いでサブタイが“調理”部女子になってました。すみません。

もしかしたら他にもノリでなんか全然違うこと書いてたりするかもしれませんので、お気づきになりましたら是非ご一報を。

24 パソコン部女子

朝、美穂は本を読んでいた。今日はノルマが全くと言っていい程無かったのであつという間に終わったのでだ。ちなみに今読んでいる本は三国志だ。

朝のホームルームまであと10分くらいある。大体の生徒は来ているのだがその中の男子がほぼ全員いない。この時間になると椿が登校してくる。それを一目見ようと男子は早く登校して校門は人であつた返すのだ。

「本当、何やってんだか……」

もう文化祭が間近に迫っているというのにそんなもの最初から無かつたかのような雰囲気だ。そういえば今年のクラスの出し物は何になつたんだろう。実行委員は誰だつたっけ、と考える。

…思い出して頭が痛くなつた。そうだ、椿だ。確か椿が女子の実行委員だ。そのあとで男子の実行委員が誰だかもめたんだつた。結局誰が実行委員になつたかは知らない。

今年の文化祭はいろんな意味で悪いことが多すぎる。文化祭と言えば部外者の大人達や中学生も来たりする。せいぜいグダグダ感が無いような文化祭にしなければならぬ、と思つた。

遠くからガヤガヤと騒がしい音が近付いてきた。なんでああいう輩はこつも朝から騒げるのだろうか、美穂はいつもそれが不思議で堪らない。

「みんな、おはようっ！」

椿がいつもと変わらない笑顔を振り撒いて挨拶をした。クラスには女子しかいないのでほとんどが無視を決め込んだ。美穂はとりあえず「おはよう」と呟くように言った。

椿はこちらを向いてにこりと笑った。いつも笑顔で疲れないのかと思わず椿に聞きそうになってそれを飲み込んだ。

「おはよう、坂田さん。何を読んでいるの？」

一瞬心臓が止まった。なんでこっちに興味を持ったのか分からなかった。こんなことになるなら返事なんてしなけりゃ良かったと美穂は後悔した。

「三国志だよ。椿さんも読んでみる？」

向こうが張り付いている笑顔ならこっちだって、と美穂は変な対抗心を持つて思いつ切りの営業スマイルを顔に張り付けた。椿はちょっと怯んでいた様だったがまたすぐに笑顔に戻った。ちよつとした意地の張り合いだった。

「ふうん、面白そうね。今度わたしも借りようかなあ」

明らかに目が言葉と裏腹に輝いていない。誰がどう見てもお世辞だと分かったが目が曇っている男子はお世辞だととれなかった。だが、もう一人真意が上手く受け取れない人がいた。

「っ、そうだよね！面白いと思うよね！」

「え……？」

美穂と椿は瞬きをした。声の発信源は一人の女性だった。

「音波先生、どうしてここに」

音波先生は理科担当の先生。しかもどのクラスも担当していないのになんでここにいるのか。

「三国志と言えばやっぱり劉備と張飛と関羽なんだけどやっぱり私はいろんな武将と兵を華麗にまとめあげた孔明が凄いと思うんだよね何が凄いかって言ったら戦地を把握してその場に合った戦い方をするし敵が何処に逃げるから此処に誰を配置すれば良いとか本当に未来を知ってんじゃないのかってくらいなんだよねそれで劉備と孔明の出会いがまた良いんだよね劉備が……」

「先、生？」

椿が引いている。思いつきり引いている。この知識量、どんだけ好きなんですか音波先生。というかこれだけの知識あるなら歴史の担当になれば良かったのに。

結果的に音波先生は朝のホームルームが始まるまで三国志を熱く語ってくれました。

24 パソコン部女子（後書き）

歴史について間違えていることがあったら指摘お願いします。

登校すれば周りに男子達が集まって来る。それはいつもと変わらな
いことでいつもの風景。しかし小百合は今日はあまり興味を持たな
かった。男子に適当に愛想笑いをしてやり、早足で学校に向かう。
学校に着けば今度は校門で男子が小百合を待っている。小百合はこ
れにも興味を持たず、また、適当に返して校舎に入って行った。
いつもならあの場所でもっと時間を使い触れ合っているのだが、い
や、正確には弄んでいるのだが、小百合には今日は何よりも先に確
認したいことがあった。

男子は従えず、なるべく会わないように、会ってもついて来ないよ
うに気をつけながら2・3に向かった。仲の様子を見てみれば大和
は既に登校していた。ただいつもとそれ程変わったことはない。

（義樹は、何をしているの……?!）

義樹は行動力がある。始まるとしたら今日、それも朝だと思ってい
たのだが、大和には精神的ダメージを受けたように見えない。小百
合は昨日の出来事を思い出して苦い顔をした。

しかし、義樹が何も行動をしていないと言うのは少しどころかな
りおかしい。小百合がもう一度大和を観察すると、上履きではなく
スリッパを履いていることに気づいた。どうやら義樹は行動を起こ
していたようだ。だが。やはり大和にはダメージはなさそうだ。

（大和くん……、やっぱり、一筋縄じゃいかない）

小百合は改めてそう思い、誰かに加勢してもらおうかと考えた。とりあえず自分で手を汚すことは、ない。小百合は2 - 3から離れ、自分の教室へ向かった。

途中で自分を探し回っていた男子を従えてから教室に入って行った。

「みんな、おはようっ！」

そう挨拶をしても返事を返す人はいない。でも平気。別にわたしだってあなた達の返事なんて求めていない、いらぬ。だが、この日は少し違っていた。

「おはよう」

小さかったが確かに返事が聞こえた。わたしに返事をしたのは誰だろうか、とその声の主を探して、ガツカリした。

坂田だった。なんでおまえが返事をしたんだ。別におまえなんか知らないぞ、とそこまで思ってから小百合は閃いた。

そうだ、大和くんを壊すならまず周りから攻めれば良いんじゃない。将を射んとすれば馬を射よと言うのではないか。まず周り、それも大和と特に親しい人達から崩す。そうすれば大和だって自然に落ちる。小百合は今までに無いような深い笑みを浮かべて、坂田に近付いた。ありがとう、坂田さん。あなたのおかげで良いこと思いついちゃった。心の中で呟いて。

「おはよう、坂田さん。何を読んでいるの？」

その発言から自分の朝の時間が奪われるのを知らず……。

椿 小百合視点 8（後書き）

つい先日まで風邪を引いてました。皆さんも風邪には気をつけてください。

25 調理部男子

大和は布団からむくりと身体を起こし、寝起きとは思えない機敏な動きでカーテンを開け放った。視界に広がる青い空……ではなく、曇り空。しかし、昼頃から晴れてくるはずだから、何も問題はない。

今日は待ちに待った文化祭。多少の不安は残っているが、それは文化祭という一大行事の前では寧ろスパイスになる。頑張るぞ、と大和はぐつと拳を握った。

「ちょっと！ もう景品のお菓子ないんだけど！ 買っておいでって言ったでしょ！？」

「つうるせえな！ そんなに言うなら自分で買ってあげば良かったじゃねえか！」

あちこちから似たような罵声や怒声が聞こえてくる。大和は穴から血に塗れたように見える真っ赤な手を引っっこ抜き、隣にいた宮城を見た。宮城も目を瞬かせて釣竿で吊っていた蒟蒻を引く。二人で何事かと顔を見合わせていると、山岡が。

「こら、さばらない」

「あ、山岡さん、ごめん」

軽く大和と宮城の背を叩く。大和は素直に謝った。すると、山岡は其処まで本気で怒ってもいなかったらしい。にこりとして頷いた。宮城も軽く謝罪を入れてから訊ねた。

「山岡さん、なんか周り騒がしいけどさあ、なんかあったの？」

「うん……、なんだか色んなクラスで揉め事が起きてるみたい」

山岡は眉を下げた。せつかくの文化祭なのにね、と沈んだ声。その悲しそうな顔になんだか大和まで悲しくなってきた。宮城は顔をしかめ、声を顰めた。

「原因つてさあ……」

「話を聞く限りだと、男子たちがちゃんと自分の仕事をこなしてくれないみたい」

「やっぱ、椿かあ……」

ふう……、と二人でため息を吐く。大和は不思議そうに目を真ん丸くして二人を見た。そして、注意されたのに自分がちゃんと仕事に戻っていないことに気付き、穴の中にまた腕を突っ込んだ。

「ま、ポジティブに考えようぜ。これで今年の優勝はうちのクラス

「がいただきっ！」
「……そうだね」

山岡は苦笑した。

大和のクラスは、お化け屋敷である。段ボールの壁の向こう側から悲鳴が聞こえた。先程から通り過ぎる足音の多さからして、中々盛況しているようだ。

宮城も大和の行動に気付き、蒟蒻をまた揺らす。べちん、と渴いた音がした。どうやら蒟蒻は誰にも当たらずに教室の壁にぶつかったらしい。大和たちが配置されているのは教室の出入り口に一番近い教室脇だ。

唐突に大和が口を開いた。

「……なんで、椿のせいなんだ？」
「なんでって……、あれ、蒟蒻がねえ」

大和の言葉に宮城は怪訝そうな顔をした。手繰り寄せた系には蒟蒻は無かった。落ちたか、と少しだけ困った顔をした宮城が隙間を覗き込んだ瞬間、鈍い音が。

「蒟蒻で転んでるわ。大丈夫かな、あの人」
「なあ、なんでだ？」
「は？ 何が……、ああ」

思わぬハプニングに先程までの話題など吹っ飛んでいた宮城は、大和の唐突な言葉に困惑の表情を見せた。すぐに思い当たったようだが。山岡は客が転んでしまったのを察知すると早足で客のもとへ向かって行ってしまった。

「……だって、そうだろ。俺とかは違うけど、今、ほとんどの奴が椿に夢中だろ？ そのせいで、」
「だから、それが可笑しい」

言葉を遮り、何処か冷たい響きを持った大和の言葉に、宮城は少し怯んだが、すぐにムツとした顔をした。宮城は、男子の中では珍しい小百合を嫌っている人間だ。親友とも呼べるほどに親しい大和が小百合を庇うようなことを言ったのが気に食わなかったのだろう。

「なんで、……何がだよ」
「仮に、そうなのだとして、仕事をしない奴が椿のことが気にかかって集中出来ないのだとして、」

大和は一旦言葉を切り、びしっと宮城を指差した。眼前にいきなり突き出された人差し指に驚いて、思わず宮城は仰け反った。

「やっぱりそれはそいつらが悪い！」
「だからなんでだって！」
「だって、椿は何もしてないじゃないか」

椿は其処にいただけで、特に仕事をサボれだなんてそんな命令はしてないだろう。なら、勝手に椿に夢中になって、勝手に仕事をサボるあいづらが悪い。そう、大和は言うのだ。自分の言葉が間違っているはずがないと、確固たる自信を持って。

やっと大和の言葉を理解した宮城は、思わず呆れ顔になった。

ああ、つまり、そういう。

この男はどうあっても自分の友人を“悪”にしたくないのだ。そして、その言葉が馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばせるような根拠のないものではないから、何も言えなくなる。

「それなのに椿が悪いと言うのは、それは椿に死ねと言っているようなものだ」

別に其処までは思っていない、と言おうとして、宮城は口を閉ざした。今、自分が何を言ったって、何処か言い訳がましい。代わりに宮城は大和への褒め言葉を口にした。

「……お前の美点はさ、其処だよな」

「うん？　ありがとうな」

「そんでもってお前の短所も其処だよな」

「ええっ！？」

ショックを受けたような顔をした大和に、思わず宮城は苦く笑った。面白いような、つまらないような、嬉しいような、悲しいような。

そんな複雑な心が宮城の胸中にあった。

「友達思い……、お前のは度が過ぎてるような気がするけどさあ。そういうの、程々にしとけよな。絶対いつか、面倒なことになるから」

面倒なこと。大和の脳裏に一瞬、“あのとき”の小百合が過った。宮城は笑いながら釣竿を床に置いた。早く蒟蒻を持ってこなければ、無ければ代用品として蒟蒻ゼリーを連ねて使おう。宮城は背を向けた。その瞬間、背後で大和の小さな声が。

「……もう、面倒なことになってるかも……」
「——……はあっ？　ちょ、お前、今なんて言った!？」

聞き逃してしまいそうなほど、小さな小さな声。宮城の聞き間違いで無ければ、今、とても不吉な一言が聞こえた、大和は誤魔化すように淡く笑うと宮城の横を通り過ぎた。

「お、おいっ!」
「部活の手伝いに、行ってくるな」

強引に突き放された宮城は、その言葉に頷くしか無かったのである。

26 パソコン部女子

「「「いらっしやいませー!」」」

「い、いらっしやいませー……………」

今日は待ちに待った、いや別に待つてはいないが文化祭だ。寧ろ今年はちょっと来てほしくなかった。今年は大和の部活、調理部と私の部活のパソコン部の合同だ。しかも大嫌いな分野の料理がメインの出し物だ。部活の方には行かないでクラスだけ手伝おうかと思っていたのだが……。

「なんで、よりによってカフェなのよ…」

まあカフェと言ってもただ単に買っておいたお菓子と飲み物とかを出すだけだ。美穂にとって一番問題なのは美穂が今着ている服だ。

「誰が作ったのよ、この服」

白い長袖に薄茶のベスト、下は薄茶のミニスカート、同じく薄茶と白のエプロンを腰に巻き付けている。どこかの喫茶店に本当に居そうな雰囲気を持っている服だ。結構凝っている服だ。おまけに校則で城のハイソックスを履かなければならないので尚更この服がピッタリと合ってしまったている。

「椿を除いた女子だよ。坂田さんは最近忙しくて参加してなかったもんねー」

「せめて、言つてよ」

「だって放課後はすぐに教室出ていっちゃうじゃん」

だそうだ。

いや、放課後じゃなくても話されるだろうと思って言ってみたのだが、

「時間がなくてねー」

らしい。結構暇そうに友達と喋っていた気がするのだが気のせいだろうか。

とにかく私の知らないところでクラスの出し物はちゃんと進んでいたようだ。だが残念なことに実行委員は活動していなかったようだ。結局この服もこの出し物も女子の企画らしい。ちなみに椿は男子を引き連れてどこかに出かけて行った。おかげで女子のみで此処を取り仕切っている。

料理が出来ない私でも飲み物やお菓子を出すことは出来る。服さえ気にしなければ此処に居ても平気だ。とにかく料理と服、どっちが面倒かと比べてみたら料理だったので大和には悪いがクラスの方に暫く居させてもらうことにした。

カチカチ、あるいは黒焦げのクッキーを客に出すわけにはいかない。勝手に美穂の中で正論化した。昨日試しに予行練習をしたら消し炭の様な黒い物体がオープンから出てきたのだ。本に沿ってやってみたのだがまた何かを間違えてしまったようだ。

「坂田さん、お茶を二つお願いします」

「はい」

とりあえず営業スマイルを顔に張り付けニッコリ。きっと他の人から見れば多少引き攣って見えるだろうがこれくらいは仕方ない思っ
てほしい。

美穂は銀色をした丸いお盆の上に烏龍茶の入った紙コップを二つ
せると注文を受けた机に運ぶ。

「お待たせいたしましたー、烏龍茶二つです」

「ん、ありがとう」

用を済ませるとそそくさと戻っていく。美穂はまた定位置にスタン
バイする。

「ねえ、一緒に学校見て回らない？」

「え、あ、お客様。そういうのはちょっと……」

「いーじゃんよ、ちょっとだけ、な？」

人気のスタッフ（生徒）は男子に口説かれたりしている。椿に首つ
たけの男子もいるが他にも、というプレイボーイもいるらしい。だ
が見ていて鬱陶しい。やるなら学校の外でやってもらいたい。この
カフェでは多分もう声をかけられていない女子はいない。美穂もさ
つき誘われたが笑顔で断った。

「坂田さん、私、休憩行つてきまーす」

「ん、行つてらっしゃい」

時々ずっと此処にいるのもあれなので、人不足にならない程度に交代をしている。所謂羽休めというものだ。本当は男子にもウェイターとして手伝ってもらいたいところだがどこにいるかが分からない。一応男子の服もあるようなので見つけ次第強制的に連れて来る、と言うのが羽休めしている女子の使命でもある。結果的に羽休めになつていない気がするがこれも仕方ない。

「本多確保ー」

「放さんか！何故連れて来る！」

服装を見る限り、こいつは部活の方に居たようだ。その心意気ならクラスの出し物も苦じゃないだろう。

「坂田さん、パス」

「え、私なの」

「お願いね」

なんと面倒事を押し付けられてしまったようだ。仕方なく一緒に放り投げられたウェイターの服を片手に、本多を片手に近くの男子トイレに向かう。さすがに入ることは出来ないので本多に服を渡し着替えて来るように指示。最初は抵抗していたが渋々中に入って行った。私は入口で逃げないように見張る。

「……何故、俺がこのようなものを……。……これで満足か」

扉を開けて本多が出て来た。ユニホームも様になっているがこの服も結構似合っていると思った。女子と同じ様に白の長袖、薄茶のベスト。黒いネクタイ、黒の前掛け、白い長ズボン。こいつ、スタイル良いんだなって思って思った。

「ほらウェイター君、手伝つてよ」

「何故手伝わねばならん！！俺は部活の出し物へ……」

「ダメよ。クラスやらないで部活なんて有り得ない」

今度は服を汚さないように気をつけながら本多を引き摺って教室に戻る。

「じゃ、私は部活の方手伝ってくる」

「行つてらっしゃーい」

「待て！何故坂田は部活に行くのだ！」

「こつち（クラス）で仕事をしたからよ、あんたも頑張りなさい」

走り寄ってくる本多の目の前でピシヤリとドアを閉める。ブレーキが効かなかったようでガスリと向こう側で鈍い音がした。しばらくはこのまま頑張ってもらいたいものだ。美穂はそのまま教室から離れ階段を下りはじめる。

「あ、着替えてない」

どうやらあんなに嫌がっていたのにいつの間にか慣れてしまってい

たらしい。しかし着替えは教室に置いて来てしまっている。

「これで行くしかないのか……」

部長に会ったらかわれそうだと若干の不安を感じ溜息をつきながら美穂は校門に向かって歩いて行った。

26 パソコン部女子（後書き）

最近勉強が面倒です。漢字なら得意なんだけどなー。

どうでもいいけど誰もお前の近況に興味なんて持ってないと思う。
後書きに書くことがないなら無理に書かなくても。

27 調理部男子

調理部とパソコン部の出し物がある校門に行くと、既に何人かの部員たちが集まっていた。

校門前ということもあり、大和たちの出し物は目立っているらしい。立ち止まり、クツキーの袋を手にしていく客の姿がちらほらと見えた。勝手に場所を決められてしまったものだから、多少の憤りを感じていたが、この場所は正解だったのかもしれない。大和は僅かに頬を緩めた。

大和はゆつたりとした歩調を少し早めた。

すると、松島がパツと顔を上げ、大和を見た。ばつちりと目が合ってしまった、何もしていないのになんだか気まずい。松島はすぐに視線を外し、青山に何事かを言った。青山も大和を見る。

「あ、先輩っ！ 遅いじゃないツスカ。俺らも始めてますよ」
「ん、ごめん。結構人気みたいだな」

大和がそう言うのと、青山と松島は顔を見合わせ、照れたようににひ、と笑った。仲の良い奴らだと微笑ましく思っていると、二階堂の姿がないのに気付く。少し離れているのだろうか。辺りを見渡しても見当たらない。単に多すぎる客の姿に埋もれてしまって見落としているだけなのかもしれないが。

大和の様子に気が付いた松島が口を開いた。

「二階堂先生ですかー？ それともパソコン部？」

探しているのは、と言外に含めて松島は大和を見上げた。大きくくりくりな瞳は小動物を思わせる。

「先生」

「二階堂先生なら調理室にクッキー取りにいきましたよー」

「予想外の売れ行きにクッキーが足りなくなっちゃって、後でみんなで食べようって残しておいたぶんも売らしいッス」

食べたかったのに、と青山がシユンと俯いた。そんなにクッキーが食べたかったのか。今度、作ってきてやろう。大和が密かにそんな決意を固めていると、パソコン部の滝下がやってきた。自棄にきよろきよろとしているが、夏輝を探しているのだろうか。

「おーい、こっちだ。パソコン部の奴だよな？」

「……どうも」

酷く無愛想な奴である。美穂から聞いていた印象とは正反対。大和は驚いた。美穂の話では夏輝が大好きな騒がしい人間だということだったが。夏輝以外には無愛想なのだろうか。

「部長はいらっしゃらないんですか。……はあ……」

「うん、いない」

滝下の問いに即答すると、滝下はがつくりと肩を落とした。最初からわかっていただろうが、それでもショックなようだ。あんな調理器具の何処が良いのか。大和には全く理解出来なかった、そして、どうでも良かった。二階堂はまだだろうか。

「あ、来たー」

不意に視線を校舎のほうに遣った、松島の気の抜けた声。滝下は俯かせていた顔を勢いよく上げた。大和は人懐っこい笑顔で客にクッキーを手渡してから松島を見た。大和からクッキーを手渡された女子中学生（と思われる）は可愛らしく頬を染め、きゃあと小さく黄色い悲鳴を漏らしながら友人のもとへと駆けていった。

「先生？」

「部長！？」

「副部長ー」

各々の期待していた人物ではなく、其処には喫茶店の店員のような服装の美穂が立っていた。美穂の姿を認めると、大和はきょとんとし、滝下はあからさまに隠しもせずため息を吐いた。

「なあんだ、美穂か」

「なんだ、副部長か……」

来て早々あんまりな態度に美穂の眉がぴくりと上がった。大和はそれに気付かず、美穂の見慣れぬ服装に不思議そうにしていた。

「……美穂、なんだ？ その恰好」

「うちのクラス、カフェで、着替えてくるの忘れちゃって……、」

申し訳なさそうにそう言いながら、美穂の瞳は何処か期待を孕んでいる。大和はにっこりと笑って言った。

「似合ってるなあ、可愛いぞ」

「……ありがとう」

美穂は頬を染め、はにかんだ。その後ろでは青山と松島と滝下が三人でひそひそと何事かを話し合っている。後輩たちは意外と気が合うのかもしれない。

「さっすが部長。天然タラシー」

「さっすが部長。鬼女と名高い坂田先輩を手懐けてる」

「副部長なんか気持ち悪い」

「聞こえてるんだけど」

我慢の限界が来ていた美穂。今度こそ美穂の強烈な蹴りが炸裂した。しかし、青山と松島はそれを華麗な動きでサッと避け、滝下だけにクリーンヒットした。

大和はそれを気に留めず顎に手をやり、考え込んでいた。松島が訝しげに大和を覗き込む。瞬間、大和は松島の顎をがっしりと掴んで自分のほうに真っ直ぐに向けた。

「うへあっ!？」

松島の奇怪な悲鳴に周りにいた人間たちの視線が集まった。美穂たち三人は啞然としていたが、周りの客たちは何処か色めき立っていた。

自分と大和が“そういう”もののだと勘違いされていることを一瞬で悟った松島は胃を鷲掴みされた気分だった。

部長のことは料理上手だし、とても尊敬している。でも、こういう誰にも先を予測出来ないような突飛な行動は慎んでほしい。松島は切実に思った。

「あの衣装良いなあ」

独り言のように呟かれ、次いで目が合う。松島はちょっぴり嫌な予感がした。まさか、と確信にも近い疑念を持った。

「お前も着たら可愛いと思うぞ。ちょっと美穂のクラスから借りてきてくれ。お客さん、たくさん来てくれるかも」

「……嫌ですよー。それに、あんな衣装に頼らなくなつて私は十分可愛いから大丈夫ですー」

「うん？　そうか。なら良いや」

あつさりと納得し、離れる大和。周りの客たちは戸惑いながらも何処か拍子抜けしたように離れていった。

そうやって、冗談で言つてる“可愛い”をあつさり肯定したりするから、色々な誤解を招くんだ。思い切り掴まれ、少し痛む顎を擦りながら、松島は恨めしげに大和を上目使いに睨んだ。栗鼠のように、と大和は思った。

「うわー……、部長デリカシーない……」

「副部长に可愛いって言っておきながらすぐに他の女に、しかも副部长の目の前で言つたよ」

うわあ、うわあ、と口に手を当て、滝下と二人で話す。滝下も青山と同意見のようで大和の阿呆さ加減にはさすがに呆れ顔だった。

まあ、と小さく呟くように青山が言う。滝下は青山を見た。

「実際、松ちゃんのほうが坂田先輩より可愛げあるんだけど」

「ああ……、言ってる」

「「あっはっはっ……ゴフウ!?」」

「うるっさい！」

怒りで顔を真っ赤にした美穂の制裁が阿呆二人に下された。痛

みに各々の患部を押さえる二人。周りで一部始終を目撃してしまった哀れな人々はドン引きだ。

「……お、なんか増えてら」

人混みを掻き分け、此方へ向かってくる男。男は大和たちを見ると僅かに目を大きくして、ボソリと呟いた。

「あ、先生！」

「へーへー、先生ですよっと」

二階堂に気付き、駆け寄る大和。二階堂は大和にクッキーを手渡し、今いる人間の確認をしはじめた。大和はクッキーの袋たちを台上に置いた。

煙草の臭いはしない。さすがのこの男も、人様に食わせるものを持ったまま煙草を吸うという暴挙には出なかったようだ。

「調理部は全員揃ってるが……、パソコン部、少なえな」

「すいません……」

「まあ、別に来ても来なくても俺一人いれは良いんだけどよ」

わざわざクッキーを売り捌くためにそう人数を割く必要もない、と二階堂は面倒臭そうに呟いた。単にたくさん生徒たちの面倒を見るのが嫌だったのだと思われる。

パソコン部である二人は気付いていないが、調理部の部員たちは気付いた。況してや大和は二階堂とは二年もの付き合いだ。二階堂の性格を把握していないわけがない。

相変わらずの面倒臭がり。どうして教師を志したのか。この男にはホストなどの水商売のほうがよく似合っているような気がする。大和はそんな考えを心の奥深くに押し込め、クッキーの袋を一つ手に取った。

27 調理部男子（後書き）

平和。

28 パソコン部女子（前書き）

片岡です。1日1話更新と書いておきながら、1日間を開けてしまいました。

本当に申し訳御座いません。

友人くたばれ（・言・）

28 パソコン部女子

なんだかんだ言っただけクッキーはかなり売れ行きが良かった。やはり私は作らなくて良かったと美穂は内心安堵した。

しかし残念なことにあのあと出し物のブースに来てくれたのは部長と杯田さんだけだった。部長が来たことで一人地面に伏したのは言うまでもない。というか部員多いのに来る奴少なすぎるだろ！絶対何処かでサボっているに違いない。美穂は後で何かしら手を打とうと考えた。

とにかく今日の文化祭で改めて分かったことは当たり前だが調理部は料理が上手いという事とパソコン部員はサボるのが好きだという事と私は後輩に嫌われているということだった。

美穂の服に関しては五分五分だった。大和は褒めてくれて嬉しかったが部長には大笑いされた。軽く下しておいた。

最初にも言ったがクッキーは本当に大人気だった。結果、時間をまあまあ残す3時頃に見事完売した。今年の部活の出し物の中では優秀な成績を修めたのではないだろうか。

ブースを片付けるのに時間がかかり解散となったのはその30分程後のことだった。

美穂は特にすることも無かったため寄り道もせず真っ直ぐ教室に帰ってきてしまった。

ガラリと扉を開けてまず目に入っただのは本多だった。

「すいませーん、オレンジ一つ下さーい」

「待たせたな！」

「わ、早っ」

なんとも綺麗な、それでいて全く無駄の無い動きでお客の要望に
えていく本多。もつと大変な事になっていると思っていたが意外と
そうでも無いようだ。今はこのカフェの看板息子と言えるくらいの
働きぶりではないだろうか。

「お疲れ、本多」

「むっ、坂田！遅いではないか！」

「ん、悪いわね。部活はもう終わったから大丈夫よ」

「そうか、良かったな！」

本多は自分の部活じゃないのに嬉しそうに頷いている。良いところ
があるじゃないか。しかし部活という言葉を出しても自分は戻らな
い所を見ると此処に居て手伝うのは満更でもないようだ。

「本多君、こっちに烏龍茶と紅茶お願いー」

「うむ！任せておけ！」

「坂田さん、こっちはバニラアイス二つね」

「ん、了解」

本多は慣れた手つきで烏龍茶と紅茶を注いでさっさと運んで行った。
美穂もアイスを運ぼうと誰かが持って来た小型の冷蔵庫を開けて中

を覗いた。

「……無い」

無かった。お客に出さなければならぬバニラアイスが一つも入っていないかったのだ。近くのコンビニに買いに行くという手段があるが、近くと言っても10分くらいはかかるだろう。そんなに長い時間お客を待たせるわけにはいかない。美穂が悩んでいると不意に隣に人が現れた。

「どうした坂田!!」

「うひゃあ?!」

本多はやはり油断できない。いきなり大声で話し掛けられたので美穂は思わず尻餅をついてしまった。しかし本多はキョトンと眺めている。…もしかこいつは天然なのか?

「……どうした?」

「え、…ああ。実はバニラアイスが品切れだね。買いに行くっていう手段もあるんだけどちょっと遠くて……」

それだけ言うと本多は「なんだ、そんなことか」、と何でもないかのように鼻で笑った。…こいつたっぱりちよつとム力つくな。

「何か手があるの?」

「ある!」

「何よ」

「俺が買いに行けば良からう」

本多はあつさりとまるで当たり前の事のように言い放った。確かに本多は野球部キャプテンだし足には自信があるだろう。だが短い時間で戻ってこれるだろうか。…しかし何を考えても他に良い方法は見つからなかった。ここは彼に頼むしか無いのだろう。

「頼んで、いい？」

「任せておけ！」

さつきも聞いたような言葉を残して本多は早々に教室を飛び出して行った。行動力があって助かる。美穂はお客に暫くお待ち下さい、と告げて彼を待つことにした。

—— 5分後 ——

「買って、来たぞ……」

本多が息を切らせてなだれ込む様に教室に入ってきた。袋を見てみれば結構な量を買ってきたようだ。これならかなりの間持つだろう。

「これで、…大丈夫か」

「うん、大丈夫。ありがとう本多」

「そうか、良かった」

早くも息を整えた本多は何度か深呼吸をしてからお客に注文を聞きに行った。美穂はアイスを冷蔵庫に入れてから注文の数を持ってお客の所に行った。

「お待たせいたしました！バニラアイス二つです」

ニコリと営業スマイルではなく、美穂の素の笑顔でお客にそう言った。

29 調理部男子

「広崎！ 用がある！」

きりりと凜々しい表情の本多。いつも感じられる何処か向こう見ずな雰囲気は鳴りを潜め、その“用”には何か深刻な内容を思わせる。

「俺には無いから」

しかし、お前の用など知ったことか、と大和は笑顔で教室のドアを閉めた。すぐに怒りで顔を真っ赤にした本多の手によってドアが開かれる、と思いきや、珍しく“それ”はなく、沈黙を守っていた大和が不審に思っていると、ドアが開く。

「よお！ 少年！」

「まな板娘はお呼びじゃない」

大和は無表情でドアを閉めた。夏輝の笑顔が少し引き攣っていたように見えたのはきつと気のせいだろう。

先程から開閉を繰り返すドアの音に何事だ、と宮城が顔を出す。

なんでもない、と首を振り、宮城に配置に戻るよう告げる。

文化祭も後僅か。やっと此処に戻ってこれで、さあ、あと少し、頑張ろうというときに、どうして奴らは現れるのか。

そんなとき、そつと開かれるドア。またか、とうんざりしていると、見えた顔に大和は目を大きくした。

「あの……、広崎くん」

其処にいたのは、菖蒲だった。おずおずと遠慮がちに此方を覗き込む菖蒲に大和は優しく訊ねた。

「あれ、会長。どうした？ 何か用事か？ 中に入っていていいぞ」

「その対応の差はなんだ！」

戸惑いを見せる菖蒲を快く迎え入れると、それと一緒に飛び込んでくる不要物。大和は拗ねたように唇を尖らせ、二人をねめつけた。

「自分の胸に手を当てて、よく考えてみたらわかるんじゃないか？」

飽くまで熱くならないように、穏やかに、しかし辛辣な言葉を吐き捨てた。すると、夏輝はによにと気味の悪い意地悪な笑みを浮かべ、揶揄やゆするような声色で言った。

「わー、少年、セクハラー」

大和がその言葉に何事かを返そうとすると、本多が咎めるような目で夏輝を見た。「な……なんだよっ」と、夏輝も怯んでいる。おや、と思っていると、本多が一言。

「やめんか、夏輝！ 広崎とて人を選ぶ権利はある！」

「てめえええええ！ 選手生命に一瞬でピリオドを打ってやろうか
！！」

本多の胸倉を掴み、顔を近付ける夏輝。本多はそんな夏輝に対抗してアイアンクローを仕掛けながら、夏輝を睨みつけた。魚介類の求愛行動。またはなんらかの儀式なのだろうか。大和はそんなことを思った。

「会長。まな板とハゲは放っておいて、用事はなんだ？」

「えっ……。あ、あの……。え？」

「誰がまな板だあ！！」

「誰がハゲか！ 全く……。」

菖蒲の背を押し、奥へ追いやろうとする大和の眩きを耳聡く拾い上げ、怒鳴り散らす二人。

しかし、すぐに落ち着いた。

いつもだったら、怒っていつまでもぎゃあぎゃあと喚くはずの二人は、じっと大和を見つめ返している。

その様子に、大和はやつと三人の用事が戯れのようなことではないことに気付き、口を引き結んだのだった。

忙しくて疲れているだろうから、と優しいクラスメイトたちに見送られ、大和は今、生徒会室に来ていた。

生徒会室についた途端、夏輝と本多は我が物顔で椅子にどっかりと座った。夏輝に至っては茶と菓子まで要求している。

何処までもこの阿呆共は自分本意でしか動けないのだということを大和は再確認した。

「……それで、いったいなんの用なんだ？」

ついでに、と菖蒲が淹れてくれた茶を啜りながら、大和は訊ねた。夏輝は菓子を貪り、上体を机に倒しながらちらりと大和を見た。そして、その目は気まずげに逸らされる。なんなんだ、と大和が眉を顰めると、本多が言い淀んだ。はっきりとしない口調の本多は見慣れぬせいか、酷く気持ちが悪い。

「お前は、嫌がらせをされているのか」

静かな言葉に、大和は一つため息を吐き、虚空を見つめた。答えは返さず。二人には目もくれず、夏輝は煎餅に手を伸ばす。本多はまた訊ねた。先程よりも語調を強め、ぼつり。

「嫌がらせを、受けているのだな」

訊ねる、というより、それは確認であった。本多たちの中でそれはすでに揺るがぬ“答え”として其処にあるのだ。

用事はこれか、と大和は少しだけ面倒臭そうな顔をした。

本多は大和の表情の変化に気付かず、続けた。

「……菖蒲から、聞いた。お前が越戸に絡まれていた、と」

「ただの、悪ふざけみたいなものだったら、良かったんだけど……」

本多の重々しい呟き。菖蒲は泣きそうに顔を歪め、下を向いた。重苦しい空気。夏輝はまた菓子を手にとった。そして、口に入れる。まるで、静寂が訪れるのを恐れるように、夏輝はばりばりと煎餅を噛み砕き続けた。

「もう……、戻らないのかな……」

吐息混じりの声はゆっくりと空気に融けた。

“戻らない”とは、いったい何を指すのか。突如、変貌してしまった生徒会の仲間たちか。それとも、不穏な空気が常に漂う学校か。

——両者、だろうか。

「……仮に、」

大和が切りだした。夏輝がぴたりと動きを止める。真っ直ぐに、大和を見た。食べかすがついたままの顔でそのように見られても、ただ滑稽なだけだ。なのに、笑えなかったのは何故だろう。

「仮に俺が嫌がらせを受けているのだとして、
「、ちよつと……」

僅かに目を見開いた夏輝が怒りのような表情を見せた。伊達眼鏡の向こうにある瞳に、炎が揺らめいたような気がした。菖蒲が唇を噛んだ。

「仮にとはなんだ広崎！ お前……！！」
「仮定つて意味だ。そんなこともわからなくなったか」

茶化すように吐かれた言葉に本多は何かを言おうと唇を戦慄かせ、閉ざした。大和はその様を見てフツと笑った。幾つもの感情がまぜこぜになったような、不思議な笑顔だった。

「それがお前たちに、なんの関係があるんだ？」

冷たく突き放すような言葉に、三人は目を見開いた。大和は相も変わらずにここにこと人懐っこい、いつもの笑顔で笑っているのに。感じる壁はなんだ。

「っ関係あるに決まっておろうが!!」

本多は咄嗟に叫んだ。このまま黙っていたら、隔てられた壁の向こうから大和が帰ってきてくれない。そんな不安に駆られて。夏輝は瞠目して、しかし自らも首肯した。菖蒲は射抜くように真っ直ぐな瞳で大和を窺っている。

すう、と一瞬だけ、大和の瞳が冷めた。一人、それに気付いてしまった菖蒲はふるりと肩を震わせた。垣間見えたそれが、常に大和の笑顔の裏に隠されていた本音、なのだろうか。

「へえ、なんでだ?」

社交辞令で興味のないことを訊ねているかのような気の無い声。本多はそれを気に留めることなく、何故か勝ち誇ったような顔で言った。

「俺とお前が友人だからだ!」

どーん、と。夏輝はじいっと両者を見つめ続けている。菖蒲は啞然としている。大和は茶を啜り、最後の一枚の煎餅を取った。

なんの反応も返さない三人に本多が照れ始めたところで、煎餅を咀嚼し終わった大和が口を開いた。

「そうだった？」

「なんだと貴様！」

「冗談だ」

けられらと大和は笑った。大和のあんまりな言い様に憤慨していた本多も、その笑顔に毒気を抜かれたように力を抜く。

「……ただな、お前たちは何か勘違いをしているようだから、一つだけ言っておきたいことがある」

穏やかに微笑んで、大和はそつと言った。訝しげな三対の目が大和に向けられた。

「俺は、嫌がらせなんて受けてないよ」

は、と声にならなかった空気が、誰かの唇の間から漏れた。大和は、此処でやっと温かみのある顔を見せた。自分の子供を宥めるような、そんな困ったような表情。

「あれはただふざけていただけだから」

“ふざけていただけ”。下駄箱に生ゴミを詰められ、脅されること
が、“ふざけていただけ”。

馬鹿を言うな。掠れた声に、大和は目を見開いた。本多は大和を
鋭く睨みつけていた。

「ふざけるな！ そんなに俺たちは信用出来んか！！」

「そうだぞー、少年。お姉さん寂しいー」

「ね、広崎くん。話してみて……？」

優しい声色に、大和は目を細めた。そっと、口を開く。

「会長……」

「貴様！」

此処に来て尚も二人の存在を認知しようとしないう大和。大和は眉
を下げて、笑った。

「でも、なんにもされてないよ」

頑なにそう言い張る大和に、菖蒲と夏輝が言い募ろうとする。し

かし、それを本多が止めた。諦めたわけではない。一つの答えに行き着いたのだ。

「なにっ……！」

「広崎は、気付いておらんのではないか？」

本多の声が、嫌に響いた。大和は暢気な顔で「何がだ？」などと言っている。菖蒲と夏輝はそんな大和を見てから、顔を見合わせた。

有り得る。

三人は一斉にため息を吐いた。

なんとか隠そうとしているのであれば、説得のしようもあるが、本人がそれに気付いていないのならば、もうどうしようもない。

それでも、と菖蒲が大和に言う。

「何かあつたら、すぐに言ってね。……心配、だから」

「……ん？ わか、った……？」

大和は首を傾げながら、戸惑いがちに頷いた。一先ずは良かったと安堵の笑みを溢す三人。そして、大和はただ笑った。

こうまでされて気付かぬ者がいるものか。じくりと痛みを訴えた右足に、悟られぬよう顔を歪めた。

29 調理部男子（後書き）

“くような”とか私使いすぎwww
長くなつてくると似たような言葉しか使えなくなつてくる私です。
知り合いに“上手な文章を書いているように見せるのが上手”と言
わしめた女だから仕方ない。

本多、夏輝、菖蒲の三人は何気幼馴染っていう設定。今作りました。

30 パソコン部女子

文化祭が終わって二日目。結局ベストクラス賞（クラスの出し物で良かったクラスに贈る賞）を貰ったのは大和のクラスだった。おめでとう。

昨日美穂は大和になにかお礼をしたいと思い、ついでにパソコン部員を懲らしめたいと思い、クッキーを作ることにした。

結果、成功した。一つ味見を試みたら、硬さも味も全く問題無かった。美穂は感動した。

不器用ではあるがなんとか綺麗に見える様にラッピングもし、今日持って来た。

ちなみにプレーンクッキーだ。

美穂は今日は楽しい日になりそうだ、と思いながら下駄箱に向かい、自分の下駄箱の扉に手をかけた。

——訂正。今日はとんでもない日になりそうです。

自分を見ている気配、それも殺気に近いものが悶々と漂ってきた。何か悪いことをしただろうか、と考えると何も無い気がした。だが、椿関連なら、かなりとは言わないが思い当たる事がある。

この前は説教もしたし、私が椿のことを良く思っていないことは向こうも分かっているだろう。

ああ、何でもいつも面倒な方向にしか進んでいかないのだろう。美穂は（別に信じているわけではないが）神様を呪った。

しばらくして殺気は消えた、だがあんなに分かりやすい気を出す奴は初めて見た。誰だったかはよく分からないが。

とりあえず下駄箱から靴を取り出して教室に向かう。教室にはいつも通りの女子と珍しく本多も来ていた。

美穂は軽く本多に挨拶をすると、準備をすぐに終わらせて大和のクラスに行った。

「大和……、あれ」

この時間にはいつも居るはずの大和が居なかった。寝坊でもしたのだろうか。

美穂が教室を見回すと、中に宮城が居るのが見えたので呼んだ。

「宮城。大和、知らない？」

「ん？大和？……あれ、そういえば居ないな」

宮城はキョロキョロと教室を見回した。宮城も知らないのか。じゃあどこにいるのだろうか。

「遅刻、か？」

「大和はそんなタイプじゃないんだけどな……」

うーん、と二人で考え込んでいると、後ろから不審者が現れた。

「広崎！用が、」

「よっ、と」

「ぐはあ？！..!」

裏拳を不審者の腹にクリーンヒットさせる。倒れ込んだ不審者を見

てみれば、不審者はどうやら本多だったようだ。

「あ、本多。ごめん」

「軽いな」

「……………！」

結構良いところにヒットしたらしく、未だに悶絶している本多。酷いなあ、まだ本気は出してないのに。

しばらく本多が復活するのを眺めながら待った。野球部で鍛えているお陰か、さすがに復活が早かった。一分程で本多は立ち上がった。

「で、あんたは何しに来たのよ」

「どうせいつものこ、」

「勧誘だ！！」

本当に馬鹿でかい声だ。相変わらずで何よりだが、喉は痛くならな
いのだろうか。

とりあえず私は今ので耳が痛くなった。仕方ない、教室に戻ろう。

「宮城、大和来たらこれ、渡しといて」

「ん？いいけど……。自分で渡さないのか」

「うん、大丈夫」

今は此処から離れたいから、とは言わずに早足でその場から離れた。

美穂はこのあと何の勉強をしようかと考えながら歩いた。

30 パソコン部女子（後書き）

セインさん、感想ありがとうございます！！
こんなヘタレですがこれから頑張ります！

私からももう一度、有難う御座います。

どうして一般の女子高生が殺気なんてものがわかるのかは突っ込まないでやって下さい。この子は阿呆なんです。

もしかしたら美穂は暗殺一家の一族っていう裏設定があるのかもしれないけど。

31 調理部男子

大和の好きな菓子は和菓子である。和菓子の、あの自然な甘味が好きなのだ、と大和と親しい人物ならば、きっと一度は聞いたことがあるだろう。

大和は、洋菓子はあまり好まない。食べれるし、美味しいと感じられるものも勿論あるのだが、どうしても不自然な甘ったるいそれが舌に付き纏う。

自然な、あの素朴な甘さが好きなのに、洋菓子はまるで計算し尽くされたような甘さ。

つまり、何が言いたいのかというと。

「少し小百合さんに構っていただけにいるからと、調子づくの多い加減にしてほしいものだな」

大和は計算し尽くされた甘さは嫌いだし、其方の勝手な妄想を押し付けないでほしいということだ。

大和は自分よりも幾分か低い頭を見つめて頬を掻いた。どうしても自分は絡まれるのか。何かそういった成分的なものが自分からは滲み出しているのだろうか。そうだとしたら少し、いや、かなり嫌だ。

大迷惑なことに、教室に向かう途中の大和をひっ捕まえて階段の踊り場の影に連れ込んだこの男の名前は、日野宮^{ひのみや}京^{きょう}。一年生で、書道部の若殿と名高い人物だ。

そういえば、こいつは一年生なのに先輩である自分に対し、敬語を使っていない。そんな些細なことで怒るほど心は狭くないつもりだが、心象は良くない。大和は目を細めた。

少女と見紛うほどに可愛い容姿とは裏腹に、男気溢れる口調。そのギャップが良いのだと女子たちは騒いでいた気がする。

男気溢れるのは口調だけなのだろうか、と初めてその話を聞いたときは首を捻ったものだが、

(なるほど……、)

大和は深く納得した。人目のつかぬ暗がりへ連れ込み、ねちねちと相手を攻撃する。これでは丸つきり腐った女だ。いつそのこと女にでもなってしまうえば良いのに。大和は日野宮の話を適当に聞き流しながらそう思った。

それにしても、先程からかなりの生徒たちの声と雑音が反対側の階段に消えていく。時間は結構経っているのだろう。このままじゃ遅刻をしてしまうかもしれない。日野宮はさつきから同じことを繰り返しているばかりだ。結論を急いでほしい。

「——それで……、っ貴方は人の話を聞いているのか!？」

明後日のほうに顔を向け、明らかに話を聞いていない様子に日野宮は苛立ちを見せ、大和を引っ張った。小柄な身体つきに似合わず、力強い。突然のことに対応できるはずもなく、大和の身体は傾いていく。

「あ……、」

大和は声を漏らした。

身体が傾いたということは、バランスを崩したということだ。バランスを崩したということは、足元がかなり不安定だということ。

足元が不安定なら、転びそうになるのは当たり前だ、とすると大和は浮かせてしまった左足の対にあたる足で全体重を支えるしかないわけ。

小百合の信者共によって傷付けられた、右足で。

「つつ……！　ぐあ、！」

「……え？」

普通に歩いているだけでも痛みを感じる足。そんな心許ないもので支えきれぬわけもなく、大和の身体は落ちていく。日野宮の呆気にとられたような顔と声。手摺を掴もうとして、空を切った自分の手。すぐに見えなくなった。

冷たい床に叩きつけられた身体。遅れて鈍い音が頭の中に響いた。じんじんと痺れるような痛みが背中から、身体中を侵食していく。

「くっ……、っは、うあ……」

咄嗟に頭を打ちつけないように左手を下敷きにしたせいで、尋常じゃない痛みが左手に走る。無意識に荒くなっていた呼吸を何度か深く息を吸って落ち着かせると、大和は上半身を起こした。

痛みを少しでも和らげようと、手をぶらぶらと振ってみる。勿論、痛みは引かない。

踊り場から足音が遠退いていったのと、気配が全くしないことを考えると、日野宮はさっさと何処かへ行ってしまったのだろう。日野宮のせいで自分は落ちてしまったのに、薄情な奴だ、と少し不機嫌になる。

それにしても、どうして自分は利き腕である左手を下敷きにしてしまったのか。大和は真っ赤になってしまった左手の甲を見てから深いため息を吐いた。

そんなこと、わかりきっている。一番近かった手摺が右側にあつて、大和がそれに右手を伸ばしてしまったからだ。そのせいで素早く動かせたのは脳からなんの指令も受けていなかった左手だけ。

しかし、困った。調理部は手が命だし、それにこんな手じゃノートも満足に取れない。痛みは全く治まらない。痺が入っているのかもしれない。考えれば考えるほど不都合な点が出てくる。

「どうしよう、かなあ……」

自分の情けなさすぎる声に、口許に苦い笑みが上ってくる。とりあえず、保健室に行こう。

結局、大和が戻ってこれたのはそれからかなり時間が過ぎた三時限目のことだった。やはり、骨には輝が入っていたようだ、保険医と共に直行した病院で、そう診断された。

保険医にはどうしてこんな怪我をしたのかと問い詰められたが、曖昧な物言いでなんとか誤魔化した。どうせ言うなら、今じゃないほうが良い。

追い詰めて追い詰めて、その最後に奴等の罪を耳元で優しく囁いてやれば良い。自分の犯した罪を、噛み締めながら朽ち逝けば良い。ガラリとドアを開けると、一瞬で自分に集まる視線。一つ瞬きをしてから、大和は首を傾げた。

「……どうした？」

「大和ッ！ お前っ、骨に輝ってどういうことだよ！」

当たり前だが、大和の怪我のことは既に学校に報せてあったらしい。まさか、それが生徒側にまで伝わっているとは思わなかったが。

そう一番に大和に声をかけ、なおは宮城だ。なんとも悲痛そうな

顔で大和を見つめている。心配をかけたか、と少し申し訳ない気持ちになった。

「ちよつと階段を踏み外してなあ……」

照れたような顔を作り、頭をがしと掻く。すると、宮城は素直に騙されてくれたようで、目を剥いて怒鳴りはじめた。

「はああ!?! 馬鹿じゃねーの!?! 馬鹿じゃねーの!?!」

「うるさい赤点!!--」

「ばらすな阿呆!」

これで、良い。ひっそりと大和は笑んだ。このまま有耶無耶になつて、消えてしまえば良いのだ。お前が気にかかるほどのことでもないから。

大和はぶすくれたような表情のまま、席についた。次の授業を確認し、教科書を出そうと机の中を漁っていると、宮城が話しかけてきた。

「これ、そーいや預かってた。渡しとくわ」

「なんだ?」

「美穂が作ったんだって。胃薬も一緒につけてくれりゃ氣い利くなつて感心したのに」

用件だけで済ませれば良いのに、余計な一言まで付け足すのが宮城らしい。大和は少し笑って美穂の手作りクッキーを受け取った。中を開けて見てみると漂い、鼻孔を擽る仄かな甘い香り。プレーンクッキーだ。見た目は普通である。見た目は。

今回はどんな“とんでもクッキー”になっているのか。大和は恐る恐るクッキーを口許に持っていた。その様子を見た宮城が吹き出し、一言。

「さっき俺食つてみたけど、大丈夫。珍しく普通だった」

「勇気あるなあ、お前。でも人の貰い物を勝手に食うのはどうかと思うぞ」

まあ、良いけど。大和は呟き、クッキーを口に入れた。口に広がった“普通のクッキーの味”。固まった大和に何故か宮城が得意げに言う。

「な、どうだ？ 凄いだろ？ ……大和？」

悪臭もしない。馬鹿みたいに形が崩れてるわけじゃない。味は不味くない。歯が砕けてしまうのでは、と思わず心配になるほど硬くもない。……普通、だ。

「……不変は有り得ない、か」

大和は目を伏せた。

不変は有り合えない。そう、何一つ変わらず其処に存在し続けるものなど、あるわけがないのだ。姿形は変わっていなくとも、中身は必ず変わっている。

美穂も、小百合も、学校も、そして、大和自身も。

何一つ変わらなければ、楽なのに。

大和はそんな言葉を呑み込み、クッキーをまた一口に入れた。甘い。甘くて、苦い。

「……………」

クッキーはちょっぴり焦げていた。

31 調理部男子（後書き）

私は洋菓子大好きです。

小百合と連動して大和も病んできた不思議。

今更ですが誤字脱字等御座いましたらお教えいただけると嬉しいで
す。

32 パソコン部女子

今は昼休み。

生徒が遊びに行ったり、昼食を楽しむ、穏やかな時間だ。

そんな中、美穂だけは穏やかでなかった。

なんだか、そわそわする。落ち着かない。

クッキー、大丈夫だったかな。変な味じゃないかな。異物は入っていないかったかな。お腹壊さないかな。

何度も、何度も確認しながら、味見もちゃんとしたのに落ち着かない。

なんでだろう。大和の事が心配だから？

それならそもそもクッキーを作ったりしない。

大和に感想を聞きたかった。

だが、午前の授業は忙しすぎて結局会いに行けなかった。

売店で買ったお気に入りの商品、焼きそばパンをまた一口頬張って気が付いた。

——なんで、大和の事ばかり考えてるんだろう。

今まで、こんなこと……あったかな。はて、と首を傾げるといつの間にか焼きそばパンを食べ終わったことに気が付いた。

本来ならこのあとは勉強に入るのだが、美穂はそんなことはすっかり忘れていた。

美穂は大和のいるであろう教室に向かった。

……

「大和は、つと…。いたいた」

今回も近くに偶然いた生徒に話しかけ、大和を呼んでもらった。もはや気にすることもないが予想通り、宮城もくつついてきた。だから、なんでいつも来るの？

「大和、クツキーど、……どうしたのよ、それ」

一気に浮ついていた気分が冷めた。急に冷静になった。宮城は何言ってたこいつ、という顔で見ている。

「…知らないのか」

「知らないから聞いてるんだけど」

マジかよ、と呟いて頭を掻く宮城。いや、結局何があっただよ。

「階段で、踏み外したんだと。それで手に輝が入った、らしい」

手に、輝？

あの運動神経抜群の大和が、階段を踏み外した。

もう一度見てみれば怪我をしているのは左手。左手って言ったら大和の利き腕じゃないか。

美穂の頭からクツキーの存在が吹っ飛んだ。

「え、大和何したのよ」

「いや、ちよつと…」

曖昧な表現で、苦い笑顔で笑っている。

他人から見れば「やつちやった」、と見えるかもしれない。

だけど美穂はいつもと違う、あのふんわりとした笑い方をしない大和が、不自然すぎて、違和感を持った。

「何か、隠してる？」

一瞬、大和から表情が消えた。

でも本当に一瞬だった。大和はまた、あの不自然な笑顔に戻り、「何が？」と尋ねてきた。

特に変わらない気がするのに、見た目はいつもの大和なのに。何かが違う。

何だろう、大和がすごく遠い存在に見える。

「……ううん、何でもない」

「そっぴえば何しに來たんだ？」

今度は大和から質問が返ってきた。

大丈夫、いつもと同じ大和じゃないか、と自分に言い聞かす。半ば、無理矢理に。

「あー、忘れちゃった。宮城、何だっけ」

「俺にそれを聞くか」

はあ、と呆れたように溜息をつく宮城。そして吐き捨てる様に「わかんねえよ」、と答えた。そりゃそうか。でも美穂は結構本気で忘れていた。

さっきまであんなに落ち着かなかったのに、何だっただけ？
考えたが完全に吹っ飛んでいて用件は欠片も残っていなかった。

「思い出したら、また来るよ」

「ん、そうか」

「またな、美穂」

「美穂って呼ぶな」

「だから何で俺だけ!？」

そのまま美穂が教室に戻ると本多が近寄ってきた。どうした、珍しいな。

「坂田、何か知らんがお前を呼んでいる奴がいたぞ!」

「誰？」

「知らん!」

きつぱりと言いつ張った本多。いや、そこは聞いておけよ。

何か言っていたかどうか聞いてみるとこれにはまともな返事が返ってきた。

「戻るときにまた来る、と言って早々に帰ったぞ」

いや、それよりもまず名前だろ。お前は回路が故障してるのか？

「そ。ありがとう」

とりあえずお礼を言って席に戻る。

時間はまだあるので勉強をすることにした。

それにしても私の友達だったら本多が知らないはずはないんだけどな。

……誰かそんな奴いたかな？

美穂は首を傾げた。

33 調理部男子

ノートが、とれない。

授業が始まって大和が最初に思ったことは、それだった。

しかし、授業はそんな大和に構うことなくどんどん進んでいく。今、三回黒板がチョークの白い文字で埋め尽くされて、消されていくのは四回目。

もうやだ。生まれ変わったらバニラエッセンスになりたい。みんなをバニラの良い香りで包んでやるんだ。大和が全力で現実から顔を背け始めた頃、チャイムが鳴った。

「はい、じゃあ今日の授業は此处まで。広崎、お前はちょっとこつち来い」

「先生、俺、レモングラスでも良いな」

「何が？」

二階堂は大和に向かって手招きをした。背後から宮城の心配そうな視線が突き刺さる。大和はそれに気付かないふりをして二階堂の後を追った。

「広崎、正直に言えよ」

指導室に入るなり、二階堂はそう切り出した。真っ直ぐに自分を見つめるその目が、何故か酷く憎らしい。大和は居心地悪そうに硬いパイプ椅子の上で身動きした。

「お前、虐められてんのか？ それとも、嫌がらせされてるとか」
「先生まで、なんだ。そんなに俺を可哀想な奴にしたいのか」

間髪入れず、苦笑いで大和は答えた。二階堂は目を逸らさない。窓の向こうに見える木から、雀が飛び立った。

……もう少し、受け答えにゆとりを持ったほうが良かったかもしれない。大和は少しだけ後悔した。怪しまれている。

「だいたい、どうしてそんな話が出てきたんですか」

そんな馬鹿げた話が、いったい何処から漏れてしまったのか。奴らがばらしたということはまず有り得ないだろう。何か考えがあるならばまた別だが、わざわざ自分たちの不利益になるようなことを明かす意味がわからない。

二階堂は目を伏せた。

「……見た奴がいたんだよ。お前の下駄箱に、ゴミ詰め込んでる越戸を見た奴が」

少しは周りを見て行動をすれば良いのに。生徒会に入っているくせに、越戸は馬鹿なのか。そうか。

しかし、大和は一切動じずに二階堂を見た。

「ええ？　なんだ、それ」

全く身に覚えが無い、と笑う。そんな大和に二階堂はため息を吐き、指導室に設置されている時計を仰ぎ見た。もうすぐ、授業が始まる。二階堂が小さく舌を打った。

ようやく解放されると思っていた大和の耳に飛び込んできたのは、全く真逆の言葉だった。

「広崎、サボれ」

呆氣に取られた。

常日頃から教師らしからぬ教師だと思っていたが、まさか生徒にサボタージュを強制させるだなんて。

大和は戸惑いながら訊ねた。

「……先生、授業は？」

「俺はない」

俺“は”。そうか、それなら良かった。二階堂はサボっていてもなんら問題はない。じゃあ、

「…………俺の授業は？」

「だから、サボれ」

大和に選択肢は残されていないようだ。

仕方なく大和は浮かせていた腰を降ろし、二階堂に向き直った。

大和は二階堂を睨むように目を眇め、ぽつりと呟いた。聞き逃してしまいそうなほど、小さな声で。

「…………見て見ぬふりをしていれば、楽なのに」

「馬鹿言うな。やい刹那自分の部の生徒だぞ」

二階堂は大和の言葉に驚くこともなく、サラリと答えた。こればかりは、大和も目を見張った。いつもと違う自分を見て、この反応裏表のありすぎる自分には、大和でさえも気味が悪いと思っているのにも関わらず。

「大抵の教師はこういうとき、見捨てるよ」

「じゃあ、俺はその“大抵の教師”の中に入っていない教師ってことだ」

何を言っても二階堂は引き下がらず、ついに大和は黙り込んでしまった。沈黙を容易く破り、二階堂は落ち着きのある声で訊ねた。

「で、結局、嫌がらせされてんだろ？」

言いたくなかったのになあ、と大和は顔を顰め、そっぽを向いてしまった。それは、肯定の意だった、二階堂はにやりと笑った。そういう皮肉げな表情が似合っているのは、教師としてどうかと思う。大和は憎まれ口を叩いた。

「大変だねえ、お前も。まあ、どうにもこうにもなくなったら、なんでも良いな」

「え……」

ぼんぽんと大和の頭を軽く叩き、二階堂は立ち上がる。大和は思わず顔を上げた。これで、話は終わりなのか。

「せん……」

「俺あなあ、広崎」

「……………」

先生、と呼びとめようとした大和の声を遮り、二階堂が言う。仕方なしに大和は口を噤んだが、不満がたっぷりなのはその表情から見てとれる。

「嫌がらせ受けてる可愛い生徒を見捨てるほど薄情じゃねえが、その嫌がらせを止めさせてやるほど良い先生でもねえんだ」

大和は瞬きした。結局二階堂は、大和への嫌がらせの確認を取ったかっただけで、それ以外は助けを求められない限り、何もするつもりがないと言っただけだ。

「それに、なんかお前助けてほしくなさそうだし」

大和は思わず吹き出した。ああ、確かにそう思っていた。

「先生って、面白い」

「そうかあ」

二階堂は意味がわからないと言わんばかりに首を傾げた。

33 調理部男子（後書き）

二階堂を冷たいと思うも優しいと思うも自由です。
彼は大人ですが、子供のような一面もありします。多分。

34 パソコン部女子

美穂は家にいた。

サボったわけではない。学校が終わって、帰ってきたから家に居るのだ。

しかし、暇であるにも関わらず、美穂は宿題に全く手をつけていなかった。それどころか今まで違うことをしていた。

ちらりと横目で机に乗った二つの皿を見る。

クッキーが出来たのだからプリンだって出来るだろう、と考えたのが甘かった。

昔のような形ではない。形ではない、か、黒焦げだった。

どうやったらこうなるのだろうと、美穂は三分前までは考えていた。しかし今は諦めてソファに座っていた。若干拗ねていた。

黒焦げの過程はクッキーにもあったから、次はうまくいくと思って作った第二号は、トラウマと同じ形となった。

美穂はそんな失敗作を見るのを止め、違うことを考え始めた。

あの表情は、何だったのだろう。美穂にとつてこの事是一種の謎解きの様なものだった。しかも、特別入り組んだもの。

あんな表情を、美穂は今まで見たことが無かった。あれが大和の本当の姿？小さいときは、いつも柔らかな笑顔で笑っていたのに。

あの表情は、一体何を表しているのだろうか。

近くに置いておいた、昨日余ったクッキーを口を含む。

いつも失敗ばかりしていたのに、ようやく成功したクッキー。

なのに、大和のくれるクッキーとまるで違う。

あの甘味のある、優しい味。どこが違うんだろうか。

作り方？隠し味か何か？

…分からない。

「ああつ、もう！」

髪を思い切り掻きむしる。

何もかも分からない。なんだか自分が取り残されているようで、無性に腹が立った。

自分を残して、何かがどんどん進んでいく。

最近、なにもかもおかしい。

身の回りにいる男子だってそう。椿だってそう。学校だってそう。

……大和だって。

途方もなく寂しい気持ちに駆り立てられる。

…私って、こんなに弱い人間だったわけ？

自分さえも、分からなくなってくる。ひどく混乱する。

「私、何がしたいんだろ……」

最近自分が曖昧だ。

なんでもだおる。いつからこうなったんだろう。

面倒事には首を突っ込みたくなかった。むしろ避け続けたかった。

…いつの間にか巻き込まれていることが多かったが。

だけど、今はそんなことは言っていられなかった。

「とりあえず学校から、かな」

学校なら……、会長が一番詳しいはずだ。会長に聞けば、最近何か変わったことが分かることがあるだろうか。

明日から一段と忙しくなりそうだと美穂は思った。

もう一度口に入れたクッキーは、不思議と、味がしなかった。

34 パソコン部女子（後書き）

何かがおかしい。

…どうしてこうなった。

35 調理部男子

「ねえ、大和くん」

「……なに」

鈴を転がしたような愛らしい声。誰もがその無垢さに頬を緩め、聞き入ってしまったような声に、大和は素っ気無く返した。

少女は大和のそんな態度に気を悪くするわけでもなく、くすくすと笑っている。とろりと潤んだ飴色に吐き気がした。

吹いたり止んだりの風邪が、優しく、時に強く大和の髪を弄ぶ。

腕一本ほどこしか通らない狭く間隔の開いた、背の高い鉄製のさくに大和は背を預けた。人を閉じ込め、何人たりとも逃がさないその様子が、牢屋のようだ和大和は思った。

しかし、その牢屋が自分たちの命を守ってくれている。なんて皮肉なのだろう。

「ねえ、今、苦しい？」

「……………」

大和は何も言わず、遠い地面を見下ろした。くらり。目眩がした。このまま落ちてしまえば良いのに、誰でも。

頭上では名もわからぬ鳥が群れを成して飛んでいる。

冷たい石の感触に、眉を寄せた。

「ねえ、辛いよね。助けてほしい？」

「うっん」

此处で、初めて大和は小百合をしつかりと見た。微笑み、自分を見つめ続ける小百合。女神の如く神々しいその笑顔の中に、隠しきれないどす黒い悪意を見つけた。

小百合は困ったように人差し指を唇に当てた。ひゅう、とまた風が吹いた。それは小百合のスカートを翻し、そして大和を撫でてから遠ざかっていった。

「大和くん、強情なんだね」

「お互い様だと思っただけど、どうだろう」

「……そうかもね」

小百合は頬を染め、「大和くんと、おそろい」と呟いた。

大和には、小百合が何故自分に其処まで執着するのが、わからなかった。自分は料理上手だけが取り柄で、随分気の利かない男だと自覚している。小百合ほどの女であれば相手など選り取り見取りだろうに。

小百合は何も言わない大和を見ると、少しだけ寂しそうに言った。

「強情な大和くんも、好き」

大和が何か言おうと顔を上げると、小百合は笑った。

「でも、あんまり度が過ぎると、わたしにも考えがあるから」

「苦しくなりたくないなら、素直になってね」小百合はそう言い残すと、最後に名残惜しそうに大和を振り返り、屋上を出ていった。

「……——作りモノのくせに、」

そう言ったあと、大和はハッとして口を押さえた。

作りモノ？ 誰が？ 小百合が？ なんで？ どうして自分はそんなことを言ったのか。

大和はなんとか混乱する思考を抑えつけると、立ち上がり、屋上を後にした。

どうやら、大和のこの胸に巢食うおどろおどろしい感情は、憎たらしいほど晴れ渡った青に融けていつてはくれぬようだった。

「広崎！」

「大和！」

これは珍しい、と大和は突然の来客を見つめた。宮城は少し嫌そうな顔で来客たちの名を呟いた。

「本多と美穂だ……」

はふう、と浅いため息を吐き、これまた珍しく、宮城は大和から距離を取った。休み時間となると何故かいつも真っ先に此方へやってくるのに。きっと、本多と美穂が一緒にいると面倒なことになると思ったのだろう。

「どうしたんだ？ ……二人して」

いつのまにそんなに仲が良くなったのか、と二人を見る。その視線の意味に逸早く気が付いた本多が力一杯首を横に振り、否定した。

「余程の物好きでなければ有り得んだろう！」

「あんたねえ……、」

「じゃあ、俺は余程の物好きなんだ」

本多の言葉を聞き、大和がぼそりと呟いた。宮城が呆れた顔で大和を見ている。

「……惚気？」

意味がわからなかった。

「それで……、なに？」

「お前に用があつて来たのだ！」

「同じく」

本多の用件はなんとなく察しがつく。野球のことか、若しくは前にはぐらかしたあのことだろう。

ただ、美穂の用とはなんだろう。大和は内心首を傾げた。周りからの視線が痛い。少し騒がしくしていたから、クラスメイトたちも気になってきたようだ。

本多が難しい顔をして美穂を見る。

「なに、お前もか。しかし、俺のほうが重要な用件のはずだ。此処は譲ってもらおうか！」

「嫌。どうせ、あんたの用事なんて野球のことでしょ？」

「違う！」

美穂が目を丸くした。宮城も隣で口を開けている。次の言葉を吐き出す為だろうか。本多は胸に酸素を溜めている。大和は一瞬で本多のしようとしていることに気付き、本多の手を取った。そしてそのまま本多を引き摺り、教室の外に連れ出す。

最近、よく授業をサボっている気がする。単位は大丈夫だろうか。後ろから自分たちのものではない足音が聞こえたことに、大和は気付かなかった。

「本当に、なんなんだ……？」

「今日はお前に驚くべき事実を伝えに来たのだ！」

「驚くべき事実？」

何を言い出すのか。大和はじとー、と本多を見つめた。その目はなんだと本多が喚き散らす。

しかし、すぐに気を取り直すと、本多は大和の両肩を力強く驚掴み、言い放った。

「広崎！」

「な、なんだ？」

本多の馬鹿でかい声は廊下によく響く。授業開始間近で人気はないいとはいえ、こんなことでは誰かに聞かれてしまいそうで少し心配だった。

「お前は嫌がらせを受けているのだ！」

「……………」

大和は呆氣に取られて本多を見つめた。何を今更、と言いそうになったが、そういえば、己が強引に誤魔化したせいでちょっとした誤解が生じているのだったと思い出した。面倒臭い。

「、なんだ、いきなり失礼な」

「お前がどう思おうとお前は嫌がらせを受けているのだ！ 自覚しろ！」

わかったと言わない限り、退く気はなさそうだ。仕方なしに大和は言った。

「……そうなんだ」

「そうだ！ ではな！」

用件はそれだけだったらしい。本多は元氣にそう言うのと走り去っていった。

お人好し、と言うのだろうか、あれは。少し違う気もするが。

馬鹿正直な人間は好ましい。しかし、この場合は少し、要らない。

大和はため息を吐いた。すると鳴り響くチャイム。ああ、遅刻。

大和はゆったりと教室への道を歩きはじめた。ところで、美穂の用事はいつたいなんだったのだろうかと思いつながら。

真っ青な顔で大和の後ろ姿を見つめる美穂に、気付かずに。

椿 小百合視点9

「中々に君は、面倒なことをしてくれたな」

聞き慣れぬ男の声が耳元で囁き、思わず小百合は飛び起きた。突然のことに心臓が驚き、ばくばくと五月蠅い。辺りを見渡して、小百合は愕然とした。

「ど、何処よ、此処……」

何色もの色を重ね、無理矢理作ったかのような汚い黒が渦巻く空間に、小百合はいた。視界を埋める恐ろしい光景に小百合はへたり込んだ。

此方を見て、微笑む男がいる。

「本当に、面倒なことをしてくれたなあ」

しみじみと懐かしいことを思い出しているような優しい口調で男は言った。視線はずっと小百合に向けられている。

堪え切れぬ恐怖に小百合は叫んだ。

「あなた、誰なの!？」

必死な小百合を、これは面白いものを見たとしても言いたげに笑う。くつくつとなる喉に小百合の恐怖は駆逐され、代わりに怒りが降り積もった。

「さあ、誰でしょう」

「わたしを馬鹿にしてるの」

「まさか」

そう言いながらも男の表情は小馬鹿にしたようなものから動かない。

「広崎 大和」

「っ、」

男が呟いた名に、小百合は勢いよく顔を上げた。愛しい愛しい彼の名前。どうしてお前が知っている。

「彼はね、君が好いて良い男ではないんだ」

「ッそんなこと、勝手に決めないで!」

悲鳴にも近い声で小百合は怒鳴った。頭の中はぐちゃぐちゃで、怒りだけが其処にあった。目の前が真っ赤で何も見えない。

「彼もまた作られた存在であり、その上、本物には成り得ない存在なんだよ」

「黙ってよ……！」

小百合の押し殺したような低い声に、男は笑みを深めるだけだった。形の良い唇を、歪める。

「しかも、彼には決められた何人かの“お相手”がいるから」

その言葉がわからぬほど、小百合は無知ではなかった。わかってしまった。悟ってしまったのだ。大和が、どういう位置につかされている人間なのかを。

手が真っ白になるほど、拳を握り締めた。そんな小百合に気付いているのか、いないのか、男はぺらぺらとよく回る口を動かし続ける。

「彼はね、ヒロインの登場によって零こぼれてしまったモノを受け止める役割を持っているんだよ。つまり——、」

「黙れって言うてるでしょう!？」

小百合の、荒く吐き出す呼吸音だけが、暫くの間響いた。男の表情は仮面のように変わらない。人を食ったような笑みのまま、ずっと固定されている。

小百合も自分のことは言えないが、不自然な美しさと縫いつけられた仮面に、精巧な人形染みたものを感じた。

「——所謂、脇役だね」

見えない壁があり、反響しているように、そこかしこで男の音が響く。小百合は崩れ落ちた。

「良いかい、椿 小百合。覚えておくんだ」

何も聞きたくない、と小百合は緩く首を振って両耳を塞いだ。それでも、頭の中に直接響いているみたいに男の声ははっきりと聞こえる。

「彼は脇役。君はヒロインだ」

小百合はとうとう泣き出してしまった。はらはらと涙を流し、目は虚ろでいったい何処を見ているのか。

「脇役とヒロインが結ばれるなんて、あつてはいけない」

「……………」
「せいぜいメインキャラクターたちと甘いだけのお遊戯を楽しんでいなさい」

時期が来れば、迎えに来てやろう。男はそう言い残すと、黒の中に消えていった。

「いや……………」

小百合は幼子のように力無く首を横に振った。いやだ、いやだと繰り返しながら、ただただ泣き続けた。

「わたしの王子様は、大和くんだけだもん……………」

突如射し込んだ光に、小百合は自分の意識が覚醒していくのをぼんやりと感じていた。

椿 小百合視点9（後書き）

謎のある“男”が登場！

36 パソコン部女子

この前部長が、菖蒲に会えないー、と嘆いていたから会長は最近忙しいのだろう。

なので会長には事前に連絡して、朝に時間を取ってもらった。本当に有難い。

約束の場所の生徒会室に入る。実際、私が入っていいところかは分からないが、会長が此处が良いと言ったから此处になった、この際それに触れるのはやめよう。
会長は既に来ていた。

「遅れてすみません」

「あ……、ううん、私も今、来たところだから……」

とりあえず譲るような形になりながらも、机を挟んで向かい合うように座る。

「それで、聞きたいことって……?」

「最近の学校についてです」

そう言つと会長はサッと表情を変えた。さっきまでのいつもと同じようなおどおど感は無かった。
目で先を促されたので進めることにした。

「会長になら分かります、この学校がおかしくなってきたことを。でも、私には変化が分からないんです」

「……学校の変化が、知りたいの？」

「はい」

会長は溜息を一つつくところを見直した。
その目には憂いが宿っているように思えた。

「彼女……、椿さんが来てから、この学校は変わった。きっとね、彼女が悪いわけではないの。でも、彼女を切っ掛けとして、学校が崩れ始めた」

「崩れる？」

「秩序も、雰囲気も、友達も、もしかしたら先生も。なにもかもが音を立てながら、崩れていった……」

友達、と言う時に会長の声が揺れた。生徒会のメンバーのことだろうか。

私は『最近』という言葉で丸めていたが、考えれば椿が来た頃からかもしれない。椿がこの学校に来たのは確か……五月だっただろうか。

「具体的には、わからないけれど……」

「……そうですか。じゃあ生徒会で彼女に首ったけの人は？」

さほど考えもしないで会長は答えた。

「奥くんに……、越戸くん。あと他にも何人かいると思う」

「…すいません。ありがとうございました」

「えっ？もう……、いいの？」

「はい、大丈夫です」

会長は「そう」と呟いて、優しげに微笑んだ。

「では失礼します」

「……………気をつけてね」

部屋を出ようとしてかけられた言葉に振り返る。

会長は微笑んでいた。さつきとは違う、何か別のものを含んだ笑みだった。

……………

思ったよりも短い時間で、すごいことが聞けたと思う。だけど、あの時の笑みは何だったのだろうか。

美穂は教室にいた。授業も何時限か終わっている。

今は休み時間だった。

勉強道具は机の上に広げていたが手をつけていなかった。そういえ

ば、最近勉強不足だな、と皮肉げに美穂は笑った。

本当にいろんな事が一度に起こりすぎていた。

思わず頭を抱え込んで溜息。

最近溜息も多い、と美穂はまた小さく笑った。

ふと視線に教室を出ていこうとする本多を捕らえた、

……大和も何か最近の変化を知っているかもしれない。

本多と行くところでもないことになりそうな気がしたが、もう別に良いだろうと半分投げやりになりながら、本多の後を走って追った。

……

「広崎！」

「大和！」

二人で違う呼び方で同じ人を呼ぶ。
なんでか笑いそうになった。

「本多と美穂だ……」

美穂と呼ぶなといつも言っているのになんでこいつは呼ぶのだろうか。つっこむ気も既に起きなかった。

「どうしたんだ？ ……二人して」

逸早く言葉と目線に気付いた本多が反応する。

「余程の物好きでなければ有り得んだろう！」

「あんだねえ……、」

こいつ、良い奴だと思ったら調子に乗るな。
人を見る目が鈍ってきているのかもしれない。
美穂はまた溜息をついた。

「それで……、なに？」

「お前に用があつてきたのだ！」

「同じく」

本多が言いたかったことを言ってくれたので、適当に略しておく。
だけど本多の用事なんてほとんど分かりきっている。

「なに、お前もか。しかし、俺のほうが重要な用件のはずだ。此処は譲ってもらおうか！」

「嫌。どうせ、あんたの用事なんて野球のことでしょ？」

「違う！」

即答で否定されて驚く。

本多が野球以外の事情があつて大和の所に来るなんて、見たことがない。

本多が言葉を出すために息を吸う。

もし、そんな事情があるなら聞いてみたいと思い、割り込まないで見守る。

しかし大和は何を察したか本多の手を取ると、引っ張って教室から

出ていった。

宮城は口を開けてばかんとしている。
時計を見ればもうすぐ始業だ。本多を連れ戻す必要がある。

「全く……、手間掛けさせるんだから」

美穂は走って教室を後にした。

何処に行ったか分からないのでとりあえず当てもなく走ってみる。
体力はあまりあるほうではないが、時間がない。

「今日はお前に驚くべき事実を伝えに来たのだ！」

本多の馬鹿でかい声が廊下に響く。まさかこんな所で、あのはた迷惑な声が役に立つとは思わなかった。
意外と距離は近かった。

「広崎！」

「な、なんだ？」

自分から連れ出したのに、大和が勢いで負けていた。まああいつに勢いで勝てる奴は少なくともこの学校にはいないだろう。
声をかけようとした美穂は本多の声に遮られ、出せなくなった。

「お前は嫌がらせを受けているのだ！」

はつきりと、いつものよく通る声で、とんでもない事を言っただけだ。

大和が、嫌がらせを？

まだ二人は話をしている。なんて言っているかは聞こえない。入っ

てこない。

でも、これではいろいろと不可解なことが説明できる。

大和の左手。大和のよく分からない表情。

きつと繋がっているだろう。いや、絶対に。

考えられるのは椿の信者、小百合ちゃん親衛隊だ。

大和は椿の事で何か気付いたことでもあったのではないだろうか。

あるいはあまり相手にされない男子の嫉妬だろう。

足に力が入らない。美穂はその場に座り込んだ。

始業の鐘が聞こえた。

遅刻。しかし美穂には授業さえどうでもよく思えた。

……なんで、気付けなかったんだろう。

大和の事ならなんでも分かるんじゃないかと思っていたのに。急に

自分が馬鹿らしく思えてきた。

馬鹿馬鹿しい、何を考えていたんだろう。

自然と涙が流れた。

37 調理部男子

母親が最近、物言いたげな目で見てくるのが、大和はとても気になつていた。じつと、咎めるように労るように、穏やかでいて厳しい眼差しで、静かに大和を見つめるのだ。

「……何か言いたいこともあるのか？」

居た堪れなくなった大和がそう訊ねても、母——和やわらいはふわりと笑い、何処か寂しそうに首を振るのだ。しかし、今日は違った。

「悩み事でも、あるんじゃないかと思って」

手にも輝を入れてくるし……、とため息混じりの言葉。

「悩み事？　ないよ」

にべもなく大和はそう返す。平静を装ったつもりだが、味噌汁を慌てて飲んで舌を火傷してしまった。急いで器から口を離し、べえと舌を突き出した。和がその様を不思議そうに見ている。

「何してるのよ」

「火傷^{やへお}」

「馬鹿ねえ」

呆れたように笑われたので大和は少し恥ずかしくなってしまった。照れを誤魔化すために今度は白米をかつ込む。勿論、喉に詰まらせた。

「ん、ぐっ!？」

「ああ、もう。いつまで経っても忙しい子ねえ」

呆れたような声色を作っても、その顔は緩んでいる。和は立ち上がり、大和の背を撫でた、その際に、一緒に茶も渡してやる。

大和は茶を受け取り、飲み干した。

「っは、俺、もう行ってくる!」

「はいはい、行つてらっしゃい。気をつけるのよ」

「行つてきます!」

とうとう堪え切れなくなったらしい。羞恥で顔を真っ赤にした大和は椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がり、すぐ側にあった鞆を引つ掴むと足早に家を出た。

どんなに急いでいても行つてきますの一言だけは欠かさない大和

である。

「……広崎先輩、いらっしゃいますか」

何事も起こらず、放課後を迎えた。このまま今日は平和に過ごせると良いな。大和のそんなさやかな願いは儚く散ってしまった。

ぼそぼそと、陰鬱過ぎて此方まで気分が落ち込んでしまいそうな響きで、見慣れぬ後輩は大和を呼んだ。

最近、人から呼び出されることが増えたな、と思う。自分も人気者になったものだ。勿論、喜ばしくない方向に。

今回も、きつとそんなことであの後輩は大和を呼んでいるのだろう。目に、生気がない。

「俺が広崎。何か用か？」

「……用事もなきゃ、こんなところになんて来ませんよ」

またボソリ。嘲るように呟かれたそれ。うーん、と大和が困ったように目を泳がせる。新しいタイプの後輩にどう対応して良いのかわからない。

あんまりな態度が気に食わなかったのか、宮城が後輩を睨み付け、唸るように言った。

「お前、先輩呼び出しとしてその態度、ないんじゃないの？」

どうしていつもお前は自分の隣にいるんだ、と言いかけた口を閉じて、大和は今にも後輩に掴みかかりそうな宮城の身体を押さえた。後輩は仄暗い目のまま、宮城を見て鼻で笑った。

「たった一つ歳が違ってくるくらいで、威張りくさらないでもらえます？」

「てめっ……！」

「宮城、落ち着け」

自分のほうが体格が良いとはいえ、同年代の男を腕一本で押さえるのは中々に苦しい。宮城は大和を見て顔を歪めたあと、床に視線を落とした。自分を抑えるためだろうか。

「ごめんな。……此处じゃ話にくい話か？」

「、はい」

「じゃあ、場所を移そうか」

至って普通の様子で自分に接する大和。後輩は少しだけ目を大きくした。

一拍置いて、小さく頷く。そうか、と大和は後輩と連れ立って教室を出た。宮城は拗ねたように顔を顰めていた。

場所を移すと言っても、大和は良い場所を知らない。

屋上は小百合が何故か屋上の鍵を持っていたから入れたのだし、廊下では誰かに聞かれてしまう可能性がある。階段にはこの怪我が治るまで用が無い限りあんまり近付きたくない。

仕方なく、大和は後輩を調理室に招くことにしたのである。

「それで……、ええつと、名前は？」

「……新見にいみです」

「に、新見！ そう！ 新見だったな！ いやあ、背が伸びたな新見！」

新見、新見……。必死に記憶を探るも全く覚えがない。

自分の名前を知っているのだから、何処かで会ったことがあるのかと思っただが。自分が忘れていただけだろうか。だとしたらとんでもなく失礼だ。

大和は必死に愛想笑いをして場を乗り切ろうと試みた。

「……会うのは今日が初めてのはずですが」

「そ、そうだよな！」

結果、新見に訝しげな目で見られただけだった。

とりあえずさっさと本題に入ってこの気まずい空気を払拭してしまおうと、大和は切り出した。

「それで、俺になんの用事だったんだ？」

「単刀直入に、聞きます」

「……うん」

見えぬ大和の本心を見透かすように、新見は大和と目を合わせた。
奈落のように深すぎるその瞳に、大和は思わずぞくりとした。

「広崎先輩は、椿 小百合の敵ですか？」

椿の名を聞いた途端、大和は自分の中の何かがすう、と冷めていったのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9530x/>

逆ハーっ子 が あらわれた！（仮）

2011年12月3日20時45分発行